330.4
Su39

0018309000

0018309-000

３３０．４－Ｓｕ３９ウ

営団経済の倫理

杉村広蔵・著

大理書房

昭和１８

ADA

330.4
Su39

杉村廣藏著

營團經濟の倫理

大理書房刊行

961
118

序

經濟のことは、經濟人が責任をもつてやること、恰も戰さのことは、軍人がその重責を荷ふことくでなければならぬにも拘らず、經濟人の活動に充分な組織が缺けてゐたために、それが出來ないで今日に及んでゐる。俗に餅は餅屋といふが、もちろん餅屋でなくては餅が搗けないといふ筈のものではない。誰れでも餅ぐらゐは搗けるだらうが、もつと他の方面に役立つ人達が、無理な餅搗きをやるよりは、それはその道の人間にやらせた方がよい。註文の仕方さへよければ、これまでの餅屋の手で、かへつてよいものがつくれるに相違ないのだ。支那事變から大東亞戰爭にいたる數年の間に、經濟が如何にあるべきかといふ國の要請は、すでに見當がついてゐるのであるから、經濟人の生き方働き方といふものは、おのづから明瞭だといはねばならぬ。すなはち經濟人の活動の「場」は、自由經濟ではなくなつて、「營團經濟」ともいふべきものになつて來て

ゐるのである。問題は、この營團經濟を如何に經濟人が自らのものとして運營してゆくかにある。經濟人がおのれの職域に組織をあたへ、その奉公の誠を率直にあらはすために、營團の運營がある。最近相次いで設けられた營團の機構のごときは、經濟人に對する國家の附託のあらはれと考へて、これを自らのものとして生かすことに、全力を濺ぐべきである。かくすることによつて、經濟のことは經濟人が責任をもつてやるといふ途が確立されて、今日までの過渡的な經濟統制の煩雜から脱却し、經濟人としての清朗にして雄勁な進退が爲し得られるのではないかと思はれるのである。

しかし營團といふものは、まだ一般によく理解されてゐないやうである。組合の制度では間伸びがしてゐるといふので、統制會方式が持ち出されたのだが、この方式が適當か否かの試煉が充分なされたとも思はれぬうちに、今度は營團だといふので、幾分面喰つてゐる趣がないでもない。これを、機構いぢりにすぎてゐるやうで面白くないといふだけに觀る向きも少くない。なぜ營團機構が生れ出なくてはならなかつたかの根柢をつきとめやうとする氣分は、學者仲間にすら乏しい憾みがある。自由經濟を克服するための處置が、これほど進められて來た以上は、自由經濟を完全にのりこえた經濟社會が、どういふ姿のものであらねばならぬだらうか、さういふ方面から觀て、營團は、いかなる重要さをもつものであるかを考へて然るべきであらう。技術的あるひは法制的な統制會方式との比較だけで、營團を是非することは、決して問題の全貌を明かにする所以ではない。營團經濟は、企業の自由を規制し、その活動を定形化せむとする經濟統制が辿りつく終點から發足するものであるから、營團と統制會とを、現在表面にあらはれた事情だけから、その異同を論じてゐたのでは、到底その眞相をとらへることが出來ない。

抑も「統制經濟」といふものは、自由經濟から營團經濟への轉換をみちびくための措置にすぎないもので、それ自體、經濟形態として考へらるべきものではない。無數の會社企業を基礎とした個別的資本主義經濟の分散形態から、營團に收斂せしめられた集約的な經濟態勢に移行せしめるための方便を總括して、「統制經濟」と呼ぶのである。だから自由經濟と營團經濟とは國民經濟の異つた段階であり、それぞれ實質的な體系をなすものであるのに對して、「統制經濟」といふのは、ただ政策面を概念的にいひあらはしただけのものだ。彼此同列に見るわけにはいかぬ。この根柢をかへりみずに、統制會方式と營團との對照を考へるのは、事理をわきまへぬものとい

はねばならない。統制會方式が、會社企業の多數を前提として、むしろ政治的考慮の下に案出されたもので、營團が會社企業とは獨立した經濟的要請に重點を置くのと根本的に異るものがある。一方は、形式的な「統制經濟」を代表するものであり、他方は實體的な營團經濟の顯現だ。したがつて統制會が自ら經濟行爲の出來るものになつたとしても、統制會が經濟統制の一方式である限り、すなはち統制上の必要にもとづく方便として、經濟行爲をなすものである場合は、營團とは性格的に別個のものなのである。經濟行爲が出來るか否かだけによつて、兩者の異同をおもふことは、あまりに手輕であり、皮相の觀察といはざるを得まい。いひかへれば營團を論じ、統制會との比較を試みるにあたつては、よく國民經濟の實體にまで遡つて、兩者がそれに對していかなる關係にあるかの理を究め、したがつてそれらが國家ならびに經濟に對して、いかなる倫理的重要性を有するかを顧る必要がある。そのためには、單にせまく當面の統制會、營團等の向背のみならず、ひろく時代の倫理、世界情勢の論理をたづねて、わが國民經濟の動向を察知することを怠つてはならないとおもふ。本書において述ぶるところは、おほむね斯くの如き志向をもつて、最近營團を中心とした經濟倫理の動きを考察した記錄に他ならない。志を同うしその間に問題を感ずる人々の叱正を仰がむと欲する次第である。

本書の論述において、營團を語るのに、もつぱら交易營團をもつてした觀があるが、一つには著者が接觸した問題の現實面が、交易營團に關するものであつたからでもある。他の理由としては、交易營團が生れ出ることになつてから、始めて一般に營團といふものについての關心が昂り、論議も活潑になつたことを擧げたい。實際、統制會と營團、民業と營團、戰爭と營團等々の論點は、交易營團の設立を機會にこれを中心として喚起されたものといへるのである。また營團が、大東亞の建設に對していかなる重要性を有すべきやについては、あまり世上の論議をきかないのであるが、營團經濟こそ東亞新秩序を具體化するものであり、「東亞經濟の新生」を實現すべき推進力だと信ずるところから、特に營團經濟の倫理のうちに、いはゆる現地經濟の諸問題をとりあげることとした。なほ營團の問題に對する哲學的觀點に關しては、本書中特に「大東亞交易の思想」の敍述を參考せられたく、また一般にこの書の論述に興味をもたれる讀者は、著者がさきに公けにせる『經濟倫理の構造』ならびに二つの論集『支那の現實と日本』『支那・上海の經濟的諸相』（以上岩波書店刊行）のいづれかを一讀せられたい。

序

この書を刊行してくれる大理書房植村道治君は、永年岩波書店の人として親しい友人である。今度自分で出版を始めることになつた。知友の一人としてその成功を祈つてやまない。その理由からも、植村君の丹精になるこの書が、ひろく多くの讀者を得ることを希ふものである。

昭和十八年七月初

目次

時代と學問……一
現代の倫理……四
「公益優先」……三四
營團經濟の倫理……四五
營團の本質……五四
營團法と資本主義の問題……八四
戰爭と營團……九三
營團交易の理論……一一三
大東亞交易の思想……一三二
交易計畫化の諸問題……一四四

世界文化と大東亞……一六五
世界史の轉換……一七四
東亞經濟の新生……一八五
現地經濟工作を觀る……二一一
法幣小觀……二四七
大東亞戰爭における支那問題……二五一

時代と學問

自分の專門の内に安心してゐられるといふ氣樂な時代がすぎ去つてしまつた。この時代の推移は、おそらく前の世界大戰を境としてゐるものと考へられるが、從前の惰性で呑氣に一つの專門に沒頭してゐることは、今日にあつても全然なくなつたといふわけではない。依然として世の中の移り變りに無關心に、いはば壺中の天をたのしんでゐる人もゐないことはない。この部類に屬する人々の中には、きはめてすぐれた達觀の士と、時代の動きといふものを辨へる能力のない連中とがあると見なければなるまい。しかしこれらの專門家は、現在にあつては、全體としては極く少數だと考へられるのである。大多數は、みな自分の專門の中に安心して住んでゐない。外に氣を配つてゐるのである。内と外との關聯に異常な注意をむけてゐるといつてよい。かやうな傾向は、學問の研究にしたがふ人たちばかりではなく、いづれの方面においてもさうである。つねに自分

が從事してゐる職域を反省させられることになつてゐる。たとへば以前ならば市場を目當てに、一圖に商品を生産しさへすればよかつた人々が、もはやその製造業の枠の内に安閑としてゐられなくなつて、たゞ自らの事業の存在理由を氣にかけざるを得なくなつてゐるのである。いはゆる全體主義といふものが世の中を支配し始めて以來、すべての人がさうなつた。

さて專門家は、これまで身につけてゐた殻を脱ぎ棄て、從來是認されてゐた學說、體系、理論を放下して見る必要がある。つかひなれた認識手段や思索の仕法をやめて、虚心に、率直に現實を諦觀して見るべきである。無一物にかへつて、直心をもつこと、すなはち古人のいふ「汝自らを知れ」である。われわれは、今いかなる時と處にあるかを見定めることなしに、徒らに外界認識の體系をつくらうと焦つてはならぬであらう。一たびこの根元に立ちもどつて見直ほす端的な態度によつて、はじめて新しい時代の要請する學問の途がひらかれるのだと思ふ。とかく世の實際家なるものは、學者を迂遠だと嗤つてゐたが、近頃の實際家の迂遠さ加減はまた格別である。みな首を突込んでゐた專門の殻を容易にすてかねて藻掻きつづけてゐる。新しく生れ出る筈の秩序を、出來るだけ從來の自分の專門的な實績に折合ひをつけやうとして歪曲するに日も足らぬ有様である。實際家ほど迂遠なものはない。せめて「學問の世界」の實際家たちだけは、決して迂遠なものではないことを證明して欲しいものだ。（昭和十七年十二月）

現代の倫理

明治以後、日本人の生活は、西歐文化によつて影響されることが多く、その思想の推移を跡づけた場合に、その內的必然を以て發展したといふよりは、西歐社會の發展階梯を順々に受容して、その刺戟によつて變貌せしめられて來たといふ方が當つてゐるのである。思想生活において內面的な要求によつて自ら發展した連續態が見出されずに、概ね外部的な事情に基いた流行的思潮が、時の流れによつて繼起するだけで、その內的意味の上から觀れば、大膽な不連續があるにすぎない。かかる事態は、一つには、明治以後の國家的必要から、西歐の文物を輸入して富國强兵を計り、急速なる歐羅巴文明の進步に追隨せざるを得なかつたことに因るのであるが、他方、日本人固有の思想傾向が、發展的連續を形成しない建前のもので、從つて系統あるひは內面的根據などは意に介せず、時宜に適した流行思想を攝取したからだといひ得るのである。かやうな理由から、

明治以後の日本人の文化活動の跡を顧みようとするときは、多少とも、その內省文化たると社會文化たるとを問はず、西歐社會の發展過程を參酌することが必要でもあり、また便宜でもあると考へられるのである。

一　個人主義の問題

中世歐羅巴において、基督教統一文明が支配的であつた限り、國民社會といふものが獨立の價値を有することなく、特定の意味にあつては、かへつて個人の價値が重要な地位を占めてゐたといつてよい。すなはち各個人は神の子の協同體における構成員として價値づけられたので、それ自體何等の媒介なくして、「見えざる教會」のうちに包容されてゐることになる。もちろん天上の神の國に入るためには、各人は地上の教會に參與しなくてはならぬであらうけれども、個々の人間の價値は、神の宏大なる恩寵によつてのみ直接に、絕對に賦與される先天的な約束のものであるから、地上の教會は、個人の價値の成立條件とはなり得ないのである。この意味において、基督教的歐羅巴社會は、神と人との直接なる交涉の複合態として概念せらるべきものであつたが、

近世歐羅巴になつてからは、現實的勢力として國家的支配がつよめられ、個人はつねに先づ以て國家に對して態度を決しなくてはならぬこととなつた。いひかへれば、近代國家なるものが、人間生活に對して、中世における地上の教會以上の勢威を揮ふこととなつて、各個人は、天國を思ふと共に、國家の現實的壓力を深く感ぜざるを得ない立場に置かれたのである。そこに中世的信仰から由來する個人の絶對價値を主張し、その尊嚴を說いてやまざる人本主義の思想と信仰とが、時に殆んど反國家的と思はるるまでに强調される理由があつた。かくして十八世紀を通じて、國家及び社會と個人人格との交渉が倫理學的、社會哲學的な論議の的となつて重要視せられたので、人間性の哲學乃至倫理觀の勃興を見たのである。

近代歐羅巴國民のいだく個人主義思想は、本來決して唯一なる個人を無條件に定立せむとする動機に出づるものではなく、つねにそれは多くの條件に制約されたものであつた。かの中世思想における神の子としての絶對的定立の際にも、個人は神の恩寵によつてのみ神の生ける寫しとして定立されるもので、むしろ無限の條件に依存するものだといつてもよい。近世にあつては、國家及び社會に對立した個人を如何に意義づけるかが主たる關心となつてゐるのである。すなはち問題は、一は國家と個人との關係、二は社會と個人との交渉、三は國家と社會との對立にわかれるのであるが、この第三の場合は、個人に對する國家及び社會のそれぞれの關係の結合としても考へ得べき消息を有するのである。これらの問題を解明する上に最も興味あるまた代表的なる表現として、かのリベラリズム（自由主義思想）をとりあげてよいであらう。何となれば、自由主義思想は、國家を社會の外に押出し、社會を個人の活動に分解してしまふ方法によつて、最も徹底せる個人主義社會哲學を展開するものだからである。いひかへれば自由主義社會にあつては、個人は殆んど自由に放任せられ、何らの拘束掣肘をうくることなく、最少限度の社會的規範にしたがふだけでよいことになつてゐる。だから個人の價値は、他の社會機構乃至國家生活において見出し難きほど重んじられることになり、個人を基礎として社會が生れ、國家が存立するかに思はしめられるのである。個人の自由は、あくまで尊ばれて、これを制限することは、かへつて國家社會の進歩を阻害するものとして斥けられるに至つて、個人の價値の昂揚は、自由主義社會思想において極點に達したかに見える。併しながら、既に述べた如くに、歐羅巴思想において個人の價値の定立は、決して無條件ではなく、またそれを希望したものでもなかつたことは、この自

由主義社會の構成を吟味してかへつてよく理解し得るところである。といふのは、この社會及び國家において、個人はあくまでも、その國家社會に對する貢獻價値に表明されてゐるからである。各個人の活動を自由にしておくとき、これらの活動量の總計が最大となり、その效果も亦最善となるといふ建前のもとに、個人の自由活動を認容するのが、自由主義の社會原理である。國家にとつて社會活動が最大效率をあげ得べき途は、社會の構成分子たる各個人をして、思ふ存分に活動させるにある。その限り、個人の自由活動は、國家存立の最良の方便であり、社會進歩に對する最大の合目的性をもつものとなる。したがつて個人は一定の社會的合目的活動の一因子としてのみ重要であつて、それ以外にあつては、また別個の合目的性によつて評價されるのである。個人がそれ自らの價値を有するのでなくて、各種の手段價値の支持者として意義づけられるにすぎないのだ。社會原理上はかくの如く消極的地位を與へるものでありながら、現實的にはあくまで個人尊重の方式を採用するために、人本主義的要請にとつて、相當の滿足をおもはしめ、國家對個人、社會對個人の關係においては、充分實利を收め得ることになつてゐるのが、自由主義社會である。個人の慣習は表面大いに重んぜられながら、內面的には國家社會の目的に對する手段であり、方便であるやうに仕組まれてあるとみてよい。この自由主義方式は、中世以來の宗教的政治的なる桎梏より個人人格を解放せしめる努力を合理化しつつ、國家目的を達成し、社會の繁榮を導くことに偉功を奏したものといはねばなるまい。人間解放の執拗なる要請は、かかる方式の實施なくしては、到底近代國家の生成と調和しがたきものがあつたに相違ない。

人間性を中心とする哲學思想あるひは人格主義倫理觀にもとづいて、個人の人格價値を强調し、無條件的なる尊嚴を個人人格に賦與すべしとする教說は、中世思想より近世思想への轉換期なる西歐羅巴啓蒙時代の所產ともいふべきものであつた。十八世紀後半より十九世紀の前半に亙つて、フランス革命を中心とした思想傾向は、それを端的に表明するものであつた。かの天賦人權說の如き個人の自由を絕對視する考へは、社會哲學的にいふならば、まさしく變革期における形而上學的反動思想に他ならない。それによつて、積極的なる社會乃至國家の構成を描き出すことに、多大の困難がある。自由なる個人が便宜問題として社會契約を締結し、更に服從契約を以て國家建設を爲すに至るものとする論理的基礎づけなるものも、要するに現存の國家社會の非合理性を、個人の價値より合理的に演繹せむとする革新的解說であり、啓蒙的註釋にすぎない觀がある。現

實の姿としては、西歐羅巴における近代國家の發達は、漸くにして國民社會の生成を促すに至つて、個人の價値はいよいよ國民國家の價値に吸收せらるべき方向に進んで來てゐた。この機運の擡頭以前に、一時啓蒙時代の合理主義が、革命家的熱情をもつて强調された際に、個人人格の絶對價値の主張が、社會理論の表面にまで突入して來たのである。この思潮にあつては、個人を人間性の象徴として考へ、個別と普遍とを相卽せしむるに何等の矛盾をも感じなかつたから、個人の價値を極端に重んずる動機に好都合であつた。もちろん、精神史的に視るならば、その歴史的任務を果した啓蒙時代の合理主義思想などは、十九世紀を通じまた現世紀初頭までも、重大なる使命を有するものの如く看做さるべき筈はないのであるが、偶々十九世紀以降、國家社會の現實が、個人の價値を無視するかに見ゆることが多いために、これに反撥せむとする個人的要請すなはち啓蒙思想に由來する純粹なる人格主義の主張が、案外に共鳴をよびおこしたと見ることが出來る。しかしもしこの故に時代の動きが、個人の價値を尊重し、個人の心情をつよく顧みつつあるものと判斷したならば、大なる錯覺といはねばならない。世相は、まさにそれとは全く逆に個人を無價値にして、團體價値のうちに吸收し終らむとしてゐたのだ。かつて自由主義社會が試みたと同じ手法を以て、個人を手段價値に歸著せしめ、合目的活動の系列中にならべるだけになしつつある。個人に自由をあたへながら、かへつてそれによつて個人を團體の傀儡たらしめたリベラリズムの社會構成は、社會學說上、ゲゼルシャフト（社會）とよび、個人人格の協同による結合態（ゲマインシャフトすなはち協同體）と著しき對立をもつものとして取扱はれて來たが、實質的に考ふるときはこの區別はさまで重要な意義を有するものではない。協同體と社會との區別は、行動する個人の動機より觀るとき、一方は共同目的によつて掣肘を受け、他方は殆んど制約をうけないといふにある。而して團體目的の立場からいへば、いづれも個人を手段化してゐるもので、わづかに個人の意圖に合目的性を滲透せしむるか否かの差異にすぎない。共に、近代社會において、個人が獨立の價値を失つて來た事實を裏書きするものといはねばならないのである。

二　「國民國家」の成立

前節において、歐羅巴國民の生活的現實にあつては、個人の價値を自覺するに至つた近世に入つて、かへつてこれが尊嚴は客觀化せられず、しだいに集團的なるもののうちに歸收せしめられ

終る傾向がつよい所以をみた。反之、一般に倫理學說にあつては、今日なほ西歐の傳統をうけつぐ場合は、個人價値の自覺面をつよく描き出さんとするために、概ね個人倫理の範圍を出でないのである。これは啓蒙期の合理思想から導かれた人格主義に深く影響されてゐるためである。倫理學思想は、現實の推移に卽應した歩みを示してゐない、といつても過言ではない。現代生活の認識をあきらかにし、その歸趣を明瞭にすべく要求されてゐる社會倫理觀は、個人價値に拘泥しすぎるために、その設計すら出來上つてゐないのである。この間の消息は、たとへば自由主義社會倫理に對する解釋において克く窺ひ知ることが出來る。前述の如く社會倫理の觀點から、個人の自由を基礎づけて見ようとしないで、一個人の自由を無條件に前提して、ややもすればそれを人格の絕對的主張に結びつけようとさへする個人倫理的見解を以て終始して居るのだ。爰にわれらは、新なる倫理への要望をいだかしめられる所以があると共に、それを充すためには、一方、西歐の傳統をふかく吟味し、他方、現にわれらの身邊に展開しつつある生活の流れを、明確に理解することを企てねばならぬ。殊に日本人的生活態度にあつては、著しく彼等とその傳統を異にし、彼において重要問題であるものでも、我にあつては何ら考慮に値ひせざるものがある。西歐文化を特に體驗せむとする限り、問題ともなり、苦惱ともなる程度のものが少くない。明治の初め以來、親しみを感じて來た自由主義的志向も、時の必要によつたまでであつて、日本人の生活そのものから由來するものでなかつたからこそ、全體主義の提唱の前には、弊履のごとく棄て去られたのだ。個人と社會と、また個人と國家との對立あるひは矛盾も、われらには、實感が乏しいのをつねとしたからでもあらうか。われらは、自らその周圍の世界現實を直視して新なる生活の針路を見定めねばならぬ地位にある。

西歐文化の所產たる近代國家は、その成立の當初にあつては、君主を中心とした政治的軍事的な權力團體であつて、まだその統治下にある人民の社會的諸價値を攝取するに至つてゐなかつた。いはば國家と社會とは別個の存在であつたと見られるのである。國家は、自らの目的に合する限りで、社會に對し干涉を行ひ、制御を試みるだけで足りたのである。個人は社會を構成し、それを通じて國民の財政的負擔を荷ひ、その命令に服することとなつてゐた。社會は自然法の支配する領域であり、國家は、人爲的統治を目的とする法人格にすぎないのである。すなはち、國家は革命によつて斷續するけれども、社會は、國家革命の外に、獨自の生存をつづけ得べきものとし

て概念せられた。「國亡びて山河在り」といふにも似て、社會と名づくる人民の生活は、國家の興亡を他所に持續してゐるものであつた。この二つのものが、十九世紀の發展過程において、しだいに接觸面が多くなり、互に滲透しあふことが頻繁になつた。現世紀に入つてからはその融和の度が濃化せられるに至つて、そこに兩者の對立を超えた「國民國家」と呼ぶに適しいものが出來上つたのである。これはもはや近世初期の國家の如き權力團體ではなくて一つの生活團體である。この國家は、昔日の君侯を中心とする法人格的存在ではなくて、國民の生存と發展とを確保するための協同社會である。かやうに「近代國家」が「國民國家」にまで轉回して來た消息を窺ふ上に、われわれは、近世歐羅巴における高度資本主義文化の發達を顧みる必要がある。

經濟學史的に觀るときは、近代國家の生誕したのは、いはゆる重商主義政策（メルカンチリズム）の流行した時代であつた。各國家は、その富國强兵をはかつて、隣邦との競爭に寧日なき有樣であつた。自國の海外通商に對して保護干涉を加へ、その貿易上の差額を自國に有利ならしめ、結果として受取るべき地金銀の量を增大するに腐心し、「貿易は國旗にしたがふ」ことを鐵則として、虎視眈々としてゐた。その武裝せる通商は、つとめて貴金屬の獲得を希つたので、十九世紀を通じて發達せる產業的活動を基礎とする通商の場合とは、著しくその趣を異にするものがあつた。各國家は、その實力を、國の生產力に求むべきことを知らずに、只管その蓄積せる財寶にあるものと考へたのであつた。君侯の財政を肥やすことを、富國の要諦と心得て、他を顧みる暇なき狀態にあつた。この方策は、ある時期においては妥當であつたにもせよ、國家勢力の角逐が烈しくなるにつれて維持しがたいものとなつた。自ら生產事業を有せずして、植民地搾取によつて徒らに地金銀の保藏量を增大せしむることの危機に直面せざるを得なくなつたのである。その頃から、國富は必ずしも地金銀の保有によつて確保し得るものではなく、むしろ一國の生產力の上に依存するの理が考へられ始めた。社會經濟の發達によつて、生產效率を增强すること以外に、眞に國富をいたす途なしと認められるに至つて、近代國家はその初期の形態の如くに、君侯中心の權力國家でゐられなくなつた。いひかへれば人民社會が、國家機構のうちに攝取されねばならぬことになり、社會的勢力が國家の運命を左右するやうに變化したのである。而してこの社會勢力を最も具體的に代表するものが、近代資本主義經濟であつたのだ。各國の資本家的活動は、植民地貿易の自由競爭を行ふに及んで、互に鎬を削りながらも、共同の利害の下に聯繫することに

なつて、十九世紀後半に入つて世界經濟を形成し、各國家は自國民の資本家的活動を後見する役目を演ずるに至つたのである。かやうにして、近代資本主義による世界經濟機構が整備した後には、歐米諸國家は、一應それに隱蔽されたかの如き觀を呈し、資本家と勞働者との生産者社會における兩階級の對立相剋が、かへつて前面に華々しくあらはれることになつた。その極、横斷的に各國の勞働者階級が團結して行動を起す場合には、國家間の戰爭すら喰ひ止め得る見込があるといふ過信に導かれた。世界の視聽は、專ら勞資間に保たるべき産業平和の問題に集注した時節さへあつたのだ。しかるに、さきの世界大戰によつて、各國の産業社會をつらねて構成された世界經濟は、脆くも壞滅するの悲運に際會した。各國民のもつ國家と社會とは、たちまちにして一體となり、産業戰士の萬國的結合の夢は消えて、各國家のために、それぞれの陣營に戻つて相對峙するに至り、大戰後においては、各國とも、自足完了的なる經濟態勢を整ふるに忙しくなつたのである。かかる世界情勢は、「國民國家」の時代の黎明を語るものだと見てよい。かくして、近代國家の時代より世界經濟の時代を經て、現代はまさに國民國家の時代に入らんとしてゐるのだ。すべての現世的價値は、「國民國家」に歸收統一せしめられむとし、一切の倫理は、茲に基調をもとめて更新せらるべき狀態にある。近年わが國における全體主義の思想運動のごときも、かかる重大なる時代の轉換を示唆する片鱗ともいふべきものであらう。

新しき時代は、まさに國民國家が主體となつて動きはじめてゐる。その動向を見るに、殆んど十八世紀の西歐倫理思想が個人について云爲せるところを、國民國家によつて行はむとしてゐるかの如くである。人格の絶對的主張は、國家のそれに置き換へることによつて、始めて具體的妥當をおもはしめられるであらう。各個人の生存權の要求なるものも、これを國家の生存の要求として觀た場合に、はじめてよくその現實的客觀性を看取しうるのである。かつて啓蒙期の合理主義思想が言ひ出した人格理念に關する演繹は、當時なほ暗默に、基督教神學の前提をもつてゐたからこそ、抽象的觀念の遊戯ともおもはれずに濟んだのであるが、眞に啓蒙せられて、神祕的背景を拭ひ去つた實證的な姿相において、それらの人格觀あるひは倫理上の要求を檢討するときは、現代の國家によつて實現を企てられつつある如き場合をのぞいては、到底客觀的妥當をあたひし得ぬものといはねばならないであらう。近世意識が目醒めかけた當初、個人あるひは人間性を通じて、自覺的となつた諸々の理念は、實に、現代の國民國家のために用意されたものともいひ得

るのだ。個人による實現を期待された人間性の要請は、十九世紀の史的發展においては、悉く裏切られてしまつたが、この過程の裡に、かかる期待に副ふべき倫理的主體が生長しつつあつたのである。それは個人ではなくして、國民國家であつた。完全なる人間の理念は、完全なる個人ではなくして、國家理想に生きる國民を意味するものであつたのだ。

プラトーン的にいひあらはすならば、そこに考へられた個人は、小さき國家であつて、決して現實に見出される個人的存在ではない。それ故にこそ、十八世紀思想の教へが理念的に妥當するに至つたので、國民國家が現代のやうに生長しなかつた間は、つねに抽象的に概念する他はなかつた。

三　新なる倫理の構成

國民國家のみが倫理上の主體で、各個人は、國民協同體に攝取されるものだといふとき、人格の獨立が否定されたものとのみ考へ易い。おもふに、その考へ方は、前述のやうに、合理主義思想から由來する形而上學的な倫理觀にもとづくものといはざるを得ない。すなはち人格を一つの形而上學的實在として觀るためであつて、恰も人格を核心として考へられた自我の絶對的主張を、多少とも物自體の如くに解し、あるひは實體的に、存在的に思ひ泛べる結果といはねばならない。ところがわれわれは、この種の倫理觀を信奉できなくなつて、むしろおのれの仕事に忠實なることによつてのみ、人格を見出すことになつてゐる。實體的でなく機能的に、存在的にではなく作用的に、人格を概念すべきものだと考へるのである。いひかへれば、人格は一定の働きの「場」においてのみ定立されるので、各個人が先天的にそれぞれ人格をもつてゐるわけのものではないのだ。國民協同體のうちに攝取されて、はじめてよく個人は人格として定立せられ、價値づけられるのである。元來人格といふのは、西歐流にいへば協同作業における役割といふほどの語義をもつペルソナであらはされた。劇中の人物とか、假面とかを意味するペルソナが、全體の結構や筋書によつてのみその價値が規定されるやうに、人格も亦、國民協同體の作業に服してのみ可能となるべきものである。國民としての勞作をはなれては、各個人の人格はあり得ないのであり、具體的に人格を概念しようとすれば、割當てられた本務をおもはなくてはならない。この割當ての窮極的な命令は、國民協同體の當爲に據るものといはざるを得ないのである。そこで新しい倫

理のもとにあつては、國民協同體の當爲、目的ならびにその動向を闡明することが主要な問題であつて、十八世紀啓蒙時代以來、主觀主義倫理觀が强調した人格の問題に核心を見出すものではない。各個人が國民社會にあつて、如何なる地位と重要性とを賦與されるかといふ課題さへもが、副次的意義をあたひするに止まるので、それ以上に國民協同體それ自らの動きを見定むる國家倫理が眼目でなくてはならぬのである。

これまでは個人倫理が中心であつて、超個人的な社會倫理といふものは、きはめて僅しか注目されなかつた。十九世紀の初め主觀的倫理觀にかへるに、客觀的倫理觀を以てするに至つて、幾分、國家社會自體の倫理が問題となつたやうであつたが、それとても基督教神學の影響の下に、世界史的使命の問題をめぐつて考察された歴史哲學の所産であつた。おのれ自らの存立と成信とをあくまで昂揚せむと努力しつつある國民國家の現代倫理の上に思ひ合はせるにしては、餘りに形而上學的あるひは神學的傳承に囚はれ過ぎたものといはねばならない。ヘーゲル以降の歴史哲學的なる客觀的倫理說を援用して、澎湃として興りつつある國民國家の生成に對する新なる倫理を見定めむとすることは、おそらく膠柱の危險を冒すものとなるであらう。また十九世紀中葉から、近代資本主義經濟のもつ社會的重壓に對して批判が昂り、社會主義運動の勃興を見るに至つて、浪漫派的あるひは唯物史觀的倫理觀が旺盛となつたのであるが、それらのもつ社會的倫理的形相も、その實質においては個人主義倫理の範圍を超ゆること多からざるものであつた。多少とも個人の生活する環境に注目して、その生活の重壓が個人人格の危機をもち來すものありとする警告あるひは反對にすぎなかつた。したがつて、そこには未だ、社會そのものを一團として觀た倫理が、自覺的になつてゐなかつたといはねばならない。たとへば階級道德の觀念にしても、資本家の階級心理を、勞働者階級の立場より批判する對象として想定し、それに、人格主義倫理觀による評價を加へたといふに止まつて、必ずしも、團體倫理の本質的理解を披瀝したものと見得ないのである。もちろん唯物史觀の建前にては、永遠の正義の理念を否認するものであり、いはゆる倫理あるひは道義は總じて階級心理の限界内にその妥當性を限らるべきものだと主張するのであるから、社會倫理について、新なる構想を展開しなかつたことは當然の歸結といはねばならぬ。しかしながら、その主張の政治的動機を合理化したと思はるる階級鬪爭の理論は、つとめて倫理性の否定を標榜したに拘らず、内面的には道義感のはたらくものがあり、結果においては社

會倫理の構成に寄與するところ尠からざるものがあつたかに思はれる。生産社會のうちに互に抗爭する團體の存在を考へ、階級對立を契機として、全社會過程を合理化せむとした着想は、各個人を超えた社會的なるものの內部倫理に示唆を與へるものがあるからである。

國民協同體の倫理が、きはめて現實的なる地盤の上に構成されるに至つたのは、おそらく世界經濟の崩壞以後の事實に屬するであらう。それ以前にあつては、既述の如く各國民とも、世界經濟の一環として、その資本主義社會を運營するにつとめ、國家は、その經濟社會の繁榮の結果を收めることによつて滿足してゐる趣があつた。すなはち國家は、自國の經濟社會を媒介として、世界經濟との聯繫を保ち、世界經濟の充實と發展とに對して十二分の好意を寄せてゐたわけであるし、人民はおほむね國家的拘束の外にあつて、經濟活動の自由を享受することをよろこんだのであつた。かくして一般に文明開化を謳歌する樂天的志向が、世界を風靡し、經濟的文化は未曾有の發展をとげたのである。しかるに、さきの世界大戰は突如としてこの歩調をとめてしまつた。世界經濟はその時以來、再興の見込なきまでに潰滅するに至つて、その構成部分は、その歸屬すべき國家に還元せしめられてしまつた。それまで國家と經濟社會とが、各その分野を異にして、共存共榮の途を得て居つたが、一轉して、時に對立相剋を感ずることあるべき局面を展開するに至つたのである。經濟社會が國家の完全なる支配下に入らざるを得ない場合と、逆に國家が經濟社會の頤使に甘んずるが如き場合との極端な型が出來上つて、その中間に、さまざまの兩者が對立相剋する場合を現出したのであつた。たとへばドイツの如く、全經濟社會は媾和條約上の義務を履行するがために、國家の驅使にしたがはざるを得なかつたのに對して、アメリカ合衆國の如くに、ソヴィエト聯邦の如くに、經濟社會の要請をもつて、國家體制をきめようとするものが出來た。しかるに、世界經濟が崩れてから、世界平和に安定がなくなり、各國とも、自給計畫を遂行すべく努力するに及んで、國際的危機感がつよく、勢ひ國防問題が全世界の最大關心となつた事、玆にいたつては、國家の軍事的必要は、經濟社會を犧牲とせざるを得なくなつたが、それによつて實現された軍備擴張は、主として資源作戰に資せむとするもので、無限なる生産力の充實と確保とを達成する目論見をもつものだから、逆に經濟社會の增强を約束するものといへる。

かくて、かつて相剋をすら思はしめた國家と經濟社會との對立は、國民協同體の目的內容に吸收せられて、その保全と發展とに役立つべき契機となつた。同時に、世界文化の實現のための協

力といふがごとき理想主義的想念は、人々の心を捉へる餘地もなくなり、文化一般の下にそれぞれ特殊文化の領域が設定せられて、各領域毎に獨立の文化價値が仰がれるといふ構想の如きは、著しく現實からかけはなれた志向となつた。國民的活動の競合だけが、世界の現實であり、各國民的協同體は、各作業部面間に、不釣合ひの生じないやうに、その活動を振りむくる合理的計慮に專心して、他を顧みる遑もない有樣である。これを國民文化とよぶにしては餘りに意力的緊張に充滿してゐる。そこにはただ「活動」があり「力」があるのみである。この力の充實につとめる動機は、近世の初めよりたえず歐羅巴國民を支配して來たところであつた。あらゆる實體的なるものを機能的なるものへ、靜態的なるものを動態的なるものへと推すすめて來た能動性こそ、近代文明の特質ともいふべきものである。かの生產力本位の資本主義を限りなく擴充し、その極、生產力の無限なる充實をもとめて、いはば資源主義ともいふべき階梯に進入しつつあることにも、その間の消息が窺ひ知られるであらう。無限悠久なる力の充實こそ、今日國民國家が自らの生存の當爲として、あらゆる生活部面を通じて實現せむとつとめて居るところである。この活動三昧ともいふべき境地において、現世に內在的なる永久の生命を得むとするものこそ、新しき倫理の歸趣である。いはゆる「永遠の今」を生きることに、現代の倫理がある。國民協同體の一員たる各人は、その定められたる本務によつて、この倫理を實現するところに使命を感じ、人格を籠き得るであらう。われわれは、かくの如き倫理の觀點から、たとへば經濟部面に活動する各個の經濟人の生活活動を導くべき格率を演繹することができる。すなはち自由主義經濟において、資財增殖を目標とし、またその財力によつて社會的權力を獲得せむとする經濟人の態度は、つねに實體的なるものを追及してゐる姿であつた。しかるに國民協同體の經濟にあつては、その業績は、奉仕的努力そのものにおいて見出さるべきもので、その效果の多寡如何にかかはらぬものでなければならぬ。經濟人は、經濟の第一の僕となること以外に、その倫理價値を實現する途をもたないのである。そこに與へられたる本務を遂行する經濟人の面目があり、國民協同の倫理の具現があるといひ得るであらう。この新しき倫理は、戰時下統制經濟の展開によつて、急速に經濟人の覺悟の上にあらはされることとなつた。然しこれは必ずしも戰時經濟の必要にみちびかれた偶然の結果ではない。かつて資本主義經濟を呪詛した革新論者の唱へた最も過激なる所見も、現下の實情に對比すれば、極めて非實行的な、空疎なる計畫にすぎなかつたことも明瞭であるし、今日

行はれつつあることは、それらを遙かに超ゆる階梯にまで達してゐるのであるが、これをあへて在らしめた所以のものは、單に非常急迫なる事情に因るものとのみ考ふべきではない。少くも、現代において、國民協同體は、すでにかくの如き機構をつくり、運用をあへて爲し得べきまでに成熟してゐたことを認識しなくてはなるまい。各個人も亦、これに克く順應する心構へをそなへてゐた結果といはざるを得ない。もし然らずとすれば、おそらくかくの如き戰時態勢をつくり上げることも出來ず、また展開すべく計畫もされなかつたであらう。だから現下の倫理的形相は、決して戰時事變下の一時的のものではなく、まさしく新なる時代の姿相といはねばならない。

四　行動的全體主義

新にはじまつた時代では、戰時と平時とが截然區別されるといふことがない。たとへば、戰時經濟の仕方として、平時に蓄へた資財を一時に消耗してしまふが如きは、平時と戰時とが明かに分れてゐた時代にはふさはしいが、今日の場合では、一方に資財の生産を增强し、他方にはこれを戰爭目的に充用してゆくといふやうに、生産消費が並行的に、同時的に遂行されてゐるのである。戰時も平時も、すべて現在にあつめて、力の限りをつくし、生き拔かむとするところに、今日の國民國家の倫理がある。われわれは現にそれを生きつつある。かかる倫理方式は世界のあらゆる國民にとつて必ずしも受容し易いものではあるまい。否多くの民族心理は、これを自らのものとするのに、躊躇を感ずるかもしれないのである。而して「永遠の今」に生き、力の信念によつて行動することの出來ない民族は、おのづから新しき時代に、その生存を主張することが困難となり、世界國民としての前途は暗澹たるものがあるだらう。

われわれは非常時に生きること、すでに十年を超えた。そして、今や大東亞戰爭を大規模に遂行しはじめてゐるのだ。この非常時局の初めの滿洲事變は、大戰の前哨戰であり、後半の支那事變は、いはば緖戰であつた。すでに滿洲事變の勃發當時、米英が支那側に聲援をおくり、われに抗爭する態度を示してゐた事實は、今日の大東亞戰爭をあらしめてゐる所以を暗示してゐたといつてよい。この非常時の緊張を十年二十年と持續してゆくことは、いはゆる平時を基準として考ふれば不可能にちかいであらうが、この非常時が平時の如くに生活せられ、戰時が日常的にうけいれられることともなれば、耐へられぬこともないであらう。一般に現に行はれつつある大戰爭

が長期化するだらうとの豫想がつよく支配してゐるが、われわれ日本人は、すでに幾年となく長期戰をやつて來てゐる。これは大きな消耗であると共に、また大なる建設でもあるのだ。物質的部面においてのみならず、精神的部面についても同じことがいへるだらう。神經の安息がないと嘆ずる反面には、それに堪へるほどに精神力が強くなつて來てゐることも忘れることができないかやうな事態に生きてゆくうへに、日本人の心理が不適當だとは決してわれわれは信じてゐないのであるが、如何ほどまでにわが國民心理が、この緊張した事情に即するものであるか、新しい倫理の負擔者として如何ほど適格をそなへてゐるだらうかを、深く反省して見るべきであらう。

日本人ほど國民協同體に攝取されることに、煩悶をいだかぬ人民はゐないであらう。われらは、同時に個人主義者でもあり、全體主義者でもあり得るほど、いづれの主義者でもないのだ。否、日本人には、おのづから異つた哲理がある。すなはち一即全ともいふべき理念が、つねに心を捉へてゐるといつてよい。各個人は、それぞれに一個人であつて、同時に全體なのである。個々の日本人は、唯一人にして、たゑず全日本人を象徴してゐるのだ。これは解釋に止まるものではなくして、あらゆる日本人の信條なのである。多數の個人がゐるとき、各人はみな自ら國民全體を代表し得るだけの心構へをもつてゐる。有事の際には、各個人は全體を自らの心としてはたらき、我執を忘れるのであるから、極めて豐饒な迫力に富む全體を現出することになる。これに反して、事態がそれほど急迫せざる場合には、個人は、自ら全體を以て任ずるために、互に感情的に讓らざることが多く、とかく融和を缺き易い。ところが西歐流に、個人は全體の一員にすぎないと考へ、多數相集つて始めて一つの團體を構成し得るものと信じ、自ら一人を以て全國民を代表するといふ如き氣を負ふことがないときには、つねに個人は、全體における極微量として進退すべく、全體意思の決定については、多數決を最上の途として滿足するであらう。茲に日本人の社會生活において、平時的には、纏りがわるく、非常時には、たちまち全國民一體となり得る所以が見出される。いひかへれば、日本國民は國外に出でては、一人にしてよく國を辱かしめない信念をもち、國家危急に際しては、己れを捨てて國難に赴くの心情をもつてゐるが、それは個體にしてよく全體たり得べき境涯にのぞんだ場合に他ならないのだ。現下の非常時局は、われわれ日本人の心情をあくまで昂揚させずには措かぬものがある。また國民國家の理念は、一身の利害を念はず君國に報ぜむとする信念によつてのみ、充分なる具現を見るに至るものであるから、日本國民は

ど、すぐれてこの理念を實現するに適したものは他にありとも思はれない。現代の緊迫した境涯は、まさに日本國民本來の面目をあきらかならしむべき絶好の機會といはねばならない。そしてこの千載一遇ともいふべき秋において、現實としての全體のうちに、己れを沒入する行動的全體主義をあくまで自覺的ならしめ、その精神的構成に充分なる客觀性を保たしむるやう企てなければならぬ。われらは、これまで行動的全體主義の發揮せられ難い平常時において、つねに空疎なる觀念的全體主義思想に惱まされて來た。おのれの仰ぐ理想としての全體觀を標榜するに忙しく、實は、自らの個人的な好尚を他に押つけるだけといふやうな、思想なき無反省の態度によつて、日本國民の生活は騷々しくさせられることが少くなかつた。今や漸くこれを拂拭し、淸算して、新しい倫理の下に、行動的全體主義の生氣をもつて、國民協同體を築きあげつつあるのだが、今後、戰時狀態が長くつづけられて、その緊張にも慣れ、重大時局も平時的に感受せられるほどに餘裕を生じた曉には、再び空想的全體主義の有閑思想が頭を擡げて來ないとは限らないのである。しかしそれは單なる杞憂にすぎぬものであるかもしれない。

日本國民の行動は、戰爭以來逐日擴大せしめられて來てゐるが、この活動圈のひろくなつたことは、おそらく空想的全體主義思想を窒息せしむるに足るものがあるだらう。長い鎖國時代を經過してゐた間に、日本人の行動的意欲は、極度に抑へつけられて、いはば靜中に動を味ふ枯淡な世界に逃避することになつた跡がないではない。あるひは自ら活動することの出來ない境地にありながら、その活動の體驗を會得する工夫修練に沒頭することを以て、僅かにその鬱積する行動欲を滿足せしめむとした觀が少くない。かかる行動精神の隱微なる形態は、胡坐しながら山河を跋涉し、世界を遊歷するの途を自得せしめて、やがて空想的全體主義の如き餘弊にすら導いたものであつたであらう。明治の初め開國せられてよりこの方、われらの行動圈は一應世界的になつたのであつたが、その行動欲を實現すべき國家態勢は充分に整はず、數次の戰役の後にも、通商の自由すら確保しがたき狀態にあつたのであるから、熾烈なる機動力を發揮するに足らなかつた。對外的にかやうな有樣であつたといふことは、國內に多くの相剋摩擦を生ぜしむる原因でもあつた。雄心鬱勃たる國民が、よく驥足をのばすことが出來なかつたために、いはば力の自家中毒に陷りたる如き不安定を經驗することが稀れではなかつたのである。しかるに、今日は、その蹋蹐せる小天地をすててまさに乾坤一擲の大業に勇躍として乘り出したのであるから、幾世紀にわた

つて鬱積せられた行動力は、奔流の如く世界にあふれ出ることになつた。まことに天空海濶の感をふかくするものがある。この大戰をたたかひ拔くことによつて、日本國民は、その行動的全體主義の神祕を、きはめて具象的に、東亞乃至世界の構成の上に刻みつけることが出來るであらう。もはや空想的に、雄圖を胸裡に描くにとどまる全體主義のもどかしさを經驗しないで濟むであらう。これからの日本人は、纖細なる神經をおもはしめる優雅な好尙をほめたたへられることも少くなるであらう。フジヤマ的ニッポンや箱庭式裝飾美によつて日本文化を代表させることも、自然なくなるに相違ない。それと共に、日本人自身の日常生活においても、これまでのやうな意匠にすぎた趣向とか、穿き違へた雅味の細さとかは、しだいに棄て去られて、もつと素朴にして雄勁な生活樣式が支配的となるであらう。手ぢかな例として、われらの日常の消費財に關して、他のいづれの國民にも見出し難いほどの多種多樣なる專門業者が存在してゐたことに注意したい。それが統制經濟の進むにしたがつて、統合規正せられて、著しく單純化され、衣料乃至食料の上に大きな變化を示しつつあるが、これによつても、今後の國民的氣分の轉換が豫想せられるのである。もちろん、この變化は、戰時下の必要によつて促進せしめられたことでもあるが、從來その時々の氣分に支配せられてゐた各人の日常生活が、全體經濟の是認する範圍內に計畫秩序づけられる端緒を示してゐるものでもある。世界をあげて戰國時代ともいふべき情勢を示しつつある今日、またいはゆる神經戰爭の强調せられてゐる昨今、徒らに柔い弱々しい神經を持ち合はせてはゐられないといふ消極的理由からではなく、日本國民がその久しきにわたる歷史的社會的事情によつて、心ならずも馴致せられた末梢的な趣味性に囚はれて、その本來の面目ともいふべき雄偉なる能動的精神をねむらせてはならないといふ積極的理由から、その生活態度を意識的に力づよいものに仕立て直さねばならぬ。外部からの事情によつてではなく、內からの要求によつて、否さらに外部的な事情をも國民的發動によつて建直してゆくために、素朴にして雄勁なるものに日本精神を育成しなくてはならぬであらう。（昭和十七年一月）

「公益優先」

一

國防國家の經濟倫理を代表する一つの標語として、今日一般に、「公益優先」が掲げられてゐるが、一見甚だ明白なこの標語も、適用の上において、またその社會哲學的基礎について、多くの問題が潜んで居つて、決して見かけほど分明なものではない。かく面倒な問題を包含してゐることが、經濟倫理上の指針として、それが不適當だといふのではない。否むしろ多岐多樣な內容を一括して、簡單に要約した趣をそなへてゐるところに、「公益優先」の實踐的意義がある。一應ここに社會倫理的焦點をつくつて置くことは、きはめて效果的だといふことが出來る。しかしながら、かかる焦點が、さまざまの方向線の集結であることを忘れ、この焦點を超えて更に新なる方向に赴くことの可能を無視して、何事でも「公益優先」で十把一からげに片づけることにな

つては、かやうな合言葉の醸し出す弊害は、眞におそるべきものがある。今日すでに、理非を辨へざる概括の弊が、この標語にまつはり始めてゐるのではないかとさへ臆測されるのであるが、國政の指導者たちも、國民各自も、「公益優先」の指標が如何に適用されたならば、國家の倫理として有意義であるかを、仔細に考慮すべき時節になつてゐるのではないかと思はれるのである。

國家公共のためには、一身の利害を顧みるに遑なきやう心掛けよ、といふのが、「公益優先」の倫理であるだらうが、現下非常時局に際して、私利私慾に沒頭して國家の重んずべきを忘れる如き不心得を戒めるだけのものとすれば、建設的倫理として、極めて迫力に乏しいものといはねばならぬ。したがつてこの指標は、先づ以て國家公共のために努力せよ、といふ意味がつよく主張されたものと考へる方が適切であるが、しかも各人その天分に應じ最善をつくして働くならば、それは同時に國のためなのだと確信して來た人々にとつては、必ずしも深き感銘をあたへ得ないであらう。恰も軍人や役人と同じだけの信念をもつて、產業報國につとめて來た經濟人に對しては、「公益優先」などいふことは、今更何をいふのか、自分たちの歩いて來た途は、それ以外の何ものでもなかつたのではないか、といふ感慨にうたれるに相違ないのである。實業家といふも

のは、自分の金儲以外に何も考へないものだといふ前提に立つた場合には、成程、經濟人よ、先づ以て公益につくせ！　といふのも尤もだが、かうは見えても、われわれ經濟人もお國のためといふことを念頭に置いて來てゐたんだと自負し得る人々には、合點のゆかぬことでもあるだらう。國家國民のために、社會公共のために、特に表立つてつくられた施設を預つてゐる人達は、その毎日が何をやつても公益的に考へられるに反して、かかる施設を支持してゐる國民的總力に貢獻する産業部面の擔當者たちは、自分勝手な所業をやつてゐるかに思はれ易いのであるから、「公益優先」を威猛高に呼號するのに出逢つたとき、志ある經濟人は、己れの苦衷を無視された遺憾の念を禁じ得ぬでもあらう。これは人心をして倦まざらしめぬための政治的深慮にとつて、最も警戒すべき點である。この深き慮りなき、いはば政治的な魂の抜けた形骸的行政上の便宜によつて、この指標が運用されることは、公益のため大害あるものといはねばなるまい。經濟人は金儲以外に考へない存在だときめつける前に、從來の國家社會の機構のうちに、經濟人が如何なる地位に置かれてゐたか、如何なる役割を荷はされてゐたのであるか、またどうして生きてゆくやうに運命づけられてゐるのであるかを、充分反省して見る必要があるだらう。多難の時局に際會して、平時とは異つた態勢が要求されることになつたことは、單に經濟人のみならず、國家公共のための施設を擔當してゐる人々も、平時の考へを是正してゆく必要がある。問題は、如何にして全部の努力を一點に傾注し得べきかにあるので、一つの部分が他の部分を徒らに叱咤督勵することだけが仕事のやうになつてはならぬであらう。

二

國家機關が經營してゐない産業は、すべて私益にとらはれたものと觀ることに、少からざる偏見が潜んでゐる。「私益は公けの害毒なり」といふ言葉もあるが、いはゆる私益の集成を公益と見て、國家機關はむしろ私益の助成を自らの任務とすべきものと極端に考へた時代もあつた。自由主義經濟といふものの建前も、自由に私益を生長せしむることによつて、公益增進をはかり得るものとする見透しに他ならなかつたのである。國民政治の方針として考へられた自由主義は、各自全力を擧げて刻苦勉勵するときは、その間に自然淘汰も行はれ優勝劣敗によつて最も效果的なものだけが保存されるものと考へ、その結果公益は內容が豐富になるものと見たからであつた。

各人にとつて自由に我儘にやれるから自由主義だといふ程度の解釋は、社會理論として自由主義が何ものであるかを考へる力のない低能者流の見當違ひにすぎない。それ故に各自の自由活動に委せて全體の內容を豐富にする見込がたたなくなつた時から、自由主義社會原理は人氣を失つて、世界いづれの國民國家も、他の社會原理に移りゆくことになつて來たのである。それが全體主義であるか、協同主義であるか、組合主義であるかは暫く措いて、ともかくも經濟社會の內部に、統制的處置を講じて、全部の努力を一つの中心に集注させようとすることになつた。だから、自由主義を有利と見てこれを採用してゐたその建前から考へて、今度は自由主義ではないものを採用して見ることになつたので、その建前はつねに公益增進であり、國家福祉にあつたのである。國家が高度國防を必要とするとき、全員を動かしてこれに努力せしめむとする建前は、かつて平和の時に對外通商の奬勵をやつてゐたその建前と寸毫も變りはないのだ。それを形の上だけの變化を眺めて、さあ變つた、自由主義はだめだ、全體主義でなくてはと喚きたてるのは、それらの何々主義といふものを社會原理として考へる方面を忘却した結果に他ならぬであらう。

さて、全體主義といひ、協同主義といふものが一世を風靡することになつてからこの方、極めて顯著な事實は、もし造語を許されるならば「組合財閥」の誕生である。すなはち第一次世界大戰以後、日を逐うて濃厚になつた中世主義の復活は、今次の世界動亂以來頓みに拍車をかけて、中世ギルド的なものの發生が目ざましくあらはれて來てゐる。あらゆる產業部門において、各種の統制團體が生じ、組合機構をつくつて、各個の私企業が殆んど窒息の狀態に陷つて來てゐるのであるが、その組合體制は、おほむね國家的特權に成立條件を見出して居る。生產、消費、輸出入、すべて某々の組合機制を通じなくては出來ないことになつて來た。その組合に參加し得る者は、ただ過去にその方面において實績を有するものでなくてはならぬので、いはば、自由主義時代の業績が特權化されたのである。

かくして組合が構成されて、新に夫々の方面に進出して經濟活動を試みむとする創意は極度に抑壓されることになつた。組合の內部においては、新しき競爭者の出現を見ないといふ安心のために、生產に消費に、新機軸を出さむとする努力が缺乏し易くなつた。經濟的發達を進める刺戟が衰へてしまつたのに反して、特權によつて組合は收入をもつことになつた。今日までも組合財產といふものは、日本全國を通じて、決して尠少ならざる額に上つてゐるであらう。それらの

莫大な組合財産は、必ずしも充分資本化されて、生産力擴充に寄與してゐないかもしれぬ。何もしないでも組合に收入が生じるのであるから、その組合の理事者たちは、新しい目論見をたてて、その遂行の過程に失敗などするよりは、一定の事務を取運んで無難にやる方がよいといふことになり易いのである。その上、固々、苦勞して自分が蓄積した資産といふわけでもないから、組合の經理といふものが自然、放漫にもなり勝ちである。ギルド的特權の上に安坐して排他的に構へ、極めて横着な經營をやつても、一應は凌げるのであるから、從來の財閥とはおのづから異つて不生産的害毒を流し易い。すなはち資本主義財閥は、生産的横暴の譏りを受けたのであるが、「組合財閥」は生産を萎縮せしむることにおいて、その將來を憂慮すべきものであることは、遠く中世經濟社會におけるギルドの消長の跡を顧みるまでもなく、明白なことであらう。一寸見は利益を排して「公益優先」の申子の如く現れた組合機構が、もしかやうな特權財閥に墮してしまふのであつたとすれば、國家公共の禍ひこれより大なるものはない。「組合財閥」の生成は、生産力擴充の要、重大なる今日、決して默過すべきものではないであらう。われわれは協同主義或ひは全體主義の經濟倫理をおもふ識者が、自由主義時代を昔に遡つた中世末期の狀態に逆轉せしむるが如きことなきやう、産業指導に最善をつくされむことを衷心希望してやまないものである。

三

「組合財閥」を憂ふるの餘り、協同主義經濟を難ずべき理由は毫末も存しない。今日の要求はあくまで協同精神をもつて、最大能率を各方面において實現しなくてはならないのであるから、「公益優先」の趣旨を生かすべき協同體の構成と運營は、必須の事業である。それについて、われわれの最も心すべきことは、國家國民の必要とする生産量の確保を第一義とし、それに應ずべき機制を充實せしむることであらう。いひかへれば、「公益優先」といふのは、國の所要生産を優先的に保持することに國民活動の倫理的基準を定めるに他ならぬ。この優位性を確保する上に役立つものならば、私益も亦、是認せらるべきであらう。何事によらず「私益はやめろ、公益をはかれ」といふ空漠たる標語倒れは、生産意思の萎縮を導く以外、何らの效能もない。

國の生産所要量の確保といふ問題は、國家の機密に屬する。少數人の最高幹部ともいふべき機關において、それぞれ手配せられて然るべきことで、一般は窺知を許されぬことであり、また窺

知せむとすべきことではない。各産業團體の統制本部が、國家の命令をうけて、公益的にいはば請負をやるのである。大なる生産機構が、所要量を一定期間に供給すべき請負をやることになり、國家はそれの施行について、適宜監督を行ふこととしたならば、おそらく經濟人の産業報國が、大なる部分に亙つて、いはゆる自然統制の形態のもとに運ばれて、各人の創意も豐かに生かされ、資本散逸の弊ものぞかれて、自由主義經濟とはその趣を異にした非常時經濟の活々とした姿を展開するに相違ないのである。世にいはゆる軍需景氣といふものが、ある意味でその間の消息を髣髴せしむるものでないであらうか。軍需景氣の度がすぎて消費部面に氾濫し、その跛行的な情勢に人心惡化を誘ふごときことは、もとよりわれわれの最も戒めなくてはならぬ點で、今日ではそれらの懸念はとりのぞかれてもゐるであらうが、軍需工業の動員と同じく、各産業について生産量の計畫的供給をその産業團體に分擔せしむることとし、また消費に關しても、輸出入においても、同じ仕組が運用されるならば、おのづから結果として「公益優先」が實現されるであらう。ただ標語としてだけ唱へられて、公益が具體的に充實されないといふのでは、甚だ心許ない限りではないか。しかも生産の悅びは抑へられ、人心が徒らに萎靡してしまふやうなことでは、何のための「公益優先」なのか見當もつかぬ。結果に充分の確信がもてるならば、爲政家たるものは、あへて結果を前觸れしなくともよいであらう。やがてそこに達するといふ見透しが確かなら、あすこにゆくのだと大聲叱呼し、人々の歩みの遲々たることを責めるに忙しいやうなのは、決して社會指導の途ではあるまい。

「公益優先」は技術的處置を伴つて效果的にやるべきもので、單に精神を鼓舞するための感情に對する鞭に終らしむべきものではない。それが倫理的指標であることは結構であるが、社會的機制から遊離した個人的刺戟劑に終らせてはならないのである。經濟倫理としての「公益優先」は、經濟社會の運營についての技術的要素を具ふべきもので、決して個人的の心情に訴へて、各人に態度をきめさせる道德上の格率になつては誤りである。かかる心情道德によつて、社會目的を實現せむとはかることは、豫て自ら大いに排斥して來た自由主義道德觀に歸著するものであつて、自ら好まずと主張する見地を、氣附かずして踏襲するに至ることは、甚だ不見識の至りであらう。

世には、すべて政治經濟上の「社會」倫理としてのみ有效なるべき指標を、漫然、昔日の「自

由」倫理の舊套に委ねて恬然たる人がゐないでもない。政治といひ、經濟といふが如き社會的事象については、單なる個人に對する策勵を主とする體の措置は、到底その目的を達しがたきのみならず、副作用として悲しむべき事態を伴ふこと多きを痛感するものである。

（昭和十五年十二月）

營團經濟の倫理

一

最近、統制會の設立が一段落を告げると共に、一般に注目され出した機運としては、營團の構成がある。營團にあつては、統制會と異つて、事業主體よりは運營態に重點が置かれてゐる。恰も東亞協同體が主體を中心とした構成であつたのに反して、東亞共榮圏の考へ方が作用とか機能とかを中心としてゐるのに似た趣がある。かやうにその構成の論理の上で著しい相違があると同時に、性格の上でも差異がある。統制會はむしろ政治性のものであり、營團は經濟性がつよい。同日に語ることを許されない。

おもふに日本の經濟統制における政治的要請にもとづいて生れ出た各種の統制會が、それぞれの重要産業部門において、相當程度の役割を演じつつあることは、否み得ぬ事實であるが、それ

が政治的性格のものであるだけに、單にその經濟的貢獻を吟味し、その經濟的有效度をはからうとした場合には、統制會は餘り役に立たないといふ感じをもつやうになるかもしれないのである。尤もかかる政治性などいふものは、統制會が生れ出るまでは必要であつたとしても、出來上つてしまへば、統制會は、專らそれが經濟的にどれだけ役に立つかによつて是非せらるべきだといふ見解もあり得ることではあるが、統制會の外に營團の構成がなされつつあるといふところに、少くも最近におけるわが國の統制經濟あるひは日本經濟自體の大なる轉換が示唆されてゐるものといはねばならぬ。すなはち從來の惰性的な自由經濟に依存便乘してゐた統制經濟が、その低い調子では我慢し切れなくなつて、一つの重大な轉化を行はむと身構へしはじめたのが、營團による自主的經濟活動への移行だといへるのである。

營團が果して最終最良の態勢であるか否かにもちろん問題はのこつてゐるが、むしろわれわれは、營團なるものが、統制會とは別に考慮されてゐるところに、日本經濟の新なる階梯を看取しなくてはならぬであらう。

二

統制經濟は、これまで實質的には自由經濟に便乘する場合が多かつた。利潤が薄くなつては張合ひがないといふので業務に熱意を示さなくなれば、自然低調なものになり終るのが、自由經濟の運命であるばかりでなく、それに便乘してゐる統制經濟の命數でもあつた。

多くの自由な企業活動を制約して、一方的に動向を決定せしめやうとした統制經濟は、それ自ら經濟的であるよりは政治的な性格のものであつた。尠くも從來の統制經濟は、かくの如き政治的理由をそなへたものであつた。然るに自由經濟を超えた全體經濟の要求にむかつては、政治性が强烈であるといふだけでは、到底滿足すべき結果を擧げることが出來ない。率直に全般的な經濟性を充たすに足るものでなくてはならない。

この要求に基づいて營團經濟の出現を見つつあるものとすれば、これはわが統制經濟が、自由主義經濟に全面的に置きかはることを要求するやうになつた自然の歸結だといへるし、數年來の試煉によつて、自由經濟に便乘することなしに、全體經濟の運營が充分やつてゆけるといふ自信

をもちはじめたものだといひ得るのである。その意味で、營團經濟の發足はまさしく日本經濟の整備充實の上に、一新紀元を畫するものといふべきである。

この間の消息は、恰も時を同うしてあらはれた翼賛會と翼賛政治會との交渉においても窺はれる。すなはち、國民精神總動員をめざして努力を重ねて來た大政翼賛會の活動を通じて、それを超えた翼賛政治會が誕生した。これは、まさしく大政翼賛會自身の狙つたところを實現したものであつたであらうだけに、兩者の交渉は不卽不離の妙をおもはしめる。

われわれは、統制會と營團との關係についても、やや似たものを見出すのである。かくして日本の政治も日本の經濟も、ともにその間に新しい階梯に進み入りつつあることを思はしめられるのであるが、かかる日本經濟の再出發における一つの重要な問題は、自由主義經濟をすて去つたあとに、如何にして個人を全體目的にむかつて、利益追求にもまして精進せしめ得るであらうかである。各個人の創意とか熱意とかを、いかにしてはげしく搖り動かし得るであらうか。一面、經濟上の能率の觀點から、他面、人心を新にする政治上の考慮から、大いに工夫されなくてはならぬ課題である。

三

自由主義經濟を許容しない時代にあつては、利潤追求を動機とする經濟活動の存在する餘地はないものといふことになるであらうが、今日なほ利潤でもなければ各人が創意をはたらかせ、熱意をもつてその業にいそしむといふことはないものと考へて、利潤追求を全面的に拒否することに大なる躊躇を感ずる向も少くないのである。多少の旨味をのこして置くのでなければ、人間は働かないものだとか、勵みにならぬではないかとかいふことで、利潤獲得の動機を經濟能率の上から極度に重要視する傾向は、依然有力である。これに對して、自由主義の惰眠をむさぼるものだといひ、滅私奉公あるひは公益優先の本義を辨へぬものだといふやうに批難して、つひには利潤を欲がるなどいふのは國家の大事をおもはざるの甚だしきものと極めつける論者も少からず見受けるやうである。

われわれはこの經濟的轉換の時節にあたつて、徒らに激語することなく、また感傷にとらはれることなく、事態の教ゆるところにしたがつて、また道理の導くところによつて、經濟倫理の確

立をはからねばならない。

おのれの努力がつねに國家的に酬ひられることに聊かの狂ひもない境涯にある軍人役人のごとくに、經濟に從事する民間人にも考へよといつても、そこに少からず無理がある。國家公共の建前から、名譽、權勢、富貴がおのづからその努力に對して率直に與へられるといふ見込のまるでない境遇にあつた人々としては、獨力空拳をふるつて財產上の優位なりと獲得して、世間に顏を出し、人にも尊重されたいといふ功利的な願望をおこすに至ることは、當然である。これは、自然に酬ひられるやうに出來てゐる境涯にある人々が、あへて功利に心を勞せずに日夜國家のため奉公の誠をつくすのと比べて、一概に怪しからんときめ去るわけにはゆくまいと思ふ。

われわれは利潤追求の過程において、日本の產業人たちが會社事業のためにおのれを忘れて獻身的にはたらいて居り、支那人の會社經營における如き遺憾な事例がきはめて少いことを見聞するとき、その間の倫理的歸結は甚だ明白である。もし經濟人に對しても、私利私慾のためにのみ努力しなくとも濟むやうな社會的國家的條件を與へるならば、經濟人と雖も、あへて利潤追求の動機にのみ生きたがるものではない筈である。

同時に國家社會の與へる體制上の變化を度外視して、あらゆる場合に經濟に從事する人間は、利潤を得る見込がなければはたらかないものだと考へることも、餘りに淺墓だといはざるを得ない。公けの制裁が完全でなかつた時代乃至社會で仇討が重要であつたからといつて、いつの世にも仇討が大切だと考へるわけにいかぬやうなものではないか。自分の力で仇討をしなくもよい時節となれば、仇討の意義も變り、人々の氣持も變らざるを得ぬのと同じである。

四

利潤追求が理由に乏しいものになるといふことを、國家社會が經濟人に別な報酬を與へるやうになるからといふのとは異つた角度からも考察する必要がある。といふのは、利潤はいふまでもなく自己の危險と計算とをもつて事業を經營するところから結果として與へられる殘高所得であるが、もしその危險といふものがなくなつて來た場合には、かやうな殘高所得といふものの生じようがないと考へられるからである。

市場が一定價格で支配されることになり、生產も、配給も、消費も、統制せられることになれ

ば、危險を冒すことに、「創意」をはたらかせる餘地といふものが消失してしまふであらう。危險な橋を渡ることに「熱意」を感じやうにも橋がないことになつてしまつては致し方もない。だから創意も熱意もなくなるといふのは、市場の價格危險に關する限りの創意と熱意との消滅であつて、人間そのものの天才と意氣とがなくなるかのやうに心配するにはあたらない。投機市場が閉ぢられたとしたら、特異な才能をもつた人々の能力は死んでしまふであらうが、それだからといつて經濟社會が潰滅し終るわけではない。利潤がなければ仕事がやれぬといふ人々でなければ、世の中の經濟が動かせぬといふ道理はない。市場經濟時代の傳統は、つひに市場の危險の存在を條件として命脈を保つものであることを悟るべきである。

今やわれわれは統制經濟の新階梯に立つてゐるのである。この新しい體制が負擔してゐる危險の大部分は戰爭危險であり、それに伴ふ政治經濟的な危險があるが、それは往時における市場危險のごときものとは、まるで意味が異つてゐるのだ。この危險の負擔は、決して氣の利いた經濟人とか、多少の資力をそなへた產業人とかでは間に合はないのである。たとへば、ある地域の農業生產が不振に陷ることから生じる危險といふやうなものは、政治的危險であり、經濟的危險である。これを負擔してその不振を克服するといふ大事業は、到底個々の企業者に委ねて置いて出來るわけのものではないであらう。

今、日本は全東亞の經營の中樞に立つてゐるのだ。力づよき建設のための指導者として、日本國民は力の集結を行ひ、一丸となつてはたらかねばならない。經濟力の集結は、政治力のそれと同じに、それ以上に必要だ。そこに營團經濟の前途に屬目せざるを得ない所以がある。

（昭和十七年六月）

營團の本質

一　營團とは何ぞや

營團といふものは今日の一つの大きな問題であり、世界の問題でもあらうといふことを考へて居る人間として、營團に就て一應申上げて御參考にし、また御意見を伺ふ機會を得たい、かういふ考へで出て參つたのであります。題は極めて書生流に「營團の本質」、本質とは何だといふとこれも哲學者仲間で色々議論がありますが、これは別に動かない正體がそこにあるといふわけではありませんで、段々出來上つて行く物の生命と云ひますか、さういふものを假に本質と御諒解願ひたいと思ひます。

今日までのところ日本で七つ位の營團が出來て居りますが、この營團は實際の必要に應じてどうも會社では具合が悪いとか、あれでも困る、これでも困る。また統制會も作つて見たけれども

これでも具合が悪い。何かほかのものはないかといふやうなことで、前に住宅營團などがあるのを幸ひに營團といふことにしたのではないか。かういふ感じでやつてゐるやうに見えるのでありますが、實際に必要だからといふことで輕く見てはいけないので、人間がそれぞれの時の必要に應じて思ひ附きでやつて居りますことは、大きな時代の流れといふか、社會情勢といふか或は文明の變化とか云ふものが、氣のつかないで居る人間を使つてその大きな流れが色々なことをしかして行く。そのやつてゐる人間はその時の必要だと思ひ差當りのことだと思つてやつて居りますことが、實は哲學者の間で謂ひます「理性の狡智」といふやうなもので、自然の間に何かさうあるべきやうなもの、つまり本質的なものを人間が差當りの必要と考へるやうなことで段々に現してゆくものであらうと思ひます。それでこの營團が日本に現れたことに就て吾々はもつともつと大きなもの、その奥にある歴史的な變化とか、社會的な必然とか、或は國家的な要求であるとか、色々なものがそこに集つて居るものとしてもつと問題を大きく考へて見る必要があるのではないか。つまり本質的に問題を見る、或は一つのメタフィジックとしてそれを考へて見ることが必要であらうかと考へるのであります。最近交易營團に關する法律を作られることになつて、今

まで營團に就て考へて居つたよりは、遙かに吾々にとつても身近なものに感じさせて居ります。産業設備營團とか重要物資管理營團とかいふものを政府が作りました時に、どれだけの決心とどれだけの見透しを以てこれを作られたかといふことは別にお聽きする必要もないのでありますが、現れた結果から見ると、どうも今迄の具合では都合が悪いから作つて見た、統制會とはどう違ふのだと云ふと、統制會とは一寸違ふのだといふ樣なことで說明甚だ曖昧を極めて居る。これは政治的な意味合で曖昧であるとか或は實際上の理由とか法理上の理由で曖昧であるといふ意味ではありませぬ。これは一體會社企業と如何なる意味で違ふかといふことに就て極めてぼんやりした考へを持つて居られるのではないかといふ點で、吾々は今日以後の問題としてもつと率直に營團を見たい。これとは違ふあれとは違ふといふ行き方ではどうもいけないといふ感じがするのであります。勿論本質的なものはどういふものかといふことになれば違ふといふことから入らなくてはならぬといふことは學校で皆さん論理學或は哲學で御承知の通りでありますが、つまり「區別し得べからざるものは同一なり」といふ原則に依りまして、違ふといふことが、物の本質を見極める上に於て重要であるには違ひないのでありますが、どうも會社企業と營團との間に多くの違ひがあるといふことをあまり明かに考へて居らない。そのために今日會社企業は非常に不安な感じを持つてゐるのではなからうか。例へば今まで會社經營を一生懸命やつて居た方々が利潤追求はいかぬ、私利追求になるからいかぬと云はれると、何だか自分で申譯ないことをして居るやうな氣持になつて居る重役なり關係者が極めて多いのではないか。これに就ても會社は如何にあるべきものであり、どれだけの範圍で存在理由があるかといふことを國家が明かにその純理的な地位をきめて呉れない結果として甚だはつきりしない。會社企業を國家はどう見てゐるかといふことに就て、はつきりしないといふことの一半の責任は、營團の問題に對する國家の解釋が明かでないことにも據るのではないかと思ふものであります。會社は一定の收益を擧げる、その收益から、稅金を納め公債を持ち、色々な寄附金も拂つて居る。社會的に大きな負擔をし、國家に對する寄與に於ても、會社が一定の利潤を擧げればこそ國家の財政に就ても御奉公が出來て居る。かういふ狀態であるにも拘らず、その利潤を擧げること自體が何かモラルの上に於て、缺陷があるやうに考へることは日本としても甚だ大きな問題ではないか。營團は營團で宜しいのだ、會社は會社で宜しいのだといふ、けじめをつけるべきものであるならば早くつけて欲しい。かういふ感

じが致すので、營團とは何物であるかといふことを問題として、吾々のやうな書生は勿論、皆樣御仕事に關係のある方面で、色々の角度からこの問題を取上げて戴きたいといふことをお願ひもしまた私自身さういふことをして見たい。かういふわけで話をやれと云はれますと、喜んで書生らしい氣持でお引受けもし、また甚だ未熟なことでも申上げて見たいと考へたのであります。

二　近代資本主義の超克

それでは營團といふものはどんな意味で大切なものかといふと、これは一つの新しい世の中の經濟體制を意味するものである。十六七世紀から段々西洋で盛んになりました近代資本主義といふものが一應の段階に達しました。そこを脱出するに就てどんな形態で脱け出すだらうかといふことが多少とも經濟史とか經濟理論に就て考へをめぐらして居た人達の共通の問題だつたと思ひますが、最近のヨーロッパ或はアメリカではどういふことを考へて居るか存じませぬが、日本で營團を作り上げたといふことは、これは世界の經濟に對する大きな暗示でもあり、又これを巧く運營することが出來ることに依つて恐らく今日以後の世界の經濟に對する大きなお手本にもなり、又新しい世の中を――東亞の新秩序などと申しますけれども、何も東亞だけの問題ではない、遠慮なしに世界の新秩序を作つて宜しいので、それは別に政治上の形として何處をどういふ風に治めるとか、その治め方の手際の良いとか惡いとかいふことの問題でなくて、例へば行政の簡素化とか營團の運營といふ樣なことの中に恐らく新秩序の問題が解決されつつあるのだらう。その意味で今日營團の問題は世界の新秩序を本當に吾々が身を以て試しこれを行ひつつある。かういふ意味合に私自身感じて居るのであります。實際にキャピタリズムを吾々が今迄どういふ風に考へて來て居つたか、それをどう云ふ形で脱け出すことが出來ると思つて居たであらうか。これは多少横道の樣でありますけれども、それが營團の本質を明かにする一つの役立ちになるかと思ひます。大體資本主義をやつつけるとか直すとかいふ資本主義が形を整へるのと同じ意味でヨーロッパで社會主義運動が始つて來て居つたと見て宜しい。その歴史は殆んど同じものと考へて宜しいのであります。之が段々盛んになりまして各國とも自分の國のキャピタリズムといふことは考へて居りながらも別段それを自分の國のキャピタリズムとも考へないで、世界のキャピタリズムの一つの分れであるといふ意味合でキャピタリズムを育て奬勵する。その結果を税金としてとると

か或は何かの國家の役立ちにするといふことで、近代國家が自分を豐かにする一つの方便としてキャピタリズムを段々育て上げて參りました。その爲に今度は別の反對勢力がまた次第に世界的な形を執つて、その爲に萬國の勞働者或は資本家が二つの陣營に分れて階級鬪爭を展開するといふ段取まで考への上ではつきり現れまして、そこに世界經濟といふ舞臺が出來たと見られるのであります。さういふ世界經濟を形造つてゐるもの、即ち內容として考へられました近代の資本主義、それと爭ふ勢力として色々の形の社會主義運動があつた。そこで國家の存在を殆んど無視したやうな動きを見せて、十九世紀の半以後、殊に七十年代以後はさういふ傾向が極めて盛んになつたのでありますが、その中で比較的自分の息のかかつた資本を持ち、そしてそのキャピタリズムの運行に依つて利益を擧げて居る國が所謂持てる國であります。持たない方はいつでも資本主義のオブジェクトに廻る。資本主義の搾取を受ける立場に廻るといふことから、そこに一つの不調和が發生した。かういふ形で、今度の戰爭のやうな場合も、つまり國家が自分のキャピタルを召集して自分の手許に之を集めて生產力を自分の手に確保しようといふ運動を始めた時にかういふ戰爭が起きたものと經濟的に觀察すればさういふ結論が出て來はしないかと思ふのであります。

そしてその生產力を無限として考へた時に資源と云ふ考へ方になる筈であります。即ち自分のところの生產力を無限にあらしめやうと考へる時にそこに資源と云ふ考へが出て參るのであります。今日の戰ひはその意味に於て各國家意志を以てする生產力の增强と云ひますか、それを確保して行かうとするところから起きて來る問題として見ることが出來る狀態に立ち到つてゐるのだらうと思ふのであります。さうなると生產力の動きがこれから先の世界經濟の狀態を極めるものと考へて宜しいわけであります。前には世界經濟全體を通じて景氣變動といふ樣なことがありました。つまりキャピタリズム自身の內部構造に依つて好景氣が來るとか、デプレッションが來るとかいふことで周期的に波を打つてゐる樣に考へた。それ以前には恐慌は病氣ででもあるやうに考へた。それが段々考へが進みまして、先の世界大戰以後はさういふ恐慌を以て突發的な病氣のやうな癖狀態とは考へないで、それも一つの運動の在り方といふ樣に考へが廣くなりました。つまり恐慌をアブノーマルなものと考へないで矢張りノーマルなものの一つの形といふ風に考へる樣に進んだ譯でありますが、その考へ方が更に今日になりますと、各國の生產力の間の釣合の問題として景氣變動といふ問題を考へ直さうとする狀態に進んで來てゐると思ひます。これは前の景氣變

動であつたならば時間的に波を打つて段々進むといふ形でありますが、時間上の動きだけでなしにこれを世界全體の上にばら撒きまして、つまり時間的にも空間的にも色々な凸凹が出來るものとして觀るのであります。これは世界全體が一定の方向に動いて居ると云ふ考へ方だけだつたものが、もう一つのデメンシヨンが入りまして一つの擴がつたものの間で凸凹が生ずる。そしてその間に時間的にも空間的にも釣合をとつて行く。釣合が取れなくなつた時に戰爭が始るといふ樣に考へて宜しいだらうと思ひます。今迄のキャピタリズム、ことに金融資本に依つて左右されて居ります狀態に於ては世界的に一つの動きを示し、例へばニューヨーク、ロンドン、ベルリンといふ樣な所の金利が同じ動きを示すといふことが十九世紀の七十年代から始りまして、その時を以て世界經濟が新な形をとつたものと諒解して居るのでありますが、その繼つたものが單純に波動的に動いてゆくといふのではなく、各國が自分の生産力を確保して行かうと云ふ意欲を持出したその時から別の釣合の問題が生じたのであります。それが今日始つた狀態である。かういふ風に考へて見てはどうかといふのであります。これは別に贊成者があるわけでもなし、何處の偉い學者が保證して呉れたわけでもなし、一つの觀察としてお聽き願ひたいのであります。

三　國民國家の生成

かういふ金融資本を中心としたキャピタリズムがユグヤ民族と關係があるかないかと云ふ議論は暫く別として、その金融資本主義に依つて世界經濟がリードされ、今申したやうな景氣變動がはつきりした恰好で出てをつたこの狀態を止めまして各々國家（ネーション・ステートといふもの）が自分の存在の爲に一定の生産力を保持して行かうといふことになりましてから、金融資本主義でなくて生産力資本主義といふ樣な形のものが現れて參つて居ると思ふのであります。その生産力を中心にした動きを決定して居る動機は只今申します樣に國家の生存權と云ふ考へでありますが、不思議なことには十八世紀あたりに人間が考へました考へが、今日に至つてややそれを實現して居るといふ樣な感じがするのであります。例へば天賦人權であるとか或は人間の生存權（ライト・トウ・サポート）といふ樣な考へは皆十八世紀の産物であります。これは中世キリスト教に對する啓蒙運動といふ樣な俗に還るといふ運動が明かになりまして、その時人間らしい要求を幾つも出して居るのであります。ところがそれを實際にやつて見ると生存權は個人としては

保證されるといふ見込が立たないので、結局これは一つの國民國家、ネーション・ステートとしてその權利を主張し實現することが出來る。天賦人權といふものを考へましても、それも國民單位ぐらゐに考へなくては具體的に社會的現象として現れる見込がない。かう云ふ狀態になつて十八世紀の西洋の學者或は思想家が考へた事柄が、大體その當時人間々々と稱して居りました時の人間が百年、二百年經つてそれが國民といふ單位だつたといふことが始めて分つたといふ狀態であります。それを實行して見ると忽ち世界中大きな戰ひの姿になつてしまつた。これがどんな解決をするか。つまりこの位ならば當分やつて行けるといふ目安がつきましたならば、少くとも經濟上戰爭をやる理由がなくなるといふ程でなくとも、少し止めてもよくはないかといふ狀態が來るかも知れぬと思ふのであります。斯樣に世界全體を通じての資本主義の動きといふものを考へて間違ひないとするならば、吾々の國內體制はどういふことになるのであるか。今日の戰爭に就て私は私の所へ訪ねて來た支那人の連中によく話をしたのですが、今度の戰爭は一體どうなるのですかといふ質問に對して、之はすべて吾々が百年二百年と暮して見た擧句に、各國とも國內に大きな變革を必要とするに至つて居る。その各國の變革を內の中でやらないでむしろ外に持つて行つてその解決を圖らなければならぬといふ狀態の下に起きて居る戰爭であつて、決してお前と俺と戰爭して俺の方が勝つたとか、お前の方が負けたとかいふことで片附くやうなものではないと考へなければならぬ。だからもしこの戰爭の行末を見極めやうといふならば、これは各國とも自分の國內の問題を考へなければならぬ。丁度西洋で云ふならばルネッサンスの後段々近代國家が形を整へて來た。それが今申しました樣な資本主義を利用し、そのうちそれを自分の範圍の中に取込まうといふことになつて大きな變革を必要とすることになつた。近代國家そのものとしてその內部體制を相當模樣替しなければならぬといふ情勢が世界中に起きて居る。それを特別の事情の下に早くやつたドイツの樣な國もあり、又非常に立遲れて居るフランスのやうな國もある。各國がその意味でその國內體制を何かの形で再編成しなければならぬといふ狀態に立ち到つて居るので、その爲に起きて居る戰爭と考へなければならぬ。かういふ話をしたことがある。私はその感じを今でも持つて居るのであります。かういふわけで日本も明治以來七十年の間西洋がやつて來たと同じやうなコースを辿つて、日本人の氣持から出たキャピタリズムではありませぬでせうけれども、形の上では兎に角色々の恰好で西洋の資本主義の組織を取入れましてやつて參つた

わけであります。勿論自分のところで出來た資本主義ではありませぬので、實質は非常に違つて居ります。例へば勞働爭議の解決の仕方といふやうなものを考へて見ましても、日本では經濟的な事情に依らない解決の仕方を澤山執つてゐる。ああいふところを見てもキャピタリズムの問題は日本では可成り違つた恰好で働いて來て居たと思ふのであります。それは兎に角七十年の歷史を經た日本の經濟が、何かここらで變らなければならぬといふわけでありますが、滿洲事變、支那事變と段々經過して參りまして、その間に大きな變化、例へば資本と經營との分離といふ問題が盛んに論ぜられる樣になり、またそれを實施する樣な方向に動いて來て居るのであります。この資本と經營の分離を最もはつきりさせやうと決心し、それを實行したものがこの營團であらうと思ふのであります。つまり資本の意思によつて生産を行ひ、收支をはかり、分配を行ふといふやり方ではもうやりきれなくなつて來てゐるといふ方面が相當にあるのであります。從つて資本と經營を分離するといふことは或る意味でこの資本といふものに意志を持たせないで、それは國民國家が自分で生存して行く爲の「生存の意思」に依つて經營をして行くといふことであります。つまり資本の意思、資本主の意圖による經營をやり、その結果生れたものを資本主が收めるといふやり方でないものが必要になつて來た。かういふことが段々明かに出て參つて、その結論として吾々がいま營團に辿りついて居るのだと考へられはしないかと思ふのであります。

四　國營觀念

この營團に就てよくそれは國營ではないかと申す方があります。國營と考へても一向差支へないのでありますが、國營の問題も昔の官營國營、或は專賣制度、鐵道を國營にしたとか、煙草を專賣にしたとか、ああいふものと同じやうなものとして今日の問題を考へる傾きがあるのは適當ではない。その點に就ても營團の本質を明かに見て戴く必要があると思ふのであります。鐵道が國營になつてゐるが、あれは營團ではないだらうかといふ話をされる方もありますが、これはつまり民間の企業といふものを中心にしてやつてをりました時にこの企業は國がやるのだといつただけで、その建前は民間企業中心であります。その民間企業の建前を假に國家が自分も民間企業と同じ平面に於てつまりそれ等と並んでこれをやつて見るといふだけの場合を今迄の官營といひ、國營と稱して居つたのであります。煙草は誰にやらせても宜しいのだが、今度は俺がやるのだと

いふとき、その俺がといふのは別に國家が國家たる意味に於てではなくて煙草會社と同じやうな立場に國家自らを置いてやつたのが煙草の專賣制度であります。鐵道も同じであります。民間の會社を買收し、自分がその資本計算といふ方面から見れば利益は少くても矢張りさういふ趣旨のものとして營んだのであります。鐵道會社の代りに鐵道省がやつて居るとか或は國家が自分の所の官吏をしてやらしめるといふ狀態になつて居るものが、つまり從來の官營であり國營であるのであります。從つて仕事の分野からいふと同じ平面に立つて居りまして自分はこちら側をやるお前等はそちら側をやれ、かういふ形になつて居たのが從來の官營國營であります。これがつまりリベラリズムの時のやり方と考へて宜しいわけであります。これはイギリスあたりの考へ方或は社會制度の中に非常に良く出て居りますので、普通吾々は國家といふものは全體として考へるといふ考へ方を、殊に日本人などは採るのでありますが、國家が人民もあらゆる企業も含んで居る全體でありながら、例へば大藏大臣を代表者にして民間の人間と同じ平面に並んで仕事をする。丁度これは國家に對して訴訟を起す、怪我をしたからといふので鐵道大臣を對手取つて訴訟を起す。ああいふ時に相手になる程度まで下りてくるといふことがイギリスにおける主權者の考へであります。殊に經濟の上などでは絶えずそのソヴェレンといふ樣な、全體であつてアブソルユートであるものが個々のものと同じ平面まで下りて來るといふ樣な考へ方をして居るのであります。これは封建制度に於て君主と家來が契約關係に入るといふ樣に考へることにも現れてゐると思はれますが、さういふ方面から考へて同じ樣なやり方をしたのが今迄の官營であり國營であつたのであります。國家意思を以て全體の經濟を動かして行く必要からこの仕事を國家がやるぞといふことを決めて運營するといふやり方ではありませぬで、むしろ財政上の必要とか、治安上の必要とか、軍事上の必要とか、さういふ他の動機はあるにはあつても經濟上の理由から行きますと民間企業と並んで同じ平面で仕事をする。ただその市場とかその仕事を獨占して他の者にやらせないといふ狀態がある爲に國營といふものが今日の營團の仕事と似通つた感じを與へてゐるに止まりまして、その考への基礎、出發點、その歸結といふものは全く違ふ狀態にあると見なければならないのであります。つまり前の個人的なキャピタリズムが行はれて居りました時代にその個人と同じ地位に立つて國家が働いたといふ意味から考へまして、決して之は所謂國家資本主義時代の傾向と同じに考へるわけには行かぬと思ふのであります。その意味から國營といふことに就て

も別な考へ方が新に今日出來て來てゐるといふことを考へてみる必要があるのであります。どうも言葉といふものは不自由なもので一つの言葉を色々に使ひ分けることは忙しい時誰もやりたがらない。中には言葉で考へる人もありまして、言葉が同じならば違つたものに使ひ分け兼るといふ人も多いので誤解を招き易い。それを一生懸命に吾々の樣な書生は違ひます違ひますと云つて手を振つてゐるといふ感じがないわけではないのでありますが、實際に於て國營といふことに就て、その國といふものの考へ方が根本的に變つた時に國營といふことの中味が變らないで居られる筈はないではないかと云ふことを考へて見る必要があるのであります。國と云つたら何時でもどの場合でも同じと思ふのは大きな間違ひであります。少くとも日本は前から國としては同じ行き方をし同じ氣持で進んで參りましても、日本國家が明治維新をやりました時には殆んど西洋の近代國家と同じ樣なことをやつて居つたわけでありまして、それから段々に向ふも變り此方も變つて參りまして、今日吾々のやつてゐる國のやり方は何も日本だけが特別なことをやつてゐるのではない。尤も非常に特別なことをやつてゐると云ひたがる人が多いのでありますが、これは氣持の上のことであります。日本の個性といふものがあるには違ひありませぬが、少くとも戰爭をし、仕事を色々進めて行く上に於て、西洋の奴がやつてゐることとほぼ似た樣なことをやらなくては戰爭もうまく行かぬのであります。その方面から考へますと日本國家も亦世界の一つの大きな流れの中で、同じやうな態度を執り同じ樣な方法で仕事を進めて居るものと見なければならぬのであります。今日吾々の云ふ營團なるものに就ても、西洋にあるのかとか何處の國の飜譯だらうとか云ひたがる人がある。兎角西洋に在るとしたらそれが本物で、日本で出來たのはたがが弛んでゐるのではないか等と考へたがる人が多いのでありますが、これは營團といふ名前はどうでもよいので、世界が今日當面してゐる問題を捉へた日本國民が、率直な氣持で新しい經濟機構に手を染めた第一番の成果であらうと思ふのであります。

五　營團に於ける資本の問題

只今申す樣な理由から考へまして營團を實際の上で例へば資本金といふものを考へることは間違ひだといふことがすぐに云へる筈であります。例へば重要物資管理營團の法律を見ると、資本金貳千萬圓と書いてある。産業設備營團にも資本金が書いてある。今度の交易營團の法律案の要

綱にも資本金參億圓と書いてありますが、併しこの資本金と云ふ考へ方はそれに依つて經營の意思を拘束するものである筈もないし、又その資本が經營の結果として自分の所に一定の分前を得るといふ約束をするやうな、つまり出發點でもあり、到達點でもある樣な資本金ではないぞといふことを政府が明かに考へて居ることだらうと私は思ふのであります。もしさうでなく考へるのでありましたならば、これは國策會社なり、或は普通の會社と何等撰ぶところもないのであります。その意味で誤解を避ける爲、或は本當に人民をして分らせる爲といふと言葉が惡いですが、本當に分つてゐるなら、そして人に分らせる親切があるならば營團に資本金等を置かないことにされたらよからうと思ふのであります。これは先程申しました資本と經營とを分離する。分離とは何かと云ふと經營に對して資本の意思を働かせぬ。その資本家なるが故に經營の結果を收めるといふことをやらせない。これがつまり資本と經營との分離であります。從つて資金が要るといふこととは關係しないのであります。ただ資本の意思に依つて經營を動かして行き又支へて行かうといふことをしなくなつたのだ。國家意思を以て國家が必要とする仕事をやる。その仕事の塊りが營團でありまして、結局資本力を以て何事かをなし何物かを支配する考へ方ではないぞといふことが明かにされたものが營團である。これが私が營團を以てキャピタリズムの從來の形から脫け出したものと考ふべしとする所以であります。つまり文字通り資本主義――資本の意思に依つて、資本を元にして例へば一つの店を開く。お前の所はどれだけの力があるか。どうも信用がない。人が金を貸して呉れないと云ふ時に自分の集めて居る資本を持出してこれを元にしてやる。それならば宜しいといふことで人も信用する。その代りこれは自分の持つてゐる財產を危險に曝すのだから、色々の形に動いて形が變つてから又元へ戻つて來た時にはこれにプラスアルファといふ樣なものになつてくる。かういふ建前の經營ではなくて、始めから國家がやれと云ふ要求を出す。それに從つてみな國家が云ふのであるからさうしなければならぬといふことで、金が入用と云へば金を持つてくる。物が入用と云へば物を持つてくる。かういふ組織の下で何で資本金といふ樣なものを必要とするか。この意味から行きましてもし營團が本當に資本主義を乘越えた新しい經濟體制であり、國家が自分の生產力を本當に動かして行く要求の下に出來たものであるとするならば、資本金の勘定、或は民間の出資はどうであるかといふことは別に仰らなくても良い筈だと思ふのであります。これは是非民間が營團に金を借りて貰ひたいといふことであるならば

別にそれは邪魔にはならぬといふことであるかも知れませぬが、場合に依つては非常に邪魔になるのであります。例へばこれは法律案の要綱として政府が發表なさつて、それによつて吾々書生が考へましても、民間の出資に對して相當の利益――利益と云つてはいかぬ、配當を考へてくれることになります場合に、現にその法律に依つて動いてゐるこちらの營團の樣に政府が公債を以てその出資をする。實際には利息だけより使へないと云ふ形で政府が出資をしてくれると云ふ樣なものが新しく出來る營團であるとするならば、三億の資本の中で、例へば壹億五千萬圓を政府が出して、壹億五千萬圓を民間から出すとする。その民間から出した壹億五千萬圓に對しては政府が三分五厘の配當を保證してやると致しまして、片方の壹億五千萬圓に對しては公債を渡してその利息だけを使へといふことになりますと、丁度帳消しになる樣な形で、政府から何も戴かなかつたと同じ結果になる譯であります。結果は民間から集めた壹億五千萬圓の資金が營團の資本といふことになる。資本とは云つてもそれに依つて發言權があるわけでないといふことになりますが、政府から戴いたものは右から左に行きまして壹億五千萬圓の資金が始めに吸收されたこれだけの話であります。それを大袈裟に參億を資本金にするとか、民間出資を認めるとか、又保證をしてやるとか色々云ひまして、實質は壹億五千萬圓の資金を持つといふだけの話であります。それで良いではないかと云へばそれだつて構はないのでありますが、私は何だかをかしいと云ふ感じを持つてゐる。いよいよとなると仲々重大な問題ではなからうか。その經營の當事者となるとこれは相當に問題だらうと思ふ。

六　個人の立場

斯樣な理由から考へまして、營團といふものをどう云ふ風に政府もお考へになつて居るか、又民間の方々にしてもかういふものを如何に將來動かして行くべきかといふことに就て、はつきりした感じを持たない。私の所などにも一體どうなるのですかと云つて見える方もある。營團に就ての見透しを聽かせてくれと云つて來る方があります。國家の見透しですか、あなた方の立場からする見透しですか、御註文に依つて申上げると云ふと大抵は國家の方ではない樣なお話であります。昨日も實はさういふことを申したのであります。例へば交易營團が出來る。するとあなた方の仕事がなくなるといふ場合が起きたとする。交易營團が出來たからなくなるのだとお考へに

なり易いけれども、さういふ事態が起きた時にさうお考へになるのは間違ひだらうと僕は思ふ。現在の様な狀態をもう暫く續けて行けば日本の交易といふものは、止つてしまふだらうと私は感ずる。これは觀察であります。たださういふ感じがするのでありますが、この感じを證明する材料は決してないわけではない。段々輸出も出來なくなり輸入も出來なくなる。物資交易などと云つても實際に動かなくなると云ふ狀態が何年か先に出て來るといふことが考へられるのであります。さういふことに對して何か國家として早くしておかなければならぬと云ふ爲に、ここで一つ國家の意思を以て一つの大きな經營を作つてそれに依つて物資交易を圓滑にやつて行きたいといふので始めた仕事なのであります。交易そのものがなくなる以上は默つてゐてもあなた方の仕事はなくなる筈なのだ。或は國内の政治問題として貿易業者がなくなるといふことはどうかといふことは暫く別として、兎も角國家は物資交流をやらなければならぬ。或る意味で國家の厖大な要求を如何に處理するかといふことに就て、國内と云はず國外と云はず處理しなければならぬ爲に國家が捨身になつて經營をやらうとし、その爲に一つの形を作らうとしてゐるので、さう云ふ矢先にそれが出來たといふことに依つて俺達の仕事がなくなつたと云ふ風に考へたならば餘程頓馬な話ではありませぬかと申上げた。大變失禮な言分であるけれども、もしどんな風になるのだと訊かれると私はさう申上げたい。だから世の中がかういふ狀態になつてくるのに對して國家が對處しやうとしてゐる。それが出來たから俺達の商賣がなくなつたのだと考へてよい様な時節でもなければ狀態でもないといふことをお考へになつて、それでどうしやうかといふことをお決め願ひたいと申したのであります。かういふ要求から考へますと、例へば問題を限つて交易營團といふことにしても、國家に實際にさういふ必要が起きて來た。これは何も單に戰爭してゐるからさうだと云ふ問題ではありませぬので、今日、日本或は世界の國々の要求は從來のキャピタリズムのままではどうしても行けないといふことをみな考へて居るのであります。國内的には段々例へば今日の狀態でもみな同じ飯を食つて居る。同じ配給米を食べることになつてゐる。この狀態が吾々にとつて何を敎へて居るか。つまり國民生活の形が内部に於てどう云ふ形に動きつつあるかといふことを明かに示して居ると思ふのであります。そして國家はそれだけの全體を支へて行く爲に全力を擧げて自分のところの生産力或は資源を活用する。外に向つて働きかけることの出來るものは殘らずそれを使つて行くと云ふやり方をしなければならぬといふことを何年かやつた擧

句に、どう云ふ狀態がその次に來るかといふことを考へましたならば、決して甘い考へを持つてはならぬ。もつと云へば從來通りの惰性で行けるかといふと、少くともその惰性が打切られて別の運動が始つてゐる時に、新しい動きは新しい惰性を持つといふことを私等は考へねばならない。さういふ點で將來例へば戰爭が濟んだらどうなるかといふ樣なことを――私は豫言者ではないけれども、かういふ時節には豫言者みたいな氣持でも持たないと段々生きて居られなくなるだらうと思ふのでありますが――兎に角一つの見透しとして考へるならば、新しい時勢と云ふものは今日の狀態から推測出來る筈であります。戰爭が濟んだ、平和になつた、みんな和かな氣持でニコニコし出すことはないのであると私は信じてゐる。多分今迄と同じ位ニコニコしても、彼奴やつたんだなといふ氣持があるから、今迄の樣に釋然としないだらう。氣を許せない奴だとかねがね思つてゐたけれども、かふまで意地の惡い奴だとは思はなかつた。そんな感じをお互に持つでせう。みな周りの人間に對してすなはち國民に對して、これは闘が高いぞといふことをお互に感ずるやうなことが、世界平和であると思ふのであります。闘が高いと思つてもぶち毀せると思つてゐる間は戰爭でありますが、闘が高いなとお互に思ひ合ふ樣な世界平和の狀態に於ては、今の樣なあくまで國全體の經濟が一團となつてはたらく狀態を、相當程度續けるのでなければ國が持たぬことが明かであり、さういふことを本當に擔つて行く爲には、個人的な資本主義の段階ではとてもやりきれないことが分りまして、國家意志を以て經營を動かして行くといふことに全力を擧げやうといふ意味で、個々の資本主に對しては氣の毒であるけれども我慢して呉れよといふ狀態が既に始つてゐると思ふのであります。かういふ意味でこの營團を經營することは大きな責任であります。

七　營團經營の倫理

私は東亞共榮圏を理想國家に仕上げる爲には、日本國民は全部武士階級にならなければならぬといふことを申して居るのであります。日本人以外の各地域の住民たちはむしろ依然町人で宜しい。日本人は全體が武士にならなければならぬ。ところで營團の商賣は士族の商法で結構だと私は思つて居ります。商賣は多年經驗した俺達でなくては巧く行かぬといふ方もありますけれども、自分でなければ出來ないと思ふことが第一自惚至極な話で、かういふことを申しては甚だ失禮で

ありますが、俺でなくては駄目だ、よい後任がないから俺は辭職しないと云ふ人が居たらこれは死ぬことを忘れた人間であります。肝心な人が死んであとよい後任者がゐないからと云つて會社なり銀行なり學校なり營團なりが動かないでじつとしてゐるわけにはゆかない。死んだ人間の穴ひは別な人がやつて仕事は進むのであります。さういふ意味で俺がやらなければやれない等と考へることは意味のないことであります。誰だつてやれるのであります。手際の良いか悪いかは別です。唯やる人が本當に國家の意思を體して行ふといふことであるならば結果の如何は自ら別であります。うまくやれる人が居なければ、あとの連中で一等良い奴がやればそれで宜しいのであります。仕事が少し澁滯したからと云つて昔の様ではないといつても昔を今に返すことが出來、又返せば仕合せだとかいふことでもあるならでありますが、さういふ時節ではなくなつてゐるのであります。斯様に考へて見まして、今日の營團は少くとも從來のキャピタリズムを脱却してやらなければならぬ。人間は恰も武士階級の様な覺悟を以て本當に經營といふものを純粋な形で動かして行く。つまり先刻申しました様に今日世界中を擧げて國民國家の生存といふことを爭つてゐるのであります。その爭ひが單に爭ふことではありませぬので、人間の經濟生活の動き方から考へましても、つまり金融資本主義の形を取除いて生産力の資本主義といふものを純粋の形で動かしてゆく。餘剰を殖やすことによつて仕合せになるといふ様な考へ方ではなくなりました。つまり前の資本主義のやり方は一定の資本を以て出來るだけ澤山の餘剰を獲得することを考へて居つた。從つて消費財を作つては間に合はないのであります。生産財を作つて倍增しに鼠算的にひろげてゆく、所謂擴張再生産と申しますか、少くとも生産財を作る程餘剰が多くなるわけである。さういふ要求の下で動いて居りました經濟は消費といふことは問題にならない。在るものを食へといふことであります。資本の意思は自ら膨脹して行くことを望む。餘剰の澤山あるものを作るといふことでありますから勢ひさういふ形になつて行くのでありますが、今日吾々が國民國家を支へて行く、その主張を保つて行く爲に生産をするといふ場合に於てはもはやさういふことを云つて居つてはならない。むしろどれだけのものが入用なのだ。入用なものの爲には必ずしも最少の勞費を以てやるとは考へない。費用は構はぬといふ場合も起きてくると思ふ。やれるやうにやるといふことも必要になつて參ると思ふのであります。ただその場合に無駄をするといふ意味ではありませぬが、一定の目的を達する爲に費用を適度に使つて行く。それが今日の營團の要求で

あると思ふのであります。ここが前の會社企業の樣な餘剩を多くして行かうといふのとは自ら違ふやり方を必要としてゐるものと考へるのであります。

以上の樣な理由を以て私は營團の生れましたことに對して非常に大きな望みを繫ぎ、又これによつて新しい時代が始つたといふ感じで、所謂日本で建設々々と申しますこの建設はまさにかういふ所に在るのだと思つて居るのであります。それでは會社企業はどうなるのか、統制會はどういふ風に考へるかといふ問題も色々出て參ると思ふのでありますが、よく仕事の種類に依つては統制會でよいのだとか、物に依つては營團の方がよいのだとかいふことで地割をする樣な話がよく出て參りますけれども、國家自體の動きを考へることになりますと、或る時期に於て地割の問題も出て參りませう。特定の平面では、斷ち切つた瞬間ではさういふ問題も出て參りますが、時代全體として考へますと、株式會社形態、或は資本の意思を以て動いて行く樣な經營の形は將來どういふ風にをさまるべきであるかと云ふ問題も自ら明かになると思ふのであります。つまり營團とか統制會とか會社企業とかいふものをそれだけとして考へませんで、大きな座標、ひろい關聯の中に入れて、どのへんにをさまるべきものか、どんな動きの所に地位を占めて居るものとして考へるべきかを吟味致しましたならば、營團などといふものも今はこれ位の小ささであるけれども、將來は天を蓋ふ大木になるだらうと存じます。つまり芥子粒を見ても、その中に大きな世界を見得るものではないかと思ふのであります。さう云ふ意味で今日生れたばかりのさまざまの營團はまるで互に兄弟とも思へない。幼稚園の子供達を見てゐるやうで、同じ營團と云つても顏が違つてゐるやうでありますが、少くとも營團を作らうといふ氣分になつたその氣分は、新しい時代の動きの大切な芽であると思ふ。やがてこれが次の世界を支配する。世界の新秩序といふものはさういふ形で出て來るのではないかといふ感じを持つてゐるのであります。大變まとまりのないことばかり申上げましたが、御靜聽を煩しましたことをお禮申上げます。

（昭和十七年十二月五日
重要物資管理營團に於ける講演速記）

營團法と資本主義の問題

一

最近、營團に關する論述が新聞雜誌にのることも多いが、牧野英一博士の講演體の一文『營團法の文化的意義』（中央公論八月號）は、興味深く讀まされたものの一つである。

牧野先生は、この文においてその專門とされる法學的見地からの論究を展開しやうとはされず、ひろく文化理論、また社會哲學の問題としての考察を試みて居られるのではあるが、それがかへつて法律的解釋の上にきはめてよい示唆をあたへてゐると考へられるのである。卽ち、社會的文化全般の觀點から、法律的なるものを檢討せられてあるために、法律學の專門家でない者に解り易いかたちで問題が設定されてゐるといふだけでなしに、おそらく法律の玄人にとつても視野をひろからしめ、問題の所在を會得せしめられることになつてゐるのだらうと想はれるのである。

牧野先生によると、「株式會社が化けて營團となつた」のであるが、「その株式會社が、又、一種の化け物とされてをる」といふのである。「十九世紀において發達した株式會社は、一種の怪物になつてしまつたのであり、事業は、甚だしばしば國を越えて國際的なものになり、さうして、私法上の法人でありながら、一國の政治をも動かすものになつて國家の手にあまるものになつたのでありますが、もとはといへば、國家が、その法律をもつてこしらへたものに外ならぬのであります。國家は、みづから株式會社をこしらへておいて、その株式會社にいはば手をやくやうなことになつたのであります。そこで、營團法といふのは、それを、今、法律的にこしらへなほすことになつたものであります。」このやうな說明は、われわれをして、當然に株式會社と近代資本主義の發展との關聯をおもはしめるのであるが、牧野先生は、おそらくわざとかかる聯想に言及されなかつたものと考へられるのである。實際、十九世紀における株式會社の發達は、國家の外にわたつて、世界經濟を構築することとなり、資本主義經濟といふ魔力的存在の法律的形態となつた。

この近代資本主義の威力を抑へて、これを國家目的にしたがつて捕捉せむとしたところに、「個

人的資本主義」からいはゆる國家資本主義への移行があるといはねばならない。各國家は、その生産力乃至資源を自らの領域内に保存し、これを強化するにつとめることになつて、世界經濟は崩壞し、現在の如き國際情勢を現出してゐるのである。この新しき情勢に應ずるために、從來會社企業の形態をもつて營まれてゐた各般の生産事業を、別個の機制のもとに置かむとする試みがあるひは國策會社の設立となり、營團の創成となつてあらはれてゐるものといはねばならない。これほどの劃時代的な重要性を含むものとも推定せられる營團に對して、牧野先生の說明にしたがふと「專門家の方面においては、二つの批評が行はれてをります。その一つは、營團といふものは法律學上鵺的存在で、わけのわからぬものである、といふのであります。又、も一つは、從來の株式會社の組織で十分その目的を達することができるので、何も、わざわざかやうな新奇な制度を設ける必要はない、といふのであります。外に、勿論のこととして、現にできた營團法の規定が缺點の多いものであるといふのであります。」「これは新しい制度には兎角免れないものでありませう。それで、その立法技術的な缺點のことはそれといたしまして」新制度の文化的、思想的意義を考へて見たいといつて居られるのであるが、われわれは、專門家の批評なるものが、意外にも形式の奥に流れてゐる時代の動きや要請をかへりみてゐないらしいことを知つて、おどろかされるのである。營團が、新奇を好む好事家によつて言ひ出されたものぐらゐにしか考へられてゐないとすれば、日本の學問の進歩のために殘念であるばかりでなく、現代の國家社會における法律學の任務が、不當に目隱しをしてはゐないかといふ不安を感ずるものである。

二

「若しわたくしの心得てゐるところに誤がないならば商法の專門家たちは、兎角に營團に對して反情を示されるやうであります。商法家のすべてがさうであるとは申しませぬ。ただ、少くとも商法家の方面から最も手きびしい批評が投げかけられてをります。しかし、營團が公益法人か營利法人かわからぬといふことをいひ立て、社團か財團かわからぬといふことを主張するのは、營團が法人として新しいカテゴリーのものであることを考へない言ではありますまいか。」といふ牧野博士の說述を讀んで、一般に、重大な文化乃至思想の時代的な轉換にのぞんで概念の整理がつかないでゐることを痛切に感ぜしめられる。今日はまさに、公益法人と營利法人と、あるひは

社團と財團との區別を超えて、新しい思想をもつてのぞむべき時に立ち到つてゐるのである。假りに「經營財團」として考へても、財團の一樣式であるときめてはならないものに當面してゐるのである。社團と財團とを區別したその仕方ではとらへることのできないものに立ち向つてゐる筈であるから、それを無理に經營財團などいふには當らぬであらう。恰もかつて文化といふ概念がいひ出されたとき、それを文明開化といふのを簡約にしたのだと考へた人もあつた。しかし文化は、文明開化とはおよそ反對なものを考へてゐたのである。それと同じに營團を經營財團といふやうに見て、しひて財團的に解釋するのは、新しい酒を舊い革ぶくろに盛るにもひとしい。おもふに、經營とか、企業それ自體とかいふものを一團として概念すること、すなはち作用そのものを實體化して把握せむとする新しい理解の仕方が必要になつてゐるのである。立法技術的不備と考へられるものも、この新しい要請からいふときは、意外にも缺點でもなく不備でもなくなるかもしれないのである。

現在では、營團法といふものが、まだ會社法のやうに統一的な法律的體系があたへられてゐないので、ともすれば、會社法でも間に合ふ筈のものを、單獨の法規で規定したかのやうな感じしかあたへないのであるが、おそらくそれは、別に新に公法的な營團法といふ別な體系的な法律が定められて、國家目的の上から、また國民經濟の上から必要と認められた事業乃至企業を營團として指定してゆく法制的根據を明かにすべきものと考へられるのである。新に政府が出資したり、民間の出資をもとめたりして營團をつくるといふ場合ばかりでなく、從來存在してゐる經營體を、たとへば國家の生産擴充計畫の遂行上、特定期間にわたり一定の條件のもとに、營團として運營させて見るといふやうな場合もあり得るだらう。牧野先生も、生産擴充の問題に關聯して、會社といふものの思想につき百八十度の轉回が考へられる場合を指摘して居られるが、この生産擴充といふことは、すなはち國家が支配下にある生産力をあげて一定の方向にむかはしめむとする事實をいふので、そこに、個人的資本主義から、生産資本充當の上に國家意思を滲透せしめむとする新體制への推移の跡を見なくてはならないのである。

三

個人的資本主義經營といふものは、自由主義時代の終焉とともに性格的な變化を餘儀なくされ

たもので、今日にあつては、公益優先の方針が示してゐるやうに、國家目的の達成のための經營としてのみ存在できるのだといふことに、ほぼ思想上の一致を見せてゐるといへるだらう。だからもし個人的資本主義經營のみが、資本主義經濟の本來の姿だとすれば、資本主義といふものは、すでに終りを告げたものといはねばならない。近頃は餘り資本主義がどうのかうのといふ議論がなくなつてゐるが、大方もう片づいたとでも思つてゐるのかもしれない。しかし、資本主義の問題といふものは、さう簡單ではない。それはむしろ個人的資本主義から國家的資本主義ともよぶべきものに移行してゐる狀況にあるので、かやうな資本主義經濟の變貌が、昨今、會社企業の外に注目され出した營團經濟とよばれるものの出現にあらはれてゐるといはねばならない。すなはち營團なる經營態は、實に近代資本主義が、長き發展の後に漸く營利主義的屬性を拭ひすてて、本來の面目ともいふべき生産性を極力發揮せむとするに至つた現實の姿なのである。

一般に資本主義といふとき、その本然の性格が、生産力の充實を旨とするものだといふことを看遁して、ただ營利的資本蓄積を企てるものと解釋して來た。しかし歐羅巴に榮えた近代資本主義、したがつて日本に移植された資本主義といふものは、必ずしも金儲け主義や猶太商人的な拜金主義を趣旨とするものではなかつた。そこにはつねに力づよき生産への意思がはたらいてゐた。物をつくる努力があつた。金融資本を中樞とするのとは異つて、生産資本を核心とするものであつた。發展の過程において、金融資本が前面につよくあらはれて、資本主義經濟全體が、營利主義的な金融資本の傀儡にすぎぬやうな外觀を呈することも少くなかつたが、それ故に生産力を充實させやうとする本性が失はれたわけではなかつた。否その横合ひから便乘して來た營利的な猶太的資本主義を逐ひ出すことに、あらゆる努力を惜しまなかつたのである。

一切の資本主義攻擊の狙つたところも、みなこの近代資本主義に本質的でない營利主義を排擊して、生産力の充實のための眞摯な努力を保育するにあつた。この努力を伸張せんとする企てが、一應營團經濟の構成において、深く吟味されることになつてゐるといつてよいのである。もちろん、たとへば『會社經理統制令』の如き規定によつて、會社企業も亦著しくその營利主義的屬性を抑制せしめられてはゐるので、一般に私企業、すなはち個人的資本主義經營も、相當程度に營團經濟化せられて來てゐるものといはねばならない。したがつて今日いつてゐる營團なるものの みが、ひとりよく生産資本主義の面目を體現する、經營體となるものであるとは豫斷することは

できないし、またすべき理由もないが、少くも資本主義の問題は、營團經濟の構成を通じて、生産力を中心とする近代資本主義の積極面へ一大進展をなしとげつつあるものといはねばならぬ。自由主義市場經濟ならびに個人的資本主義經營の抑壓といふ消極面だけで、全面的に資本主義が消去されてしまつたかのやうに思ひ込むのは、もつとも戒むべき早計である。

（昭和十七年八月）

戰爭と營團

（昭和十八年四月日本工業倶樂部座談會における談話要旨）

一

現在營團と名づけられて居ります機構は、それぞれ設立事情も異つて居りまして、必ずしもこれらを一律に考へるわけには參らぬのであります。また表面營團とよばれては居りませんでも、「金庫」のやうに金融部面における營團機構と見るべきものが若干あるのでありますが、茲では主として近く設立される筈の交易營團の場合を例といたして見たいと存じます。と申しますのは、今度の交易營團といふものが、統制會機構で統制して居りました業務を更に深めてゆくことになつて居ります點で、たとへば産業設備營團をつくりました場合などとも餘程趣を異にしてゐるものがあると考へられるからであります。即ち産業設備營團の設置は民間の會社企業では手の出な

い仕事を、政府の命をうけてやるのだといふやうな場合として、あまり問題なしに一般にうけとられたのですが、交易營團の場合は、何となく民間の會社でもやれさうな氣のする仕事の部面に營團が割込んで來たといふ感じを與へ易いところが違つて居るやうであります。自然、營團そのものの理念とか、機構とか、作用とか申すものについて、何人も一度考へて見たくなる。これまでの營團なら、ああ出來たなと氣輕に考へてもゐられたのでありましたが、交易營團といふことになつてから、俄かに議論も活潑になり、世間の視聽をそびやかすことになつたといふのも、唯今申しましたやうな事情もあり、また今後の生產部面における經營形態の問題にも差ひびくところが多いといふ氣構へにもとづくのであらうかと思はれるのであります。かやうな意味合から、交易營團の場合を以て一應營團といふものを代表せしめて話をすすめることにいたしてもよろしからうと考へたのでありますが、この營團なるものは、戰爭中だけのものかどうか、すなはち今は戰爭の最中でこの重大な時節に國家緊急の必要に應ずるためにのみ營團がいるのだと考へてよいのであらうか。それともかかる戰時の必要といふ以外にも營團の存在理由があるものなのかどうか、かやうな點について今日のところ一般に明かな見極めがつきかねてゐるのではなからうか。

そこに一つの重大な問題があるやうに考へまして、「戰爭と營團」といふ題をもとめて所見を申上げて見たいと存ずる次第であります。

民間企業に委せて置いてはやらなくなる、またやれなくもなるといふ仕事を、政府が命じて行はしむるといふ趣意は、交易營團の場合にもたしかにあると考へられます。その點は食糧營團とか、產業設備營團とかと同じ趣をもつてゐるのであります。御承知のごとく現狀をもつて推移いたしましたならば、日本の所要物資の輸入は、現地物價高のために、內地の價格關係に照し合はせて相當難澁を來すと見なくてはならないので、これでは國家の要求を充すだけの物資の輸入は到底自然の成行に委せて置けない狀況にいたつて居るのであります。かやうな輸入の事情とは反對に、內地の價格と比べまして、現地では、內地からの輸出物資は一般物資と同じく非常な昂騰を示して居りますので、自由に輸出を認めますならば、內地自らの必需物資さへもドシドシ流れ出るわけであります。一兩年前までは、日本からの輸出といふものは、勿論現地における調辨に對する見返物資の供給として考へなくてはならぬのでありますが、現地物價高を目あてに出すぎて困るため、どうしてそれを抑壓したらよいか、また輸出した際には、不當に日本商品を安賣り

せしめぬやうにといふ調整について、苦心いたして參つたのであります。この段階におきましては、民間企業すなはち貿易業者に仕事をすすめさせて、これを一定の枠にあてはめて統制し、調整をするといふ程度でよかつたのであります。ところが、今日におきましては、現地からの輸入の困難は次第に增して參りましたばかりでなく、內地からの現地へ輸出する方面も、生產事情からいつて相當窮屈になつて參つたので、よほどの努力を拂ふのでなくては、物資交流は覺束ないのではあるまいかと觀られるのであります。したがつて民間企業としてはやり難いとか、やらなくなるといふ面が日を逐ふてひろがつて參りましたから、政府の命をうけてこの難局を打開する擔當者が是非必要だといふ段階に達してゐるのであります。いひかへますれば民間企業では手の出ない仕事を營團がやるといふ趣旨は、交易營團の場合にも、たしかにあるのだと申さなくてはなりませぬ。

もし交易營團の狙ふところが、それだけのものだといたしますならば、おそらく民間企業との摩擦などいふ問題もないものと考へてよい筈であります。勿論その間に多少局部的には、民業を押のけるといふ結果を示すことになるかもしれませぬが、總體としては營團は民間企業の出來ないところだけの穴埋めをやる機關として、申さば極めて愼ましやかなものである筈であります。後見人の如き重要さをもつ程度のもので、國家補償制度が少し積極的になつたぐらゐに見られぬことではないのであります。從つて、多少とも事態が收まつて、民間企業が活潑に動けるやうになるならば、そしてそれが大體國家の要請に應ずるやうに活動出來る段階に立ち到れば、別に營團などいふものはいらなくなるだらう、暗い間だけ重寶な行燈なので、晝行燈になつては困りものだといふ考へも成立つわけでありませう。かやうな理由から、營團は戰時中だけの應急措置にすぎないものだらうと、極論する人々も案外尠くないかとも考へられるのであります。申すまでもなく戰時中といふことが相當長期のものであると見られるといふことから、たとへ應急措置だからといつて必ずしも短い期間をいつてゐるわけではないといふのが、それらの人々の當然つけ足して言はれる點であらうと思はれますが、それにしても戰爭によつて生れた營團は、結局戰爭中の壽命しかないものだといふ結論をもつて居られることになるのであります。戰爭をはなれて營團は存在の理由をもつてゐないのは勿論、戰爭の進み方によつては、たとへ戰時中でも營團の必要は著しく減ずる場合さへ考へてよろしからうから、何もさう營團々々と大きな聲でいはなく

ともよいではないかといふのが、その肚でもあらうかと察せられるのであります。かやうな見解が果して妥當であるか否かについて多少の説明を申上げて見たいのであります。

二

民間企業に委せて置いて精々統制會ぐらゐでよいではないか、その方が民間人の創意と熱意とを十二分に發揮させることも出來るのだから、むしろ各會社企業に利潤も與へる方策で進むのが、もつとも能率的で人心作興の上からいつても賢明な仕方といふものだ、といふ意見の方が少くなからうと想像されます。もし今日の事態がこの流儀でやり拔けますものならば、あるひは甚だ仕合せであるかもしれませぬが、實際の國の内外の情勢は、かやうな段階から一歩を進めて參らなくてはならぬことを敎へてゐると思はれるのであります。そこでこの一歩前進の仕方でありますが、現狀維持だけを目標とする方面からいひますと、多少とも變更改新を企てる場合は、これをイデオロギーの問題だといふ觀方をする人が少くないのでありますが、今日は殆んど世界を通じて「どうしたらよからうか」に齷齪してゐる有樣で、以前よく申されましたイデオロギーなどいふものは、殆んど影をひそめてしまつていはばその日暮しであります。これはおそらく大きな時代の變り目にぶつつかつてゐるからだらうと考へられます。イデオロギーはともかくとして、利潤追及はいかんとか、自由主義だから怪しからんとかいふことが、今日ではかなり感情的に批難の矢を向ける傾向がつよく、これに對して利潤は認むべきものだと反駁する人々も、とかく氣分的に應酬してゐるやうであります。旨味をもたせないと人間は働かないものだといふやうな程度の見解を持して、利潤反對を一蹴せむとするのでありますが、これはもう少し別な角度から觀察する必要があるのではないかと考へられるのであります。すなはち利潤を否定するとかしないとかいふ以前に、利潤といふものが實際に成立し得ないやうな狀態になつてゐるのではないかといふ問題がある。つまり利潤は市場の危險を冒した資本に對する報酬と考へてよいならば、もし市場の危險といふものがまるでなくなつて、危險といへば、大體戰爭による危險に歸著してしまふとか、政治的な性質の危險になつてしまふとかいふ場合には、從來會社企業が當然に收めてゐた經濟的危險に對する報酬は成立ちやうがないことになるわけであります。商品を生產して、これを市場に賣出し、利益を擧げる、貸附を行つて金利を稼ぐといふ仕組は、今日の狀態にあつては、

以前のやうに純粋に動いて居らないことは何人も爭ひ得ないところで、經濟的な判斷なり、處置なりを以てしては、見當がつきかねる事態に置かれて居ると申さなくてはなりません。かやうに市場機構といふものが全く變貌いたし、市場危險が資本の力によつて負擔されるといふわけではなくなつたといたしますと、企業利潤といふものが從來の如くに當然に成立つといふことが出來ないのであります。そんなことでは、誰も資本を働かせなくなるとか、旨味がないとなれば仕事をやらなくなるだらうといふことは暫く別として、利潤追及をしたくとも致しやうがないのが、現實の姿だといふことであります。だから怪しからんとか、いかんとか申すべき筋のものでもなく、また怪しからんといつてゐるのが怪しからぬと敦圉くのも當らないのであります。その場合、注意すべきことは拮据經營した努力に對する勤勞報酬は、おのづから別だといふことであります。

從來、利潤といふ内には、資本に對する報酬と、いはば經營の勤勞に對する報酬とが區別をされずに含まれてゐて、これを引くるめて企業の旨味であると認められてゐたのであります。それでよく申されます「資本と經營との分離」といふことは、おそらくかやうな區別を爲すべきだといふことであつたかと思はれますが、これはわれわれが複式簿記で、資本金勘定を他の諸々の勘定科目から獨立させて、その資本金勘定には經營上の損益の結末を歸屬させるといふ仕方に代へまして、單に一定の利子を資本金勘定に計上するに止め、損益勘定の結末を資本金勘定に持ち込むことをしない場合に相當するのであります。會社企業は、いはゆる資本計算の建前をとつて居るもので、元入した資本を廣い意味での市場危險にさらしまして、それから生ずる資本自體の收支損益の計算を行ふことになつて居るのでありますが、資本と經營とを分けます場合は、かかる資本計算ではなくなりまして、經營計算とか經濟計算とか申すべきものとなる筈であります。これは資本が市場危險を冒す、すなはち資本冒險が中心となつて居る資本主義經濟の時代には適しない仕方でありませうが、さきに申しましたやうに、市場危險といふものが消滅しまして、あらゆる生産販賣が、價格上も數量上も計畫化されて參りました場合には、一定の生産を實行するための經營計算あるひは經濟計算といふことに重點が置かれます結果、それに必要な資金に對しては、一定の利子だけが報酬として支拂はれてよいことになるのだらうと考へられるのであります。經濟の建前が變化しました結果として、從來の利潤といふ所得が、そのままでは成立たぬことになるので、そこに利潤追及が問題視せられる理由もあるのだと申さねばならぬのであります。い

はゆる會社經理統制令が出されたといふことも、その狙ひは、經濟の機構が變つて參つたので、會社企業の經理そのものに一つの轉化を必要と認め、これを促進させやうといふのであつたらうと思はれるのであります。

今日、會社經理統制令の實際の效果は、企業の經營全般を睨んでゐるわけではなく、精々給與統制の程度を超えてゐないやうに思はれるのでありますが、本來の狙ひどころから申せば、決して給與についてとやかくいふことにあつたのではないと想像されるのであります。假りに企業の經營全般に立ち入ることを自覺的に目標としなかつたといたしましても、時代の要求と申しますか、國家が經濟社會に對して要請して居るところは、會社企業そのものについて、從來と異つた態度をとらなくてはならぬことになつたためであると考へられるのであります。この點は、われわれが營團といふ經濟機構を考へます上に極めて重大であります。すなはち國家として會社企業を如何に觀てゆくのであるか。會社が利潤をあげてゐるとか、資本の增殖を行つてゐるとかいふ現實に卽應しまして、稅を課する、國債を引受けさせるといふ程度で凌ぎをつけてゆくだけでよろしいのであるか。經濟の建前が著しく變化しまして、利潤獲得、資本增殖を放任して置くことも出來ないし、またしだいにそれが出來ないやうになつて來てゐる以上は、國家はこれに對して速かに態度を明かにする必要がある。國家は會社企業に對して、その經理の仕方なり、活動の限界なり、全體經濟における地位なりを、明確に規定することをいたさなくてはならぬ筈で、會社經理統制令をすすめまして、計畫的な國の經濟の運營における會社企業のまさにあるべき姿を指示することが、急務であらうかと思はれる次第であります。このことがなされずに、個々の營團法を設けそれぞれの營團をつくることだけになつてゐることは、どうも片手落ちではあるまいかと考へられるのであります。

三

營團の設置は、さきに申しましたやうに消極的に民間企業の補助をさせるといふ以上に、もつと積極的な意義をそなへてゐるものであることを考へなくてはなりませぬので、そこに、單に戰爭中とか、戰時下緊急の必要といふ範圍に止まるものではないと思はれる所以があるのであります。自由企業といふものが、しだいにあるエックスのなかに逐ひ込まれて來てゐるといふ觀察は、

アメリカあたりでも、やうやく人々の心を捉へてゐるやうでありますが、このエックスは、國によつては國家資本主義と呼び、ファシズムと名づけてゐるところのものであるが、アメリカでも、かやうな現象の存在は、もはや爭ひ難い事實だと考へ、それは、經營といふことを中心とする機構であると見てゐるのであります。すなはち國の經濟全體が、いはゆる計畫化されて生産消費の方向にせよ、それらの内容にせよ、著しく規制されて來つつあるといふことは、今日世界を通じての傾向であつて、その計畫的な經濟規制といふことが、一般に資本の增殖をはかるといふ動機とは全く異つた狙ひをもつやうになつてゐることも、ほぼ疑ひ難いところだと觀られてゐるのであります。國家の要請にもとづいた國民經濟の必要によつて、一切の經濟活動が規正されざるを得ないことになつたのでありますから、從來の自由企業といふものは、どうもそのままの姿でゐるわけには行かぬといふのが、世界の現狀でありませう。ところで、日本におきまして、營團といふものが生れたのを、どこかの國の型を輸入したのではないかといふ疑問をもつ方も少くないやうであります。また「營團」といふのは外國の何かの飜譯ででもあるかの如くにきめ込んでゐる人もあるらしいのでありますが、事柄は決してさやうに簡單ではないのであります。型式とか名稱とかの似通ひをたづねて、新奇を衒ふ流行として片づけるにしては、事は餘りに重大であり、遙かに差迫つた事態であると申さねばならぬのであります。

現在問題となつて居る營團は、たしかにわれわれ日本人の創意に成つたもので、おそらく新秩序を具體化した機構であると考へられるのであります。他の國に類似のものがあるとか、ないとかいふことに拘らない構想のものであります。一言にして申せば、それは經營それ自らを指すものであります。いはば經營そのものを一團として觀たものでありまして、純粹の經營態をいふのでありますから、社團とか財團とかいふ法律學的にきめた從前の構成態とは、全く別のものであると申さなくてはなりません。これまでの會社企業にいたしましても、いはゆる重役企業として考へられますやうに、必ずしも資本所有の關係のみで、動いてゐたと觀るべきでなく、すでに多分に經營自體として存立を主張してゐたのでありますから、經營そのものを純粹にあらはすところの營團といふものが出來たからといつて、さう不思議に思ふべき理由もない筈であります。資本の增殖だけを唯一の目的としないで、多少とも事業そのものを立派なものに仕上げてゆくといふ動機は、從來とても産業界に、その例がなかつたわけではないのでありますから、營團が出來

てどういふ仕方ではたらくかは、おのづから見當がつくことであります。ただ營團といふものは、國家が經濟に對してもつ要望を率直にとりいれまして、仕事をすすめてゆくものでありますので、その點は會社企業などとは、著しく異るべきものであります。勿論、株式會社としての構成をもちながら、國家目的に即した施策の實施機關として、國策會社といふものもあるのではありますが、もしこの國策會社が、その構成上の特質に全く左右されずに、純粋な國策具現のための經營態としてはたらく場合には、それはとりもなほさず營團なのであります。今日營團と呼ばれて居りますもので、あるひは國策會社に近いものがあるかもしれませぬし、國策會社として通つてゐるものの内には、むしろ營團的のものと見るべきものがあるかもしれないのであります。今後、營團がいかなる名稱をとり、また機能上の分化をとげることになるか豫想しがたいのでありますが、會社組織にも幾通りもあります如くに、營團といふものにも種々多樣な機構をとることが考へられてよいのであります。要は、國家の要請に應ずべき經濟上の經營態であることが、營團の根本的な構成要件であります。

それでは、營團は「國營」といふことにならぬかといふ質問が出るであらうと存じますが、それは從來申すところの「國營」ではないのであります。これまで國有鐵道のごとき場合は、大體において、國家が會社企業と同じ立場に下り立つて獨占的に運營する仕方を指して居たのであります。その運營にあたる要員は、國家の官吏でありますが、それが官吏であるといふことは、かへつて、國家が鐵道會社と同格になつてやつてゐることの建前を示すもので、「國營」といふ特質を示してゐる證據でもあるのであります。國家がやつてゐるのだから、官吏が事に當つてゐるといふまでで、鐵道會社ではその社員がやるといふのと變りはないのであります。ところが營團では業務の擔當者は官吏ではなく、會社企業と同列にならぶものではないので、國の定めた計畫を實行する機關として、會社企業とは異つた地位を占めて居るのであります。この意味で、おそらく屢々統制會と似たものと觀られた所以でもあらうかと思はれますが、しかし統制會と營團とを比較することは、全然當を得て居りませぬ。統制會は會社企業の存在を前提し、これに依存しまして、その上に出來上つたものであります。これに反して、營團は消極的には、會社企業の補助をつとめもいたしますことは、產業設備營團の例でも明かでありますが、本來の機能から申せば、會社企業の達成し難い目的のために存立せしめられる經濟機構でありまして、會社企業の存

在を前提するものではないのであります。たとへば交易營團が業者たる各個の企業を實務擔當者として活用することがあるからといつて、それが統制會とその下部機構たる業者との關聯の如くに見立てるわけには參らないのであります。いひかへますれば、營團と會社企業とは、同じ範圍においては、便宜の處置としてはともかく、本來から申せば兩立し得ない性格と機能とをもつてゐるものなのであります。したがつて營團の存在が必要となつた場合に、會社企業は元のままの姿ではゐられなくなる筈のもので、そこに國家として、會社企業の向ふべき途を明示することなしに、營團の設置を促進することは妥當を缺くといふ結論も生れて來るので、會社經理統制令ぐらゐでは物足らぬものであることは、前に申上げた通りであります。

四

しからば國家は營團に何を期待するのであるだらうか。その要請はどのやうな內容をそなへるものと考へたらよろしいのであらうか。假りに產業設備といふ限られた範圍をとりあげて見た場合に、各個の企業は、その資本投下乃至償却の關係からいつて、その設備をとりかへることが容易ではなく、自然生產效率のわるいものでも維持してゆく他はないといふこともあるわけでありますが、一國の生產力をたかめるといふ目的からいふと、そのままではいけないといふので、產業設備營團が適切なる改善のための肩替りをしてゆくといふことにするのであります。これは、私企業の助成といふ域を超えまして、國の生產力全體を充實させてゆくといふ目的から規定された積極的な努力であります。また更に數步をすすめて、生產營團といふやうなものがつくられました場合には、同じく國の生產を增强いたしますために、大小の私企業を糾合して最高效率を發揮するやうに配置を定め運營をいたすのであります。そしてそれらの生產物資の配給を圓滑にし、適正なる價格維持をはかることが、物資營團といふものの任務となるわけでありまして、今日いふところの交易營團といふものは、おそらくその交易部門に重點を置いた機構であらうかと推察されるのであります。要約して申せば、國の生產力を保持し、これを擴充し、その效果を最高度に發揮せしむることこそ、國家が營團に對して期待する眼目なのであらう、と私かに信じて居る次第であります。

かやうに國の生產力の增强とこれの有效適切な充用をはかりますために、國家が營團を設ける

といふことは、戰時下の必要に應ずる緊急措置でありますと共に、今後相當年月に亙つて續ける必要があるのであらうと考へられるのであります。いひかへますと、營團の構想と運營とは、單に戰爭のための應急手段といふよりは、ひろく資本主義經濟を模樣替へいたしまして、それを國家意思と協調した經濟に導いてゆくために、缺くべからざる方式なのではなからうか。その意味で、戰爭中だけの營團だといふやうに、アツサリ片づけないで、もつと時代の變化、世界政治の推移の問題に關聯せしめて、深くひろく考慮すべきものであらうと思はれます。少くも今後國債の處理といふ問題だけをとりあげて見ましても、國の生産力をこれと結び合せて工夫いたす必要があるでありませうし、それがまた一つの實際的な方法であらうかと存じます。すなはち營團の如き國家と經濟とが結合して出來上りました機構こそ、將來國債の處理に關して、もつとも有力な解決者であり、また負擔者であるのではなからうか。しだいに增加いたします國債といふものは、私人の國家に對する債權であるといふやうな、いはば自由經濟時代の公債觀をもつて律することを許さぬ情勢にあるのではないだらうか。私人間の貸借と同じ理窟で、ただ相手が大きな國家であるから、私債とよばずに公債とか國債とか呼んでゐるといふ程度の考へ方は妥當ではあるまいと思はれます。これは國の將來の生産力によつて裏附けられた未來財ともいふべき性格のものでありまして、われわれが現在もつてゐる餘剩購買力をもつて國債を買入れるといふことは、申さば將來の生産のために投資を行ふものに他ならないのであります。だからむしろ營團なるものは、國債を國の生産力を裏附けとした國民の投資に生れ更らせる役目をもつものではないであらうか。率直に國家に捧げる氣持で貸上げを行ふといふことは、もちろん愛國の赤誠の發露として重んずべき事柄ではありますが、一面これを單なる債權關係の如き淺薄なる觀念に導くことを防ぎます意味合からも、營團の機構を活用することが必要でもあり、また有意義であらうと思はれるのであります。

それのみならず、今後の世界情勢は、いはゆるブロック間の生存鬪爭が苛烈となり、圈內の指導國家の責任は愈々重くなるでありませうから、擧國體制は一層厚きをくはへるものと見なくてはなりませぬ。したがつて經濟部面においても、從來のごとく各個に活動をなした結果を、それが國家目的の實現に寄與するものだといふので、國家補償を仰ぐといふやうな仕組では、到底間に合はぬことになるのであります。元來この補償といふ思想ならびに方式は、大體自由經濟と國

家要請との妥協にもとづく場合が多いので、今後の經濟運營には適當ではないのであります。すなはち國家はたとへば企業に對してこれだけの生産を行へ、それは是々の資材と資金とが必要な筈であるから、これを前渡しをするといふ要領でゆくべきであります。その受命産業は、この前渡しせられた資材資金を活用して最善をつくす、そしてもし經營よろしきを得て、所定の數額をつくり出して、しかも剩餘を生じた場合には、その經營の功勞に對する報酬として與へられることともなるでありませう。かくなるならば、事後の補償といふことではなく、前渡しといふことが建前であります。それによつてのみ生産が計畫的に遂行されることになり、よく經濟計算が成立つことになる筈であります。これを敏速適確に遂行するためには、おそらく營團といふものが最も望ましいものではなからうか、したがつて自由經濟、市場經濟ではない方式といへば、當然に營團經濟でなければならぬと考へられるのであります。この意味におきまして、營團は單に戰時中だけのものだと早合點することなく、よく時代の動きとか、世界情勢の推移とかを考へ合せまして、新しい階梯の發端をそこに見出すべきだといふやうに思はれるのであります。

營團交易の理論

一

日本貿易會が、貿易部門の統制會として發足したのが、昭和十七年二月であつた。三月に至つて、それを貿易統制會と改稱したのであるが、設立の際に、特に他の統制會と異つて、統制會なる名を冠しなかつたのは、「貿易統制會」では他國との交渉上、相手國への響きがつよすぎて、その思惑も如何かとの、考慮が働いたためであつたとか傳へられてゐる。その命名の眞相はともかく、大東亞戰爭の開始後に發足した機構であるにも拘らず、日本貿易會と名乘つたといふ事實は、當時の貿易統制の面目を示す一つの指標ともいへるのである。まもなく貿易統制會と改めて、それが統制會方式にしたがふものであることを明かにしたのではあるが、統制會は自ら經濟行爲をなすことを得ない建前のものとなつて居るために、貿易統制會は、統制のための運營に直接あ

たることが出來ない事情にあつたのである。これは貿易統制の推移からいふと、一つの逆轉であつた。すなはちこの統制會に吸收された東亞輸出入組合聯合會の如きは、自ら統制のための運營が出來ることになつてゐたのであるから、少くも東亞との輸出入面に關する統制を行ふ上に、統制會設立後、その中樞機關が迫力に乏しいものになつたと考へてよいのである。統制の強化をはからむとして、一元的機構をうちたてたことから、かへつて實行力が弱められる結果となるといふことは、いかにも解し難きこととといはねばならぬ。勿論、統制會はその下部機構をして、經濟行爲をなさしむることとし、その指導にあたるべきものであるから、必ずしも自らたとへば買取輸出をなすことが出來ないといふ如きことに拘泥すべき謂れはないともいへるのである。しかし當時各部門の統制會についてよく取沙汰されたやうに、「統制會が浮く」のではないかといふ懸念なり臆測なりの生れ出る所以のものは、統制會自體がみづから實行部面に乘り出すことを爲し得ないところに、その原因が潜んでゐたのである。下部機構たる調整機關が、政府の定むる計畫にしたがつて、直接各個の業者と相携へて、業務をすすめてゆく限り、貿易統制會は一應行政當局の意嚮を傳達する機關たる以上に、實施方面に關與できない立場に置かれざるを得ぬであらう。その間に、屋上屋を重ねることになりはせぬかとの、危惧の念をひきおこさせることにもなつたのである。かかる理由もあつて、逸早く、いはゆる權限委讓の問題が、統制會の育成强化に關聯して考慮されることになつた。これは統制會一般についての問題であつたのであるが、特に貿易統制會に關しては、別個の課題があつた。といふのは、抑も貿易部面なるものは、大東亞戰爭以後にあつては、果してそれが一つの重要產業として意義づけらるべきものであるのか、したがつて、重要產業團體令にもとづく統制會を設けるにふさはしいものであるだらうか、といふ疑問があつたことである。貿易については、他の生產部門の統制會と同じ趣旨をもつて臨むわけにはいかぬものがあり、むしろそれは自ら統制的運營を實施する國家的機關となす方が、妥當なのではあるまいか。それによつて、一面統制會が宙に浮くことの弊を矯めると共に、他面交易部面に對する國家的要請を率直に實現せしむべきだといふ考へが主張されるに至つた。かくして玆に交易營團を設けた方がよいといふ要望があらはれたのである。

昨秋交易營團に關する法律案要綱の決定があり、ついで議會の協賛を經て交易營團法の公布を見、それに基づいて交易營團の設立となつた。そしてこれに伴つて貿易統制會を解散して、交易

營團をして統制的運營にあたらしむる態勢を定めるに至つたのである。かくの如き變遷は、現實の事態に卽應するための措置であつたと共に、極めて率直なる理論の展開でもあつた點に、深き興味を覺えしめるものがある。組合、統制會、營團といふ三段の推移は、日本の統制經濟がその貿易部面において、自由經濟的色彩を洗ひ落して、しだいにその計畫性の濃度をつよめて來た過程として觀られるもので、その歩みは理論的歸結の一路を辿つて來たものといへるのである。今われわれは、いはば營團交易といふ方式をもつことになつた。この運營は國の要請に充分應するものでなくてはならぬが、同時にわれわれ日本國民のもつ理論的能力に與へられた重大な試金石でもあるのだ。考へ拔いてつくり上げた方程式によつて、果して所期の結果を手に收め得るであらうか。われわれは、その試煉に直面してゐるのである。いふまでもなく、世上の事の常として、幾多の障礙がその實施の途上に横はつて、端的なる運營を阻むことがあるかもしれない。しかし、「營團交易なるものは如何にして可能なりや」の問題は、これを歪める條件の存在によつて、決して理論的混迷に陷らしめらるべきものではない。否むしろかかる歪曲する條件の效果を測定するためにも、理論的可能の筋道を、できるだけ明かにして置かねばならないのである。時の勢ひとか、物のはずみとかによつて、交易について偶然に統制會方式にかへるに、營團方式をもつすることになつたのではなく、そこには一つの必然があると信じ、それがあつたからこそ、今日交易營團が生れたのだと考へるのであるが、營團交易について、如何なる理論的必然性があるかを吟味することによつて、交易營團の存在理由も亦明かにせられるものといはねばならない。

二

營團交易は、原理的に市場交易と區別せらるべき交易の樣式である。玆にいふ交易は、必ずしも從來貿易とよばれてゐた事實ならびにその範圍に限らるべき必要もなければ、また理由もない。すなはち外國貿易として概念してゐた內容に聯想を保たしめて、特定の取引あるひは物資交流をおもひ泛べることが、昨今の通念であるが、それよりは、遙かに一般的な流通關係を指す概念として、交易を考へてよいのである。いひかへれば、貿易は、國際的な市場交易を意味したもので、今日の通用語となつてゐる交易は、その限りでは、對外的な非市場交易といふほどの意味を內容としてゐるのである。まだ充分積極的に、肯定的な概念上の規定が與へられてゐないと見られる

であらう。われわれは、むしろいはゆる交易は、營團交易の一つの場合として規定した方がよいので、營團交易は、ひろく市場交易に置きかへらるべきほどの意義をもち、重要性をそなへるものと考へるのである。いふまでもなく、交易を以て貿易に代置せしめやうとしたことは、市場經濟に終始する自由主義とは異つた別個の樣式を、外國貿易の界に導入せむとしたためであつたので、いはゆる交易が營團機構のもとに營まれやうとしてゐる事實は、この間の消息をつたふるものといはねばならない。ただ貿易が市場性の交易であつて、いはゆる交易は、むしろ營團性の交易だといふことについて、まだ充分原理上の解明をもち合はせてゐないと考へられるのである。

市場交易に關しては、從來の經濟學研究は殆んどあらゆる角度から檢討を加へつくしたかの觀がある。交換の理論にしても、價格の理論あるひは價値の理論にしても、微細なる論點をすら見遺さないほどの周密を示して來てゐるのであるから、理論上の努力の餘地はのこされてゐないといへるかもしれない。もしそこに何らかの特異な理論を導き入れたとすれば、おそらくそれは市場交易を超えた別個の建前から、市場理論の批判をなした場合になるのではないかとさへ考へられるのである。すなはち、市場交易理論は殆んど限界に達したといつてよい。少くも市場性そのものにまつはる現象の理論づけは、極限にいたつてゐる。この意味からいへば、たとへば價格の理論において、限界利用を問題としたとき、もし多少とも經濟主體を考慮に入れて、主體性を說くとすれば、それはもはや價格あるひは交易を、市場性そのものから認識せむとする立場を逸脫したものといはねばならぬ。市場を單に市場として把握しないで、市場の構成者をもとめて、その構成する主體たちの判定の綜合せる結果として、市場價格を理解しやうとする方法をとつてゐることになるのである。形而上學的性格をもつ自然價格の理論についてはしばらく措くとしても、市場の價格に關して、高々「無差別の原則」を說く經驗科學的方法に終始するのでなければ、それは當に價格中心の市場經濟理論の域をふみ超えたものと見るべきである。別言すれば、市場價格をめぐる經濟にあつては、いかなる意味にあつても、主體性が重要性をもたないのである。ただ市場における運動過程のみが意味をもつてゐるのだ。需要供給の自由競爭によつて價格の決定を考へさへすればよい。競爭の動因として、需要の强度をはかり、供給の彈力性をしらべることに止まる他はないのである。そこに需要價格の分析がはじまり、それについて限界利用が問題となつても、あくまで自由競爭の一要因の吟味にすぎない。また生產費の構成が、供給の彈力性を

示す指標をあたへるとしても、それも亦競爭場裡の運動をあきらかにする一つの手懸りに他ならぬであらう。かやうにして、市場經濟の現象理論にとつては、いかなる主體的考慮も介入する餘地がないものといはねばならぬ。

しかるに前述の如くに、限界利用について、もし一定の主體があつて、市場價格にむかつて態度をきめるといふやうな觀方をする理論家がゐるとしたならば――實際にはカール・メンガーの如き代表者がゐたが――それはもはや市場交易を市場性によつてのみとらへやうとしないで、別な觀點から考へ始めたことになるのである。その場合でも、各個の主體は、客觀的な市場經濟に出入するもので、市場の價格といふものは、超主體的に妥當するものだといふことで、各個の主體の判斷とか措置とかいふものは、それ自ら獨立の意義をもたないものだといふ考へ方をして、市場交易の客觀性を主張し、各個の主體の重要性を極度におさへつけることを試みる場合が少くない、といふよりはそれが從來の一般の方法であつた。だから主體性の問題は、わづかにその片鱗を見せただけで、再び水中深く沒してしまつた趣がある。十九世紀の後半に、しだいにつよくなつた主體性を重視する傾向も、經濟學研究の上では、傳統的な市場理論に押されて、あまり新しい觀點を寄與することなくして終つたものといはねばならぬ。

これに對して、市場價格の理論に、その傳統のうちで、新しい動向を與へたものは、價格系列の思想である。すなはち生產財、消費財、投資財等につき、各價格系列の成立を考へ、それによつて市場の構成を見出さむとするものである。この構想のもとにあつては、客觀的なる市場價格は、若干の目的系列に類別せられて、價値流動の通路たる意味を與へられるのである。從つて市場交易は、これらの價格系列を縫つて流れる價値の移動を表すものとなるべく、生產財の系列よりあるひは消費財の系列に、あるひは投資財の系列に流入し、あるひは貯蓄の過程に收められるといふやうに、價値の形態變化が行はれるであらう。もし貯蓄が過大となれば、消費過小とか投資減退とかの影響を生じ、生產の萎縮を招くに至るであらう。かかる市場の機構のもとにあつて、たえず生產者の提供する價格は、消費者の需要價格と關聯を保ち、投資財の價格は、また生產財のそれと緊密なる聯繫を有することとなり、價格の相關性が極度にたかめられて、殆んど自動的なる機制として考へられるまでになるであらう。そこにいはゆる自由市場の客觀的な動きが出來上るものであり、それ自體として生けるものの如くに看得せられるに至る所以である。市場經濟

の生理は、かくの如くにして明かとなり、またその病理は、この座標に照して究めつくすことが出來るのである。その場合もつともわれわれの注目にあたひする特質は、いふまでもなく價格の連續性であり、その相關性である。この連續相關によつて、市場經濟の運行が可能となり、交易はいはば自動的とすら考へられる自由經濟の面目があるといはねばならぬ。それ故に、この價格系列の間に斷續があるとか梗塞があるとかいふ場合には、そこに恐慌が生れ、危機が生じるのである。すべてが階調をもち圓滑なる運行を見せたときには好況を示すことになり、價値の移動が調和を失ひ、澁滯を來すときは、不況に陷るのである。出來得る限り各價格系列の間に均勢を得せしめ、平準を保たしむることが、經濟施策の妙諦となるであらう。

以上のやうな市場の理論は、あくまで運動過程を分析綜合した再構成の所産であつて、市場そのものを一團として、統一的意思を以て律するといふが如き趣は、まるでないものといはねばならぬ。したがつて自由經濟を押のけて、經濟統制を行ひ、國民經濟の計畫化が進められることになれば、市場は、自由を失ひ、存立を否定されるに至るのであるから、市場交易も亦、おのづから窒息して、他の交易樣式に移らざるを得ないのである。その代置せらるべき交易方式は、市場交易においては現れなかつた主體性を中心としたものでなくてはならない。すなはち統一的な意思によつて、價格系列の規正をなし、價格の調整を行ひ得るやうな構成をもつ必要がある。われわれが玆に問題とする營團交易の樣式といふのは、まさにそれに當るものなのである。すなはち營團の「體制」を以て市場の「自由」に置きかへたものといふことができる。

三

營團交易は、價格の不連續を出發點とするものである。生產價格は、消費價格とは全く獨立の價値體系であつて差支へない。投資は、市場經濟におけるが如くに、生產價格に關聯を有せしむる必要を認めない建前なのである。各價格系列は、一應別個の體系として定立せしめられるのである。たとへば米の生產者價格と、その消費者價格とは關聯と連續とをもたないことになる。同一物資についての價格の二重性三重性は、むしろ原則的な構造であつて、決して例外的な事象ではない。自由競爭の行はれる市場交易にあつてこそ、必要な生產費に近い價格を以て需要者に渡されるのが妥當であるといふやうに、異る系列がつねに連續せしめられ、關聯を保たしめられる

のであるが、營團交易にあつては、價格相互の間には、斷層があるのが本來の姿なのである。そして、かかる價格面から見た斷層あるひは不連續を、內面的に綜合する仕組こそ、營團の機能だといはねばならない。そこに市場交易に缺けてゐた主體性が、營團交易においては、全面的にはたらく所以が見出されねばならない。

國內において、生產者價格が十圓であつて、需要者價格は五圓となつてゐる場合、あるひは外國たる現地における蒐買價格が三十圓であつて、國內の販賣價格は七圓であるといふ如き場合に、國內價格をそれぞれ五圓、七圓に釘づけにして置く理由は、市場交易にあつては考へ及ばない別個のものであつて、生產蒐買の價格系列と全く絶緣されてゐるのである。逆に現地で格安に入手し得た物資にしても、その故を以て低廉に國內の需要家に賣渡すことも全然考慮の外に置かれるのである。所要の物資は、國內の配給狀況から、需要者價格をきめる他なく、またそれから所要物資の獲得は、生產地における狀況しだいで買入價格を定めるだけのこととなるであらう。その物資の原價によつて價格の安いとか高いとかを判定するわけにはゆかず、もつぱらそれが置かれてある周圍の情勢から、價格の高下をきめる外に途はない。生產價格と需要價格とを無關係に置き、輸入價格は國內の販賣價格と關聯せしめず、輸出の場合にも國內生產價格等に拘泥しないで、現地市場での妥當な價格をもつやうにするのである。だから價格によつて各個の物資が、生產面、輸出入面、需要面等の間を流動することを阻止するのである。價格通路の遮斷をなし、各價格系列を絶緣することになるであらう。移動を豫定した物資を、各價格系列のうちにいかなる重要度をもたせて配列すべきかが、營團交易の課題となるのである。流通經濟の滑らかさに馴れた人々にとつては、いひやうのない澁滯を想はしめられる機構といはざるを得ないが、少くも今日の情勢をもつてすれば、これを流通經濟の自由に委ねるとしたら、一切の移動は停頓して、生產も輸入も行はれず、輸出も消滅する他はないであらうから、いかに澁滯があつても流動を促す仕組が存在するだけ、まだ交流の可能もあり、經濟活動の餘地もあるものといはねばならぬ。人によつては、流通經濟をやめたから、物資の出廻りがわるくなつたのだと考へるのであるが、現實はむしろ逆だ。流通を阻害する原因がつみかさなつて來たから、統制を行ひ配給を企てるに至つたのだ。統制の仕方が不手際であるからといつて、統制は無用だといふ歸結はみちびかれない。價格を動因とした物資移動の方式にかへて、物資移動の必要から、價格を設定する方式を採用せざる

を得なくなつたのであるから、統制の效果を流動の姿からだけ是非することは、意味をなさないといふべきである。ただその統制が、價格統制のあたりを彷徨してゐるときには、統制の狙ひが、一向に現實味を帶びないことになるので、率直に物資統制に蹈み込まなくては、いはゆる請を點ぜざるの憾みが深い。この虎を描かむとして猫を得るの愚に陷らないためには、統制方式を進めて、營團方式にいたらざるを得ないのだ。市場交易の次に來るべきものは、統制交易ではなくして、營團交易でなければならぬ。すなはち統制交易にあつては、市場交易の如くに主體性を無視するわけにもゆかず、さりとて統制する主體が交易面にのり出すことをしないところから、交易は多分に市場交易に還元する傾向を有して、その惰性の根づよさから統制に反撥して、統制を揶揄するにもひとしい結果を呈するのである。統制の眞面目をあらはすには、統制意思を端的に具體化して、市場を呑み込んだ一つの經營を設定する他はない。そこに營團の必然性がある。さきに貿易統制會より交易營團への推移が、理論的展開として興味深いものがあるといつた理由もそこにある。

しからば二重價格すなはち同一物資について、生產者價格を十圓とし、需要者價格を五圓ときめた場合、價格差としての五圓の開きは、如何なる意味のものと考ふべきか、またそれをいかに處理すれば、價格系列の分離遮斷が、有意義に行はれたことになるのであらうか。それが營團交易として考へられる所以は那邊に存するのであらうか。

おもふに二重價格を考へることそれ自ら、市場交易の惰性にとらはれたものといはねばならない。たとへば米の生產者價格が幾何であり、需要者價格はそれと異つて居るといふとき、米を主としてそれのもつ二つの價格といふやうに考へるから、二重價格といふ觀念も生れて來るのである。生產面において米が六十圓であることは、その他の生產物と比較することが出來るだけで、需要面において米が四十圓だといふときの米價と差引きすることは意味をなさない。質的相異を無視した考へだからである。それにしても同じ圓ではないかといふのは、生產面と需要面との差を閑却したがる人々の議論に他ならない。金一匁が日本では五圓で、アメリカでは二弗半となつてゐれば、すぐ百圓を五十弗に等質等價と考へて、日本經濟の百圓と、アメリカ經濟の五十弗と

の間にある質的相違に思ひをいたさぬのに似てゐる。米を六十圓にきめるために、內地米の生產、外國米の蒐買、代用品の供給等各般の事情が勘考されてゐるであらう。また米を四十圓で需要者にわたすといふとき、生計費その他の需要事情を參酌してのことであらう。だから六十圓といひ、四十圓といつても、その價格のもつ意義が全く異つてゐるので、それを米の價格として直接差引勘定をすることは無意味といはねばならない。しかしこれをたとへば政府が補塡してゆく上には、結局二十圓の價格差として取扱はなくてはならぬではないか、そこに至ればやはり金額として表はされざるを得ないのであるし、それによつて價格の質的な差とか、意味の相違とかがなくなるのだといふ人も少くないであらう。これに對して、いひたいことは、その價格の差は、金額の差といふだけではなく、政府の計算といふやうな、究極的なそして全體的な運營の建前まで還元しなくては、解決の途のない平行線の開きの如きものだといふことを、問者自ら是認してゐるではないかといふことである。米價だけでは考へ切れないで、政府の負擔といふやうな生產と需要とを調整する機構を、當然に思ひ合はせざるを得なくなるところに深い問題がある。いひかへれば、價格差の調整といふことは、量の上での二十圓の補塡をいふのではなく、質の上で米の生產と需要とを整へる機能を指すのである。生產面、輸入面、需要面をいかに調整するかに問題が横はつてゐるのである。

生產物資は、それぞれ一定價格をもつて、營團に收買せられ、需要物資は、各特定の價格において、營團より賣渡されることとなつた場合を想定せよ。そこでは、通貨が交易の媒介者ではなくして、營團がその交易の樞軸をなすであらう。生產者は需要先に賣渡すのではなくして、營團のみが賣込先であり、需要者は生產者から買入れるのではなくして、つねに營團から仕入れることになるであらう。この場合、營團は、交易の仲介をなすこと商人と異らぬではないか。自由競爭の行はれない場合において、商人は、しばしば生產者から格安に買取り、需要者に對しては法外の高値で賣つける。だから生產者價格と需要者價格とを遮斷することをなすものといへるではないか。彼らはその間の價格差を收めることに孜々として努力してゐるのだが、偶々その價格差が赤字になる場合が營團の業務のうちにあらはれるといふまでで、營團だから必ず赤字の場合のみを營むといふのではあるまい。したがつて營團交易の方式を、特に別個のものの如くに見ないでも、從來の商人的原理でも充分理解できることではないかと問ふ人があるかもしれない。われ

われは、商人的原理をプラスの面からさらにマイナスの面にまで、推及ぼすことの論理的可能性を是認するとせば、それによつて營團の特質を考へうるであらうか。大規模なる市場を獨占した商人の爲すところによつて、營團機能の面目を窺ふことができるであらうか。少くも營團交易がもつ主體性の力づよさは、獨占的商人の所爲によつて察知することが可能であるだらうが、商人的原理によつて理解され得ないことは、價格差の概念である。すなはち營團交易は、價格差として貨幣額を獲得せむと企てるものではない。さらにいふならば、買入價格と賣渡價格とは、それぞれ獨立した機能で、相互に差引くことを許されない性質のものである。それらは、營團の機能が發動する形態であつて、商人的機能における如くに計算の手段ではない。生產物の買入れ、需要品の販賣は、それぞれ營團の運營における活動樣式であつて、商人的交易に見らるるやうな價格差算定の項目にとどまるものではない。この理由から考へて、營團交易には、營利目的といふものが含まれてゐないことは、いふまでもないが、だからといつて、生產者價格、需要者價格の合理性への要求が稀薄でよいといふことはあり得ない。營團は商人的交易の如くに、自らの計算の建前から、可及的低廉に買入れることを心掛け、なるべく高く賣捌くことにつとめるといふのではなく、それとは反對的につとめて客觀的に、出來るだけ生產の實情に卽應した合理的價格のもとに取得すべく、また需要の眞相にふれた適正價格をもつて交付すべく企圖するものなのである。主體性の主張はあつても、それは商人的存在の如くに競爭場裡の優位者となるがために、主我的に自利的に擧措をきめるものではない。つねに全體經濟の主體として、あらゆる部面を充分に活かし、その所を得しむるやうに、生產者にも、需要者にも、その地位と機能とに應じて、適切なる價値づけをなさむとすることを目途としてゐるのである。一交易過程のうちにも、全面的なる價値實現の意義を體現せしむるやうに、最善をつくさむとするところに、營團方式の特質を見なくてはならぬ。

（昭和十八年五月京都帝國大學、神戸商業大學における特別講演要旨）

大東亞交易の思想

一

たゞ大東亞とか共榮圏とかいふ觀念を用ゐて意見を表明し、あるひは議論をたたかはしてゐる間に、いつか觀念の上で出來上つた定形が著しく具體的に感ぜられて、現實に大東亞の共榮機構がすでに儼存するかのやうな錯覺に陷り易いのである。いはば一種の觀念實在論が、昨今頓みに東亞共榮圏についても行はれてゐる感じがする。これは相當危險であるとおもふ。大東亞戰がはじまる數月前から、敵性國家群がしきりにいはゆる對日包圍陣形を考へて、日本が手も足も出せないやうに封鎖線を張りめぐらしたものとして悅に入つた際の觀念實在論が、如何に現實の判斷を誤らしめたかを思ひ合はせるならば、共榮圏觀念を誇張して、それを直ちに實在化することの危險を感ぜざるを得ない。

共榮圏の觀念は、吾々に與へられた東亞經營の理念をいひあらはしたもので、未だ一つの方向であり、嚮導觀念であるに他ならない。長期に亙つて建設の努力を重ねて實現しようとする目論見を示してゐる迄であるから、濫りにこれを實存する構成態の如くに想定してはならないであらう。それにも拘らず、近頃は共榮圏といふものが、確定的な國境ででもあるかのやうに極め込んだ見解が通念になつてゐるらしいのである。この建前から物資交流が概念せられ、各般の計畫がうちたてられてゐる傾向がつよい。いふまでもなく次ぎつぎに展示される戰果の壯大な姿は、大東亞の基礎を明確に設定して、共榮圏に包擁せらるべき諸地域を鮮かに彩つてゐるのであるから、それがもはや觀念的な構想態でないことを率直に示してくれてゐるのであるが、それは軍事作戰の上のことで、政治、經濟、文化の上ではよほど控へ目に、徐ろに勢力の滲透度をおもはなくてはならない。軍事勢力の上からは、若干の重要據點を抑へてしまふときは、その中間なりその地域なりが全面的に占據されたことになるであらうから、いはば點を奪ふことによつて面を領略したものと考へてよい。だから皇軍の戰績を地圖の上にあらはすのに、廣汎な地域を一色に塗りつぶすことは、充分理由のあることで吾々の感激の表現に適はしいことでもある。しかし軍事作戰

以外の諸工作は、必ずしもそれと同じ趣向を以て考へるわけにはいかぬであらう。時に經濟的にもある要衝を抑へてしまつたときには、その周邊地區一帶を支配することの出來る場合があるであらうが、軍事的に成功したから必然的に經濟的に同樣の效果を擧げ得るものと期待することはできない。かかる理由から軍事的に共榮圈領域が具象的になつたからといつて、直ちに政治經濟文化の上に、共榮圈を凝乎として存在するものの如くに思ひ込むのは必ずしも妥當ではないであらう。吾々は軍事作戰地圖とは別に、たとへば經濟作戰地圖のごときものをつねに用意しなくてはならないのである。わが經濟勢力の現實に滲透しつつある姿相を描き出した東亞の地圖を作製した場合には、おそらく今日一般に觀念されてゐるほど明かな共榮圈の構圖は、泛び上つて來ないに相違ない。

現實から遊離した抽象的な全體の觀念を振廻す傾向は、近年の統制經濟における施策にかなり顯著なものがあるが、これは自由主義經濟を、外部から枠をはめて締めつけてつくり上げようとした、全體主義經濟の通弊と見られぬこともない。統制された全體なるものが、おほむね個々のものから遊離し勝ちであり、個々のものは、その全體の中に落着きを持つといふことにはなり兼ぬるであらう。全體主義を建前とするといひ、自由主義は棄却したといひながらも、いつまでも自由經濟時代の殘滓をすて切れずにゐるといふのも、畢竟いふところの全體なるものが現實性に乏しい觀念的構圖たるに止まる結果ではないか。この意味において數年來喧しく主張された全體主義も、結局一つの觀念實在論にすぎなかつたので、實質的には自由主義思想を充分よく拂拭し得ない鵺的構想をいだいて彷徨してゐるのである。個々人をあつめて全體をつくり上げようとし、各自の行爲を合計して總合體をつくらうとする。この全體主義にあつては、全體はつねにそれらの個々のものに對して、いはば天蓋にも比すべき役目をもつにすぎない。一應の纏りをつくつたといふに止まるであらうから、眞に全體として生動する迫力の生じやうがない。吾々はかかる全體主義、觀念實在論による空疎な全體觀を速かに棄て去つて、いはば生きた全體をつくることを心掛けなくてはならぬ。たとへば東亞共榮圈の生命を端的に日々率直に具體化してゆけるやうな全體主義に乘り替へなくてはならないのである。

二

貿易より物資交流へ、といふことが、最近特に主張もされ考へられもしてゐるが、かかる表現の上での變化の裡にも、大きな時代の變革の跡を示してゐるといはねばならぬ。外國貿易といふものが、從來とも物資交流の役割をつとめてゐたのにも拘らず、專々しく物資交流といひ、交易と呼びかへねば氣がすまぬ所以は何處にあるのか、それは、國内商業がこれまでも一種の配給機構として存在理由があつたのだから、商業の代りに配給でやらねばならぬと、今更言ひ募らなくともよささうなのと同一であらう。物資交流を結果において實現しないやうな貿易、配給の實質をそなへないやうな商業といふものは、長い間には自然に淘汰され凋落するほかはなかつたことは、明かな事實である。個々の貿易業者や卸小賣業者が、一國の要する物資の交流あるひは配給を忘れて、おのれの利潤をあげることに沒頭してゐても、貿易乃至商業は、つねに國の必要とする物資の獲得乃至配給をほどよく實現し得るものだといふところに、その存在が理由づけられてゐたのである。すなはち自然的な推移のうちに、結果として全體の必要を充足してゐたのが、從來の自由經濟時代の機構であり、論理であつた。しかるに今日のごとき轉換の時期にあつては、國全體の必要を、自然の因果過程に委ねて便々として待つてゐられなくなつた。國全體の所要量は斯々であり、國民の生活必需量は是々であるときめて、それを一刻も早く調辨することにしなければならぬ場合に臨んでゐるのだ。だから從來、結果として獲得しさへすればよかつた全體的なるものを、今日ではとりあへず目的として見ることになつてゐる。物資交流あるひは配給を直接に問題とすることになつて、自然の結果として待つといふ悠長なことでは收まらなくなつたのである。そこに大きな時代の論理における轉換がある。概括的にいへば、自然因果の論理から目的觀の論理への移行である。吾々の營む日常の行動がもつ意味の變化は、すべてこの時代の論理の變化を代表してゐるものといはねばならない。

かやうに結果として得らるべき全體を、差詰め目的として思ひ泛べなくてはならぬ事情に立ち到つてゐるところに、前述の如き觀念的な全體主義に導かれ易い理由も潜むのであるが、時代の轉換といふ大きな衝擊に眩惑せしめられてゐるために、何も彼も一度放擲してしまつて、徒らに抽象的な設計を試みることになり勝ちであるのも已むを得ないことであらう。貿易は私經濟を通じての物資交流であり、いはゆる物資交流は、私經濟を拔きとつた物資交流だといふのでは、區別だけは明白になるが、國の所要物資の獲得が圓滑迅速に行はれる見込も立たず、手段もそなは

らないことに終るであらう。もちろんこれまでの民間の私經濟といふものを、國の全體目的を實現するための機關に生れ變らせ得べきものか否かに問題はあるが、新しい出發をするための具體的な施策が必ずしも有力に行はれてゐない。むしろ抽象的な全體概念が目標として掲げられて、それに對して、各個の私經濟が離合集散してゐるといふやうな恰好を示してゐる場合が少くないのである。建前が全然異り性格が一變したのだといふ自覺なしに、全體主義でゆくのだと云ひ合つてゐるといふことは、まさしく時代の大きな皮肉である。差當り率直に物資の獲得といふ全體目的を實現しさへすればよいのであるから、民間私經濟の統制を如何にすべきかといふ政治的措置は後廻しにして、全面的なる物資の交流調整を實際に行ひ得る國家的機制を整備してやつて見るべきである。すなはち軍事作戰におけるごとく、迫力ある態勢を經濟にもそなへなくてはならぬ。生きてはたらく全體が必要なのである。個々のものを集めてつくり上げた統合態とは異る一つの全體者を必要としてゐるのだ。最近各方面に營團の機構が生れ出てゐることは、甚だ示唆に富むものがあるといはねばならない。そこにつくらるべきものは全體を代表するものであり、全體を象徴するものであるだらう。いはば部分といふものを有たない一つの全體者なのである。たとへば大東亞共榮圏について觀た場合に、各部分が集つて共存共榮の全體をつくるといふ仕組とは異つて、日本といふ國が共榮の理想を率直に代表して、共榮圏の象徴體として立ち現れることが考へられるであらう。すなはち大東亞の全體が日本において象徴せしめられる仕組であれば、全體が觀念的な宙に浮いた目標とはならずに、毎日具體的に全體目的を實現してゆくやうな生き方をするであらう。かかる象徴主義的な全體觀にして、始めて自由主義の殘滓をとどめない清朗な全體主義の建前がうちたてられるのである。世上いふところの指導者原理なるものの根本義も、かかる全體觀をはなれて考へられない筈のものだ。外側から枠をはめて、天蓋をかけたやうな統制的、合計的全體主義では、實踐指導の力といふものは容易に生れ出て來ない。さうでなく自ら一つの全體をつくつて見せるのだ。實踐的に全體目的を自ら具現してゆく過程において、周圍の存在はそれに倣つて同じ方向に努力を重ねるに至つて、指導力が發揮せられるのだ。いはゆる無爲にして化するのである。至上至高の所爲によつて他を教化指導することに、象徴主義的な、そして實踐的な全體主義の面目があり得るであらう。この建前こそわが國民が東西乃至世界に與へむとする新秩序の根本義でなくてはならない。

三

世界市場の自由通商に深い經驗をもち、執着を感じてゐる人々は、これほどの大戰爭を眼前に見てゐながらも、大戰爭のあとには、また貿易といふものが開かれて、通商の自由が再現されるのだらうと思ふことをやめてゐない。甲羅に似せて何んとかいふ譬を聯想させることであるが、局外者から觀れば不可思議に見ゆるかもしれない。一體、前の世界大戰といふものは、前世紀を支配した自由通商原則の覆滅を約束するものであつたにも拘らず、平和克服後の經營にあたつて出來得る限りその原則に事態をあてはめようと盡力した。しかもその結果は、凡そその努力とは反對の方向を辿つて、自由通商の門戸は年々に閉されて、世界經濟は崩壞し、各國民國家の生存の主張が、遠慮なく國際通商面を荒し廻つたのである。かかる情勢に危惧の念をいだきながらも、經濟人は、國家的支配とはかかはりなく、自己の危險と計算とにおいて貿易業に專心して、多少の歪曲はあつても、通商の自由が世界を支配してゐるものと信じてゐた。かやうに前の世界大戰以後を、依然自由通商時代だと錯覺し、あるひは強ひてさう思ひ込まうとした志向と同じものが、現在の大戰爭のあとに、自由貿易が再來するだらうといふ迷夢をいだかしめつつあると見てよい。前の世界大戰がすでに國民主義の國家體制が角逐するところから誘ひ出されたものであつて、自由貿易の悠焉を豫定したものといはねばならない。そして、その戰後における情勢は、一層切迫したものであり、各國家が體制の整備を競ひ合つた結果、現在の大戰爭に導かれたものである以上、後に來るものとして、從來の型の如き貿易を想定することは、餘りにも自家の經驗に躊躇して、この世紀の大なる異變を感受しない態度といふべきだらう。素よりそれらの自由主義的感覺を多分に持ち合はせる經濟人にしても、當面の重大な變革に善處することを忘れてゐるのではない。中にはかへつて逆に、たとへば大東亞共榮圏以外に亙る活動を殆んど考慮する餘地なしとして、ひたすら東亞の自足自給體制の確立に邁進すべきだと主張する論者もある。その場合、共榮圏の障壁を高くしてその内部にあつては、通商の自由を實現し、その自由は出來るだけ各個の貿易業者のものたらしむべきだと考へる人もあるであらう。これは、往時の自由主義通商を共榮圏の枠の内に見出さうとしたものといふべく、その限り、思想上の問題として自足經濟體制を考へたわけではなくして、ただ現實に逐ひつめられての餘儀なき思案だといふの他はあるまい。

東亞經濟を全體として自足體制に導くといふことは、多くの前提と條件とのもとにのみ首肯せらるべき結論である。共榮圏は自足經濟でなくてはならぬと、性急に論斷しない方がよいとおもふ。といふのは既に述べたやうに、大東亞を地域的に觀てそこに封鎖的經濟體制をつくらうとする構想は、抽象的な觀念上の全體主義思想から生れ出たもので、決して吾々日本國民の能動精神から導かれた「八紘爲宇」の全體觀に適應するものとは思はれないからである。封鎖的な經濟圏をつくつて自足自給をはからうとすることは、わが日本國民の潑剌たる精神の要請を語るものではあり得ない。自足經濟圏といふことときものは、日本の現實勢力の投影圏にすぎないので、むしろ吾々が求めてつくるべきものではなく、おのづと出來上るものに他ならない。そこに自足經濟を設定して、その自給性に依存せむとするが如きは、わが庇護の下に存立を許されてゐるものに、我等自身の生存を託するにも等しく、意味なき構想だといはねばならない。いはゆる共榮圏經濟の幅員と濃度とは、とりもなほさず日本の國力の展開せる形相と考ふべきもので、わが自給能力を客觀化したものに他ならない。だから日本をその一部分とした廣域經濟としてそれを概念することなく、日本自身の生存圏として認識することを忘れてはならないのである。その領域内に含まれた資源も、日本經濟を中心としてはじめて克く資源として活用せられるものとなる所以を理解しなければならない。資源性の賦與を、日本以外の經濟勢力に俟つ從來の態勢をすて去らなくてはならぬとするところに、わが國民經濟の能動的な要請が見出さるべきで資源性を賦與する根源の力を日本自らのうちに求めてゐるのである。意地穢く何によらず抱へ込まうとするやうな自足自給の廣域經濟を求めることは、清朗にして簡素なることを尚び、力の完全なる調和と無限なる發動とに信條をもつわが日本國民の要請とは、凡そ緣遠いものといはねばならない。吾々は完きものを求めてゐるが、それは必ずしも分量の大いさによつて得られるものではない。近代資本主義經濟が生命なき厖大性の故に失敗した轍を履むことを戒め、新なる世界秩序は、象徴的な全體主義思想によつて建設せらるべきことをいはば身を以て世界の國民に示すことこそ、大東亞戰爭を通じて實現すべき日本國民の使命であらう。この意味からも妙に凝り固まつた自給自足の經濟などに躓くことのないやうにありたいと思ふものである。（昭和十七年六月）

交易計畫化の諸問題

一

貿易とは何ぞや、貿易業は何處に行くのか、といふやうな半年一年前には殆んど深く省みられもしなかつた疑問あるひは問題が、極めて具體的な差迫つた感じで迎へられることになつてゐる。世相の變化におどろくといふやうな悠長な考へ方で眺めてゐられない焦眉の問題であるだけに、ややもすれば一寸した行懸りや手掛りに囚はれて、ああもあらうか、かうもあらうかといふやうな、群盲象を撫でまはすの類ひになり易い有樣である。貿易といふものはなくなつて交易になつたのだといひ、貿易がないのだから貿易業といふものもあり得ないし、從つて貿易業者といふものの存在理由がないぢやないかといふ論者も出て來る。これに對して現在の戰時下にあつて貿易の杜絶は當然であるが、それは要するに杜絶であつて、事態が落着けばまた國と國との間にはどうしても貿易は必要になつて、貿易業者の活動に俟たねばならぬ仕事が山ほどあるのだと見て、貿易再開に對する待機姿勢をもつて、暫く耐へ忍ぶべきだといふ觀察をなす人もあるといふやうなわけで、昨今甚だ騷然たるものがある。從つてたとへば貿易業の整備統合といふ課題にしても、その目標とか、理念とかが明確を缺く感じをあたへ易いことにもなつて、一歩を踏み出すにも何かと考へさせられることが多いのである。この狀態を續けることは、政治的にも經濟的にも、殊に戰時下にあつて遺憾のことといはねばならぬし、一日も早く方向を確立して協力邁進することにせねばならぬであらう。

數年來日本の經濟體制は、あらゆる部面にわたつて、相當大規模な變化を遂げ、編成替へがかなり根本的に進捗せしめられて來てゐたのであつたが、貿易部門においては、必ずしもそれに相應するやうな變革を見出さなかつたやうである。近年外國貿易といふものは、國際情勢の變遷に相卽する程度にその方法を變化せしめられただけで、自主的にどうするといふことが比較的僅少であつたし、またその必要もあまりなかつた。貿易がしだいに各國間の政治外交上の協定に左右されて、自由通商が局限されて來てはゐても、それは要するに枠をきめる相談にすぎなかつたの

で、協定の枠の内では、自由通商をやることを建前としてゐた。すなはち各國とも、自國の欲する自由通商を如何にして、相手國に是認させるかに外交折衝の努力を集注してゐたのであるから、ただ段々窮屈になつて來たといふまでで、自らの貿易體制の根本義を一變させやうともせず、さうしない方が得であつた。その限りつねに自國の貿易差額を有利ならしむるやう、いはゆる外貨獲得をめざして貿易業者の活動を促すことに終始してゐた。この方法を通じて國の必要とする資材の獲得が最も有效に出來ると考へ、またさうでもあつたのである。昨年初頃から對日資産凍結をアメリカあたりがやるだらうといふ豫想が働いてからでも、日本の貿易は依然自由通商の建前で動いてゐた。そしてそれが平和を希望する日本の態度のシンボルでもあるやうに考へられてゐたのである。いひかへれば、貿易體制を從來通りにして置くといふことに、ある程度外交的な意義が含まれてゐたともいへるのである。だから日本の貿易體制がわが國民經濟の編成替への最も遲れた部面になつてゐるからといつて別に不思議がる理由はない。これを怪しからぬもののやうに云々するといふことは、今日までの國際的な政治經濟情勢を無視した判斷だともいへる。勿論、これまでの事情としてはともかく、今後出來得るだけ速かに變ふべきものは變へ、編成し直すべきところは、遲滯なく實行しなくてはならぬ。遲れてゐた事實が、決してこのままでよいとか、編成の必要のない證據にはならないことを、充分よく諒解すべきである。

さて現在出來上つてゐる狀態のもとでは、これまでの貿易の形態が行はれないことは特に說明を俟たずとも明かである。物資交流は以前とは異つてはるかにその計畫性を要求されて來てゐるのだから、自由通商の形態で自然に放置するわけにはいかぬことは言ふまでもない。殊に物資の種類によつては生産配給の一貫的操作が、國の内外を通じて必要となつて來て、交易とか貿易とかいふ階梯を特に考慮する遑もない場合が生ずるであらう。またその綜合性あるひは計畫性の實現のためには、自由貿易時代に見出されるやうな「能率」を相當犧牲にすることも覺悟してかからねばならない。ともかく所要の物資を獲得するために、以前なら割の合はない仕組として斥けられた方法を採用する他ない場合も、自然多いと見ねばならない。そしてこの體制なり方法なりが當面の必要に應ずるだけのもので、やがてはかかる物資交流の方式が行はれなくなるだらうといふ豫想をもつことは出來かねるのである。そのやがてはといふ時間の長さが、どれほどのものであるかは、むしろ豫測をしないのが本當であらう。といふのは、世の中の變化、時代の變遷と

いふものが、舊態に復することを許さないと考へられるからである。問題を大東亞共榮圏内の交易に限つて考へて見た場合に、各地域における物價乃至物資の相異を調整することは、到底自由市場の運行に委ねられぬことは明白である。各地域の事情に應じ、大東亞全般の共榮目的から規定された方針の下に、物資乃至物價の上に、かなり高度の許可制度の實施は、避け難いものといはねばならぬ。少くもこの廣大な範圍を統一された方針で動かしてゆくためには、よほどひき締つた樞軸をもち、統制ある運營をやらねばならない。勿論、事態の推移によつて必要の度が減じて、統制が緩和されるといふ部面も生ずるではあらうが、根柢は現在構想されてゐるところを踏み外すものとは先づ考へられないのである。

各個の貿易業者の危險と計算とにおいて運營するといふ物資交流の方式が、從來の貿易であるが、この方式では賄ひ切れないやうな要求がつよくなつて來たために、危險と計算との負擔について、すでに別なものを工夫しつつあつた。組合といふものもそれであり、統制會社もそれであり、統制會といふものもその間に存在理由をもつてゐる。各個の私經濟の經營樣式を調整して、出來るだけ各經營の相剋をさけ、市場危險を解消すると共に、物資交流の計畫化を實現しようとして來たのであるが、日本の政治力によつて整頓されて出來上る共榮圏經濟におけるわれわれの活動は、今日よりもはるかに國民經濟的な統一性をそなへたものでなくてはならぬ筈であるから、今後一層いはば纏りのあるものになるべき運命をもつてゐるであらう。そこで各個の貿易業者の立場にしても、日本の經濟活動を具現する上に、從來よりもはるかに率直であらねばならない。これまででも國のためといふ信念をはなれてはゐなかつた。しかし事の大小となく日本經濟を率直に代表するといふ立場に置かれてゐなかつたことは爭ひ難いであらう。それを敢へて行ふべき、また行ひ得べき立場に立つことになつてゐるのである。あるひはいふであらう、別に從來の貿易業者を俟たなくともそれは出來るだらう、かへつて私益優先で固つた業者ではうまく行かぬのではないかといふ考へがあるかも知れない。しかし國の總力を擧げて國の經濟政治文化を營むことが要求されてゐる際であるからには、私益を守れば公益も自ら達成されることになつてゐた時代の人々だといふだけで、斥けらるべき理由はないし、それらの經濟人にしてもその故をもつて自ら卑屈になるべき理由は毛頭ない。前の時代の經驗者はいかぬといへば、經濟人ばかりがいけないのではあるまい。おそらくどの方面でも同じであらう。役に立つものならば何人たるを問はず

職域奉公せしめなくてはならない。仕事の形態を改めるといふことが必要だからといつて、從來の形態に馴れた者がいかぬとか、その形態に馴れた人々が仕事そのものがなくなるやうに思ひ込むのは、途方もない見當違ひである。しからばここでいふ仕事とは何んであるか。貿易は勿論、交易といふ仕事さへも獨立の價値をもたない世の中になつたといふのであらうか。

各地域が從來のやうなバラバラな國々でなく共榮圏を形成することになると、たとへば日本が泰に對して、甲の物資を送つて乙の物資を取るといふ交易自體に重點が置かれなくなるのである。問題は、全圏内に如何に價値の配當が適當に行はれるかに見出されねばならぬ。各地域が、どれほどの經濟的重要性をあたひするものであるか。その間の價値の流動をいかにすれば、全體の目的に適合するだらうかが重要となつて來るのである。だから交易のもつと奥に交易を必要とする價値關係が横はつてゐるのである。交易は交易なるが故に大切なのではない。手段として交易が大切であり、時に不交易も大切となるであらう。かかる大所高所より交易を勘案し物資を交流せしむる仕事は、從來貿易を通じて自然の見えざる働きでもあるかの如くに行つて來てゐた。今人間の頭腦と努力とによつて新しい方式をうちたて、これを實行しようとしてゐるのだ。仕事はそこにある。貿易とは何か、貿易業者は何處に行くのかといふ問題も、われわれ自らの爲せる所を深く省みて、新なる決意をもつときにのみ解決の途を見出し得るであらう。（昭和十七年六月）

二

すでに多少見馴れ聞きなれたためか、餘り交易は貿易とどう違ふかといふ質問を出す人も少くなつて來た。疑問を出す度數が減じたといふことが、別に解決を得たからでもなければ、諒解した結果といふわけでもなく、まづさういふものだとして、諒承して置くことに落着いたといふまでのことであらう。それはともかく、貿易にあつては、物資の出廻りといふものは、自然に任されて、ただ市場の價格の動きによつて誘導されるのを建前としてゐた。勿論、時と場合とによつて拘束を受けることがあるにはあつても、その原則とするところは、「自由」である。價格を中心として、その周圍に市場の自由が展開されてゐたのである。すなはち市價の一上一下によつて、物資の流動は、潮の干滿のごとくに自在に、自然に行はれることになつてゐた。その餘波の及ぶところは極めて廣汎であり、その相關性は限りなくひろい。恰も重力の法則をおもはしめるやう

に、あらゆる勢力の釣合ひによる市場を成立たしめるほどの間口と奥行とをもつた「自由」があつたのである。貿易に限らず、自由主義社會の經濟活動は、かくの如き構造の下に營まれてゐたといはねばならない。この「自由」のそなへる包括性と相關性とは、經濟社會の發達が高度となるにつれて、いよいよ複雜多岐にわたり、また精緻を加へたといつてよい。これは統制經濟を實施して見て、商品相互間の關聯が如何に錯綜をきはめたものであるかに、統制の局に當つた人々がひとしく今更の如くにおどろいた事實によつても明かであらう。市場の「自由」が、價格に集約された姿を眺むるときは、一見、甚だ無雜作であるが、それを仔細に分析すれば、外延的にも、內包的にも、想像以上に捕捉しがたき要因と條件とに充ちてゐるのである。

かかる「自由」を背景とし前提ともして、貿易が成立つてゐたのであるから、今われわれが、貿易に代ふるに交易を以てし、貿易に優るとも劣らざる物資交流の方式として、この交易を實施せむとすれば、そこによほど周到なる用意をもつて、かの「自由」に匹敵するだけの「體制」を準備しなくてはならないのである。長い間に人智の限りをつくして展開した「自由」に置きかへ得べき廣汎にして融通性と彈力性とに富む「體制」が設定されなくては、よく交易をして貿易の地位と重要とを保持せしめ難いであらう。この意味において、交易は、必ずや雄渾無凝なる「體制」下においてのみ、よく所期の目的を達し得るものといふべく、もし單に此處をしばり、彼處を釘附けにするにとどまる統督を以て臨むが如きことありとすれば、交易は窒息し、物資交流は停頓し終る他はないのである。かくして、交易體制の整備の問題は、往年の「自由」を優に凌駕するに足るべき天衣無縫の妙をそなふることによつてのみ解決の途を見出すべく、狹隘なる枠をつくり、小賢しき規律を定めるに類する措置を以てしては、まさに百年河清をまつにもひとしいであらう。

交易における「體制」が、かくの如きものと解して誤りないものとすれば、現下、日本の交易體制に關する施策は、必ずしも滿足すべきものではない。交易といふ新しい觀念を、具體化するだけの機運が充分動いてゐないといつても過言ではないであらう。すなはち交易は營利主義ではいかぬとか、計畫性がなくてはならぬとかいはれるけれども、交易を實現する上に決定的に重要と考へられる運營體制のもつべき規模については、充分重視されてゐないやうに見受けられる。勿論、すでに貿易統制會の機構も確立されてゐるのではあるが、それは他の諸統制會並に日本の

國內統制に關聯する傾向がつよく、大東亞の交易面自體に重心を置くべしとする要請から觀るときは、機構上よりいふも、全きものとはいひ得ない憾みがある。いひかへれば、國內に重點が置かれ、日本を中心とする物資交流の統制さへ一應できれば、それでよろしいといつたやうな、以前の貿易統制に準じた形態を蟬脫してゐないと思はれる節が多いのである。大東亞建設といふ新事態に卽應した構想を具現した場合として觀れば、それは國內經濟の側から決めた仕組だといふことは、何人にも明白であらう。交易體制としては、現地機構の重要性を高度にあらはしたものでなくてはならぬので、現行の統制組織の態樣では、仕事に無理があるといはねばならぬ。

世間には、物資交流それ自體を、交易だと考へる人もゐるやうであるが、交易といふのは、物資交流の根柢に橫はる全般的な價値賦存關係の整調をいふのである。すなはち全地域に互つて價値統制を行ふことが眼目であつて、各地域間の價値流動も、その綜合的な全體目的から規正されねばならないのである。この理由から、つねに全體の價値關係を睨み、その出入、移動を實施することの出來る實力機關が必要になるのである。而してその機關は、各地域の政治力が充分その活動を容認するだけの實力をそなへたものでなくてはならぬことは、いふまでもない。もしその綜合力が薄弱なものであつたり、また機關の實力の發動が局部的なものであつたりするのでは、全體を綜合して、價値の流動疏通をはかる上に、支障を來すわけであるから、眞に力のあるそして全體的な「體制」を設定しなくては無意味となるであらう。大規模にして强力なる體制なくしては、交易の理念は、空疎な觀念上の統制の代名詞にすぎなくなる。大東亞の物資交流を根據づける各地域間の價値賦存を全面的に委託するに足るほどの有力なる體制を運營することによつてのみ、大東亞の交易は、よく具體的重要性をそなへ得るものといはねばならない。

近く政府は大東亞省を設置して、現地に對する日本政治の要求する行政的措置に遺憾なからしめて、大東亞建設の目的實現に重大な發足をなさんとしてゐるのである。この劃期的なる行政上の施設は、おそらく上に述べたところの交易體制の、大規模なる構成を裏づけるもつとも有力なる支柱といはねばならぬ。勿論、現地の產業經濟の諸問題は、單に行政的措置に依存して達成し得るものと考へてはならないであらう。しかし大東亞貿易の「自由」がもつてゐた領域が、ともかく今後わが行政的施策の對象としてあたへられたのである以上、われわれは、これをよく交易上の「體制」と化する努力を重ねなくてはならない。またそれあるによつて、大東亞省の發動す

る「場」が、よく大東亞建設の目的達成に役立つことにもなるといはざるを得ないのである。

如何なる産業を各地域に保有し、物資の出廻りをはかり、その地域住民の經濟的負擔力を培養して、建設目的に協力せしむるかの方針を定めることは、交易問題の根幹であつて、各地域の價値賦存關係の基底である。この見透しのもとに、始めて、いかなる程度に物資の交流をなさしめ得べきかが把握されるのである。かくして日本の考へてゐる大東亞建設の經濟面は、この交易體制の確立、その運營よろしきを得ることによつてのみ可能である。戰時下、物資交流の國家的必要を敏活に充足するためにも、また悠久なる大東亞の發展のためにも、まづ吾々は、大東亞省の施策に即應して、經濟的充實のための體制を整備しなくてはならぬのである。（昭和十七年九月）

三

一般に大東亞經濟を一つの大きな自足自給の經濟、いはゆるアウタルキーとして理解することが行はれるやうである。そしてそれが相當廣汎な地域に渉るべきものと觀て廣域經濟であるといふやうに考へられるのである。大東亞經濟は、結果において實際にさういふことになると觀てよろしいのであるが、吾々が大東亞經濟を、かかる構成をもつものにしたいと希ふべきものではない。わざわざ自給自足の經濟をつくることが大東亞經濟の建設だといふやうに考ふべきではないので、ただ事態の成行がおのづから、一つの自給經濟圏をつくらせるやうになつたといふまでのことで、吾々が自ら求めて特定のアウタルキーをつくらうと努力すべき理由はない。これは例へていへば市場で品物が買へなくなつたとか、從來買附の店で思ふやうに品物を整へることが出來なくなつたとかいふので、已むを得ず買溜めをするとか、自分たちの手で品物を集める工夫をいたすとか、今までは買つて間に合はせてゐた品物を自分でつくるとかいふことを始めたといふことである。世界經濟といふ市場があてに出來なくなつたので、自分の處で畑を耕して間に合はせる、自給を計畫するに至つたといふわけであつて、從つてこの自給自足はやむを得ざるに出た措置であり、事の成行に對應するための機宜の方途に他ならぬ。吾々はさうありたいと希ふ經濟のあり方といふのではない。勿論生存の脅威を受けないために、國家國民として自給が出來て、食糧にせよ、國防資材にせよ他に依存しないでやつてゆけるといふことは、最も望ましい狀態に相違ないのであるが、歸著するところは自らの力をもつてそれらの物資が不安なしに獲得出來ると

いふことにある。したがつて自分のところの畑でなくては安心出來ないといふのは、八百屋が間に合はしてくれないことになつた以後のことで、もし治安狀態がわるく畑の作物がいつも荒されるといふのであれば、自分の畑だからといつて決して安心が出來ない。畑に柵を結び見張りをつけなくては菜葉一つ喰べられぬといふことになるので、安心して物資の獲得が出來るといふことには幾つもの段階がある。自給經濟だから安心だといふわけにはいかぬ。安心の出來る度合が經濟のあり方をきめてゐるといふに他ならぬのであつて、買溜めをしなくとも凌ぎがつくといふ安心の出來る時節には、誰も差當り不必要な品物を手持することをせずに濟む筈である。

したがつて今日大東亞經濟すなはち自足自給の經濟だといふやうにいはれ易いのは、世界市場が崩壞した結果生じた態樣であつて、もし再び吾々が世界中の力を自在に利用し得るといふ狀態にあるときは、特に大東亞の範圍を墨守して物資交流を考へなくてはならぬ理はない。いひかへると日本が中心となつて大東亞經濟をとりまとめることになつたのは、暗默に世界經濟上の力の釣合ひにおける一つの單位であつたことを證明してゐるのである。吾々は世界に、今後如何なる方式によつて經濟を築き上げたらよいかの實驗を大東亞でやつて見せたいと考へ、いはばその實例として大東亞經濟を建設せむとしてゐるのである。自分たちのところだけはこれでやつてゆく、他所のことは知らぬといふのではない。これから先の世界はかかる仕方で進まなくてはならぬのだぞといふことを、世界中にはつきり示すことが大東亞經濟の建設であつて、米英のやうな經濟の建方ではいかぬといふことを如實に示さうとするに他ならない。新しい世界經濟は如何なる理論に基づいてゐるのであるかを、吾々は大東亞經濟の建設自體において立證しようといふのである。從前の世界經濟は、その本質から申せば資本主義經濟であつた。世界を風靡した資本主義の經濟機構を概念的に世界經濟と呼んでゐたのである。どこの國の資本主義といふのではなしに、何となく資本主義といふものが國家をはなれて、いはば資本家的利害得失のみの世界が出來上つて、そこに世界經濟が實際にあると考へたのだ。そこで世界を通じての階級鬪爭といふ觀念的な夢のやうな構想が相當に物を言ふ時節が出來てゐたのであつた。

ところがこの世界經濟なるものが、案外にもいはゆる「持てる國」にとつて都合のよい番犬であつて、「持たざる國」は絕えず嚙みつかれる危險のあるものだといふことが明かになつた。「持てる國」も勞働爭議などによつて番犬に指ぐらゐは嚙まれたことがあつたが、大體において番犬

として忠實にはたらいてくれたのが世界經濟であつた。すなはち米英の資本主義經濟は、世界經濟の名のもとに一應の安心をいだかせながら、嚙みつくことを繰りかへしたのである。「持たざる國」は「持てる國」の資本の餌食となる他はないことになつて、いはゆる持たざる者は持てる者の「持ちもの」にならうとする趨勢となつた。この度の大東亞戰爭はまさしくこの趨勢を斷乎として阻止し、再び起つ能はざらしめた變革である。すなはちこの大戰爭はまことに大きな文明の戰爭であつて、世界史的に觀て極めて意義重大であると申さねばならぬ。

然らば米英資本主義と異つた世界經濟態勢は如何なるものであるべきか。それは資本の意思によらずに、國家の意思によつて生產を營み、消費を賄ふものでなくてはならぬのである。國家國民の生存のためにする生產であり、資本の充用でなければならぬ。儲かるからといふので、資本利潤のみを標準とする經濟から轉じて、國民國家の生存を全うするための經濟に移らせねばならぬといふのが、吾々が大東亞經濟の建設を通じて世界の人々に示さうとする新しい世界經濟の構想なので、この趣旨の建設が進むことによつて、始めてよく米英依存を捨てたとか捨てさせたとかいふことが出來るのである。したがつて吾々が若し單にイギリスや、アメリカが從來東洋に於てやつてゐた資本主義的支配を却けさへすればよいとか、それにとつて代つて自分たちが資本主義經濟の實權を握ればよいとかいふのであれば、甲にかへるに乙を以てしたといふのみで、世界の文明はそれによつて何をも加へない。吾々は米英の水準にとどまるかかる態度を潔しとしないので、そこに米英を擊つといふことの眞の意義が横はるものといはざるを得ない。國家の安全を保證し國民の生存を確保するための經濟を樹立したいといふことは、少くも今日まで自覺的な經濟の構想となつてゐなかつた。經濟が發達すれば國民の衣食住も豐かになる、自然軍艦も出來、大砲も殖えるだらう、といふことで濟ませてゐた。世界經濟の番犬に嚙みつかれながらも俗にいふ滾れ倖ひをあてにして、自分たちの經濟も發達してゆくとよろこんでゐた。やがては身を亡すことになるにもせよ、その日その日が氣樂であるので居候をきめこんでゐた國々が多かつた。その態度を一切大東亞から、やがてはこの地上から、追ひ拂はふといふのである。

吾々は計畫的に國防の充實と民生の安定とをもち來す方策をもつて、經濟の編成をなさねばならぬ。資本利潤はあがらないにしても、資力を必ず一定の方面に振向けなくてはならぬ。儲らぬことには手を染めないといふ仕方を擲たねばならない。一定の目的を達し、一定の利用を獲得す

るために費用を合理化しようといふのが建前であつて、從前のやうに、一定の資本を以て出來るだけ多くの利用をつくり出すといふのとは全く異るのである。利用を多からしめるためには消費財ではなく、再び生産のために役立つ物、すなはち生産財をつくるのが當然であり、利用を無限大ならしめるために、擴張再生産が行はれて、資本主義經濟が彌が上にも發達したのであつた。今後はさうではない。一定の利用が豫め計畫的に設立されるので、それを合理的に處理してゆくので、ここに大なる變革が生じて居るのである。

共榮圏の物資交流は、第一に國防の充實を趣旨とするものでなくてはならぬ。貿易上の利害によつて左右されるといふのではない。共同防衛の目的の達成上必要とする資材の供出のため、全地域は出來るだけの努力をしなくてはならぬのである。第二には民生の安定をはかる趣旨によつて、物資交流がなされねばならぬのであるが、この目的のために、ある程度それぞれの地域において自給生活を營むことが、當面の必要に應ずるものと考へられる。勿論ひろい地域内の需要を一まとめにして、大量生産によつて一氣に片づける方が原價を最小ならしめる方策ではあるが、今日各般の情勢より判定して、かへつてそれぞれの地域において、需要の實情に即應した規模の生産をなす方が妥當であるといへる。この場合、たとへば日本内地から輕工業乃至雜工業を各地域に移駐せしめて、現地生産を起し、日本内地からの船腹を節約する方が自他のためだとの意見もあるのであるが、この現地移駐について、特に考慮を必要とするのではないかと考へらるるのは、交易上の收支との關聯である。申すまでもなく産業の現地への移駐は、日本内地にある生産力を、他の地域に移すのであるから、若しただ行き放しといふのであれば、日本側から申せば一種の資本逃避になるのである。それが一つの投資、すなはち資本の投下として役立ち、その資本收益が交易物資の獲得の見返りとなるのであれば、必ずしも資本逃避として遺憾な事に考ふべきではないが、もしこの現地へ移駐された産業が、日本側の交易收支の受取勘定に役立たずにそれから脱落してしまふとすれば、内地で産業が生み出した製品の輸出のときは、その代金が受取勘定になつてゐたものが、その産業自體が輸出されたために、全く空になつてしまふ。これは交易面から考へて不合理と申さねばならぬ。これをひろく觀て、たとへば滿洲國の産業經濟が充實して、大東亞經濟全體がよくなつてゆきさへすれば、差當り現地への移駐産業が、日本側の交易收支に役立たなくとも大局からいつて構はぬではないかといふ意見も立つであらう。然しながら、

大東亞經濟の建設は、大きな襲にやたらに秩序もなく手あたり次第に投り込むやうな仕方をなすべきではなく、各地域それぞれの經濟間に程よき釣合ひを、●保たしめなくてはならぬのであるから、日本側の受取勘定になり得るものは、正當に且つ充分に活用を怠らぬ必要がある。現地生產の奬勵は、各地域の自給を助ける點から結構であるが、移駐の場合には單なる資本逃避にならぬやう特に考慮すべきである。

世間には國際分業論を鵜呑みにし、產業立地論を早呑込みして現地への生產移駐を無條件に是認する向きもあるやうであるが、國際分業論は、米英資本主義思想の殘滓であり、產業立地論は、國民國家の重要性を輕んじた經濟自然主義思想に陷り易いから、それが具體的施設については、充分なる考慮を必要とするものといはねばならぬ。（昭和十七年十二月）

世界文化と大東亞

○

支那事變は、一つの世界史的な事態であつて、決して單に日本と支那との間にもち上つた戰爭といふだけのものではない、といふ見解は、事變の進行過程において相當はやく一般に認められたことではあつたが、大東亞戰爭になつて見て、その認識が極めて具體的な感じをあたへることになつた。そして東亞の協同體あるひは共榮圈といふ思想が、にはかに切實なものとして、受容されることになつたのであるが、その反面には、共榮圈とか、大東亞といふものが、獨立したものとして、世界の他の部分から切りはなされたものの如くに觀念される傾向もつよくあらはれてゐるのである。つまり支那事變を、世界史的な意義をもつものだと言ひ合つてゐた間は、われわれは、案外にも全世界の擴がりと、全人類の歷史の流れの裡に、日支間の事態を置いて眺めて見

やうとする態度を持してゐたのであつたが、大東亞戰爭をたたかふことになつてからは、世界の大勢がわれわれの威力をもつて左右されることになりつつあるために、世界といふものを、それまでのやうに、非常に大きな幅のあるまた奥行の深いものとして、受けとる必要を感じなくなつたやうに見える。すなはち世界などといつても、程が知れてゐるといふ見透しをもち始めたといつてもよいかもしれない。

現實に掌の中にとり入れて見て、かねて底知れぬやうに考へた世界といふものが、さほどおどろくべきものでもなかつたといふ幻滅感がはたらいてゐるらしくもある。

そのために、實際に、世界といふ理念が影のうすいものになつて、いはば大東亞とそれ以外といふほどの地域的な構成態として、世界を觀念しても差支へないものと考へてゐるやうである。だから、大東亞戰爭を、今更、世界史的意義のあるものだと斷る必要もなくなつて、むしろわれわれ自ら世界の歴史をつくりつつあるのだといふ、信念を深くいだいて行動してゐる頼母しさが見出されるのである。

かやうな飛躍的な變化の裡に、大東亞といふ目標を揚げて、これまで浸潤してゐた英米文化を排棄してしまはふとするつよい意慾が高揚されて來てゐる。そこに、あくまでも對抗的な氣分ではたらき彼れを追つて、是れをうちたてなくてはならぬとする熱情が漲つてゐるのであるが、われわれとしては、更にその對抗心理を超えて、新文化の理念もおもふべき時機に達してゐるのである。もちろん日本は、かねて明かに八紘爲宇の心に生きむとする努力をつづけて來てはゐるのではあるが、大東亞の經營に忙しくなつてから、思想的に幾分局限されてはせぬかといふ懸念を感ずる。といふのは、ややもすれば、人々は、英米の文明と異つたものでなくては氣が濟まぬといふ行懸りに心を捉へられて、全世界が仰ぐべき新しき世代の光を求める心構へが、とかく抑へられ勝ちであるかに見受けられるからである。

たとへば學問の世界においても、何らか日本的なものとか、大東亞に特有なものとかを築き上げたいといふ熱意にもゆる人々が、つねにこれまでの理論とは異つたものをつくらなくてはなる

きないといふ焦燥感をすら抱いてゐるのではないか。

もしこれに凝りすぎると、豁達明朗を缺いた小ヂンマリした研究になり終つて、かへつて八紘爲宇の學問ではなくなる虞がある。日本のこと、支那のこと、南方のことなど、これまで閑却されてゐたことを掘り下げて研究してゆくことに、誰れも異存はないが、それらの事象を內容としさへすれば、新しい學問の研究だといふわけにはいかぬ。中には、たとへば日本や支那の現象を取扱つてゐる日本の人々が、イギリスやアメリカの學者たちがつくつた研究方法を踏襲してゐる例も少くない。研究者が日本人であつても、その研究の方法が日本流のものでなければ、たとへ、日本や支那の現實を問題にしたからといつて、別に日本學問として世界に示すわけにはゆかぬのである。大東亞々々といふこともよろしいが、ただ空疎な、內容のない標語になり終らせない不斷の用意と努力とがいる。と同時に、その大東亞が、いはゆる大東亞の內だけに通用する大東亞でなく、全世界をして充分納得させるに足る迫力のある、具體的な妥當性をそなへたものでなくてはならぬであらう。

眞に日本的なるものの妥當性は、われわれ日本人の間のみならず、世界の萬人がこれを仰いで日本的なるものとして得心すべき理由のあるものであらねばならない。勿論ひろい世界の中には、わざとそれを否認しやうとする俗にいふつむじ曲りもゐるであらうが、少くも眞實を識らうとする人々には、どうしても否み得ぬ理由をそなへたものであれば、それが日本的なるものとして、世界に對して、古今を通じて、妥當性をあたひするものだといふべきである。そこに到れば、日本的なるものが、そのままにまた世界的なるものであり得るのだ。この意味からいふと、日本的な學問が確立するための根本は、必ずしもその取扱ふ內容が、日本の事柄であることを必要としない。支那のこと、西洋のこと、その他一切の事柄を、日本的な流儀で處理できることが第一義である。その日本的な研究方法といふものが、世界の萬人が仰いで、眞實と思ふべき理由をそなへるところにこそ、日本學問の確立がある。從つてわれわれは、むしろ進んで西洋の事象についても、これまで思ひ到らなかつた研究を築き上げることを企てなくてはならないのだ。彼らの研究方法を以てしては、把握出來なかつた問題の解明をあたへるほどの氣魄をもつべきである。

○

現に大東亞共榮圏について語るとき、何がその共通の基礎であるかを、反省して見る必要がある。たとへば亞細亞的なるものがそれであるだらうか。謂ふところの亞細亞的とは何であるかを突き詰めて考へて見た場合に、漫然東洋的といふことを聯想し、西洋文化に對立するものとして理解してゐることも尠くないであらう。すなはち西洋文化がもつ纒りによつて、それに對立するものが、何となく統一性をそなへたやうに感ずるにすぎないので、東洋文化自體としては、何によつて纒りを見せてゐるかが、さらに判然としてゐないのではないか。したがつて、大東亞を亞細亞的とか、東洋的とかいふ文化的特質によつて性格づけることに、現在の階梯にあつては、相當、難問があるといはねばならない。

われわれは、軍事上また政治經濟上、大東亞を概念することに、差當り困難はないとしても、思想文化の上では、全く未拓の境地に立つてゐるといつてよいのである。しからば、如何にしていはゆる大東亞文化をあきらかにしてゆくべきか。またさう出來るであらうかといふ問題に當面するわけであるが、これには、前に考へたやうに、日本人たるわれわれが、一つの新しい世界文化をうちたてるといふ覺悟と反省とによる他はない。恰も軍事上、政治經濟上、日本の流儀で大東亞を築き上げやうとしてゐるのと同じく、大東亞文化も日本の流儀で性格づけて見るべきだ。しかもそれは東亞とか亞細亞とかに囚はれずに、一つの清新な世界文化をつくるといふ考へのもとに努力すべきである。結果においては、東洋文化の世界支配であつても、その動機、目的の上では、あくまで世界の萬人を納得せしむべき、世界文化の理念によつて建設がなされねばならない。東洋文化をつくらうと狹く考ふべきものではない。

○

日本が世界文化をつくるのである。しばらくは西洋の人間は、それを日本文化といひ、大東亞文化とよぶかもしれない。東洋文化の進展として理解するでもあらう。しかしそれが眞に文化の理想を顯示するものである限り、彼等もそれを世界文化として受容するに相違ない。このことは西洋の人間のみの問題ではなく、支那あるひは印度の人間についてもあてはまるであらう。始めは、日本人が提唱し且つ努力してゐる文化建設の方向だといふやうに、傍觀してゐたものが、しだいにそれに共鳴し、同甘共苦の態度に出ることになりつつあることを觀れば、容易に首肯出來

る消息である。この支那あるひは印度の人々の心境の推移は、やがて世界萬民の動向を卜すべき契機と考へてよいのである。だからわれわれ日本人は、何も、その狙ひを大東亞文化の建設に限定すべき謂れはない。世界の文化をつくることをこそ念とすべきであらう。

○

これまでは西洋文化の世界支配があつた。歐米に特有な事情にもとづく理論を、世界に妥當すべき筈の原則ででもあるやうにきめて、それが東洋にあてはまらない場合は、屢々東洋の住民の民度が低劣であるためであるかの如くにさへ極めてしまつた。たとへば、資本主義經濟の發展に關する亞細亞的停滯の概念に見らるる如くに、世界の人類は、何時、如何なる場合にも、近代歐羅巴國民の爲せる資本主義的經濟發展をなしとげなくてはならぬかのやうに思ひ込んで、その發展の方式にあてはまらないときには、その方式の妥當性に疑念をさしはさむことなしに、あてはまらない經濟事情の側に缺陷があるものと斷定するに勇敢であつた。われわれは、この西洋理論の世界支配における迷信に倣ふことは、もちろん堪へがたい次第ではあるが、自らの建設する思想、理論乃至文化を、全世界に、また全人類に妥當せしめむとする氣魄と努力とは、深く味はなくてはならぬと考へるのである。（昭和十七年九月）

世界史の轉換

一

西歐羅巴の沒落とか、西洋文明の終焉とかいふ問題は、今次の大戰爭によつて、いよいよ明確になつたといへる。さきの世界大戰なるものは、實に西歐文明の終局における決算であつた。現在の戰亂は、まさにその決算につづく清算にもあたる世界史的意義に値ひするものであらう。このいはゆる第二次世界大戰によつて、歐羅巴國民は、幾世紀かにわたつて營んで來た文明に結末を與へようとしてゐると看なくてはならない。彼等が、その文明の廢墟のうちから、再び新しい文化を創成し得るか否かは、容易に豫測できない。暫定的な解決で、今次の大戰爭を休止せしめると、さきの世界大戰の結末と同じく、次の大戰爭を約束することになるだけだ。

すなはちヴェルサイユ體制なるものは、西歐文明の更生を確保するものではなくして、かへつ

て窘迫を促すやうなものであつた。ドイツ國民の犧牲において、世界平和をもち來たさうとしたものであつたから、出來上つた和平狀態それ自らのうちに、かかる犧牲から由來する反噬と動搖とを包藏してゐたといはねばならぬ。生存せんとするドイツの國民的現實を、殆んど無視して築き上げた平和機構は、改訂されなくてはならぬといふ考へは、既にその當時、聯合國側においてすらあつたのだ。自來二十年、歐羅巴に平和はなかつた。そしてつひに現在の大動亂に立ち到つたのである。彼らが平和をつくり得なかつたのは、勿論、生存の現實に對する國際政治上の認識が缺けてゐたことによるのではあるが、かかる認識を缺いたといふのも、西歐文明の老成がさせた業だといへぬことではない。老いたる文明が、豁達明徵なる精神を失つて、ただドイツを危惧するの念に驅られてゐたことに基づくものといはねばならぬ。いふまでもなく、卓越した政治家がゐなかつたわけではあるまい。しかし大廈の覆らんとするとき、一木のよく支ふるあたはざるが如きものがある。沒落過程にある西歐文明は、かくして年とともに、急速度の凋落をあらゆる部面に示しつつあつた。その間、科學の進步、機械生產の驚くべき發展のあつた事實を擧げて、西歐文明の駸々乎としてやまざる勢力を讃嘆する人も少くないであらうが、その科學的、生產的

な進展なるものこそ、おのれの首を締め上げるにもひとしき破壞力の增强になつてゐたといつてよい。文明を築き上げたその力によつて文明は沒落に追ひ込まれつつあるのだ。科學的支配の福音に醉ふた西歐文明は、今や陶醉のうちにおのれを滅ぼすの餘儀なき昏迷に陷りつつある。かつては新天地の開拓に役立つた活力は、ただ內にとぐろをまく力の無限地獄を現出することになつて、西歐文明はその光と望みとを失つてしまつてゐるのである。この文明によつて代表されてゐた近代の世界史過程は、まさに重大な轉換期にのぞんでゐることは、否み得ぬ現實といはねばならぬ。

二

われわれの身邊に生起する事象のうちから、世界史の轉換といふやうな、形而上學的な問題を明かにする手懸りを見出さうとした場合、もつとも捉へ易いものは、國家と經濟社會との交涉である。すなはち國家が、經濟社會に對して如何なる措置をとつて來たかを跡づけて見れば、この幾世紀かの世の中の變遷といふものが、極めて明瞭にわれわれの認識に泛び上つて來るのである。

近代の國家は、概ね、經濟社會を自由に發展せしめて、その蓄積した生產力乃至財力を、間接に利用することをその方針として來た。だから國家と經濟社會とは、一應並列するといつたやうな姿を見せてゐたのである。これが、いはゆる自由主義時代における兩者の交涉であつた。國家は、市民社會のうちにあつて、恰も一市民のごとくに極めて遠慮深く、むしろ他の市民と同格にならぶことを賢明なる措置だと考へて、出來るだけ目立たぬやうに進退してゐたのである。精々乘り出した場合にあつても、たとへば各種の專賣制度のごとく、市民的經濟社會における市場を出來るだけ重んじて、そこに獨占企業を營むことを志してゐたのである。國家權力をもつて、市場獨占を敢行したといふ表面上の專制的態度にも拘らず、その動機のうへから觀れば、あくまで既存の經濟社會の市場機構に便乘して、一定の財政上の要求を充さうとしてゐるにすぎない。場合によつては、市民的な經濟社會の發達を幫助する目的をもつて、各個の企業によつては達成し難い方面の育成强化をはかるべく、獨占專制をやつてゐた。その間に日を逐うて充實した經濟社會は、逆に國家を助成機關として頤使し、時にこれを傀儡化するところまで進むに至つてゐたのである。

かく市民的經濟社會を充實せしむる核心をなしたものは、更めていふまでもなく、近代資本主義であつた。その發展は、前世紀の後半におよんでは、次第に國家の勢威を凌ぎ、いはゆる世界經濟の牙城を築き上げる地盤を確保するに至つたのである。資本主義經濟は、超國家的な全世界にわたる實力政權にも喩ふべき威力を揮ふことになつて、漸く各國家に對する重大な脅威となり、侮り難き强壓となつた。各國家にとつては、忠實な番犬ではなくして、手にあまる猛虎を飼ふの念を抱かしむることになつた。資本主義經濟の發達は、しばしば、國內秩序の不安を醸し出さしめて、國家と經濟社會との交渉は、險惡の一途を辿ることになつたのである。經濟社會を市民的自由の下に置いて、これを利用しようとした國家は、かへつて、いはば飼犬に手を嚙まれる仕儀となつて、國家と經濟社會との相剋面は、一大轉換を避け得ないものとなつた。それでも、いはゆる持てる國にあつては、國內での相剋を緩和するだけの餘裕がのこされてゐる。すなはち、自國の植民地經濟、あるひは資本的支配下にある弱國の經濟社會に對して勢威をおよぼすことが出來るから、自國の國家に反撥することを緩和する途がある。この裕りのあることによつて、持てる國ともなつてゐるのだ。しかるに、持たざる國にあつては、かかる緩衝領域といふものがない。したがつて、それらの國にあつては、國家と資本主義經濟との全面的對立、あるひは相剋を、速かに克服しなければならない。植民地資源に乏しく、資本主義經濟の發達において立ち遲れたいはゆる持たざる國としては、新しい世界秩序によつて、この局面の打開をなさざるを得なかつたのである。世界史の轉換は、經濟文化の上よりいふならば、乖離せる國家と經濟社會とを融合せんとする試みのうちに現れつつあるといふことが出來る。

三

これまで東亞に位する大小の經濟社會は、世界の經濟機構のうちにあつて、日本を除いては、いづれも資本主義活動の客體であつて、主體ではなかつた。國際政治においてさうであるごとく世界經濟にあつても、主體性をもつて動ける國民國家は、ほとんど東亞にない有樣であつた。いはゆる東洋に對する英米の侵略といふのは、東亞の社會が、いはば物扱ひされて來た事實をいふので、世界史上の主體たる地位は、東亞の民族社會に與へられてゐなかつた。その意味では「東亞經濟」といふものはなかつたといつてよい。いひかへれば、世界史に東亞といふものは、顏を

出してゐなかつたのである。地理的には東亞といふものは考へられても、政治的に、經濟的に、東亞はなかつたといふべきだ。東亞經濟といふ概念は、日本を中心とする新しい事態の認識成果だといはねばならない。むしろ、世界新秩序の具體化されたものであつて、まさしく世界史の轉換を考へ合はせることなくしては、思ひおよばぬ概念である。さらに世界史の轉換の軸ですらあるべきものだ。東亞經濟の新生から、新しい世界史過程が展開される約束をもつてゐるといへるだらう。

東亞經濟といふと、とかく地域的に考へられ易い。それは物象的な條件を主とした場合の考へである。世上いふところの廣域經濟として、東亞經濟あるひは大東亞を云々するときは、おほむね然りである。滿洲、支那、泰、佛印、南方諸地域等を擧げて、大東亞共榮圏を構想する人々が、必ずしも物象に捉はれたとか、地域に拘泥してゐるとか評すべきではないかもしれぬ。共榮圏といふからには、いはば協力態勢を想定してゐるので、ただ經濟問題をとりあげてゐる以上、その廣域觀念が物象的になり、地域的になるのは、當然だともいへる。しかしこの廣域經濟といふ通念が、かなり物理的空間を重んじ、經濟地理的な志向にとらはれてゐはせぬであらうか。東亞經濟といふものは、廣汎なものだといふ場合に、力として宏大なものを思ひ泛べようとしないで、地域的な大いさを考へたがる嫌ひがある。生産力、あるひは資源力の觀點から、廣くいつて經濟力、世界勢力の觀點から、廣域經濟といふ理念を、しみじみと味得したと思はれる場合が、案外少くないやうに感ぜられるのである。地下資源が無限にあつても、それを踏んで歩いてゐるだけでは、經濟力にはならないことは、いふまでもない。勞働に適した人間が、いかに澤山にゐても、生産組織に吸收されてゐない限りは、その邊りの土産をたべ荒すだけで、逆效果をもち來すにとどまるといはねばならない。經濟力に乏しいとあれば、廣域であつても、經濟的意義は狹小といふべきであらう。

われわれの求める東亞經濟は、世界的な經濟勢力としての「廣域」性のもので、寄り合ひ世帶の、いはば加へ算的に合計した尨大なものといふのではなしに、內包量の大きな、底知れぬ深さのある經濟たることを要する。したがつてそれは、日本の集結力を中心とした構成體でなければならない。協力といつても、平面的に各地域が並存する外延的性格のものであることを許さないので、あくまで內包的に、立體的に結集された經濟力であるべきだ。かかる經濟態勢によつての

み、來るべき世界秩序の經濟構成に與り得べきもので、いはゆるブロックといふのは、經濟的內包量の甚大なるものを指すのである。單なる廣域といふが如きものでない。建設さるべき東亞經濟は、日本によつて日本を通じて集結せられたものでなければならない。

四

たゞ大東亞々々といひなれてゐると、いつの間にか、さまざまの生活態度が、自然に一つの制約を受けて固定した形態を執る傾向をもつことになる。現在、われわれの間に、多少とも世界意識に對する望ましくない狹隘な約束が生じてはゐないだらうか。よく反省して見る必要があると思はれる。

大東亞建設といふのは、西歐資本主義からの東亞社會の解放といふだけに止まるものでは無論あり得ない。しからば大東亞をもつて、自給經濟圈とし、いはゆる大東亞文化をつくることをやればよいのか。それで滿足するのであれば、かつて唱へられた世界資源の再分配といふ程度の思想を超ゆるものではないだらう。資本主義勢力の世界地圖を塗りかへるための鬪爭として、この大東亞戰を終らしめまいとする思想にとつては、到底首肯し得ぬこととといはねばならない。われわれは、東亞經濟そのものを固めることを志してゐるのではない。大東亞をつくつて見たいと念願してゐるのではない。東亞經濟の新生を通じて、新しい世界文化を創成しようとしてゐるのだ。大東亞々々といつてゐると、われわれの志が、西歐文化とは別な、大東亞に特有な文化をつくりたがつてゐるやうに聞えるのであるが、何も殊さらにアジアだけに通用する局部文化を築きたがつてゐるわけのものではないのだ。これまでの世界文化では動きがつかなくなつた現前の事實を直視して、新秩序のために起ち上つたからには、どこに遠慮の要るはずもない。われわれが、世界文化はかくあらねばならぬと主張すべきである。出來上つてゆく途中において、その結果を觀て、あれは東洋的だとか、大東亞文化だとか批評されることだらう。だからといつて、われらの志が、大東亞文化そのものにあらねばならぬ理由は、毫末もない。これからの世界形像は、近代歐羅巴國民の想定したところを超ゆるものであり、彼らの文明の惱みを解決するに足るものであることを、明かにしなくてはならない。大東亞だけに通用する自家用文化だと思つて、アッサリした考へ方をしたり、アジアを誇示するために、變な對抗意識を振りまはしたりする程度の考へ